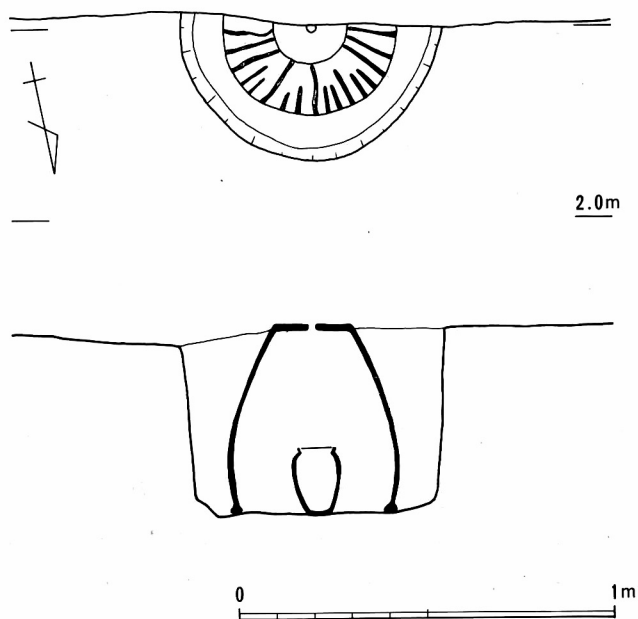


SK2506 3区の西端近くで検出された埋甕である。径38.7cm、高さ47.8cm
の甕を使用した、小便甕である (No.943)。



第39図 中ノ町B地区平面図(下層)と北・東・南壁断面図

Ⅶ 遺 物

明石城からは出土した遺物は、コンテナに換算して、1000箱に及び、その内容も陶磁器を始めとし、泥人形、瓦、ガラス製品、木製品、金属器と多岐にわたって出土している。報告書作成にあたっては可能な限り、これらの遺物を報告するように努めたが、結果的には今回報告した遺物は報告可能な遺物の25%に過ぎず、かなりの遺物は報告から割愛する結果となった。報告する遺物の選別にあたっては、遺構出土の遺物を主とし、とくに明石城武家屋敷のⅠ～Ⅴ期の時代区分を代表する遺構から出土した遺物を中心に報告している。

1. 陶磁器

明石城から出土した陶磁器は、土師質土器、瓦質土器、無釉陶器、施釉陶器、磁器類が出土している。その内訳は、主に燈明具として使用された土師質・無釉陶器の皿、土師質鍋、丹波焼・備前焼の無釉陶器挿鉢をはじめ、兵庫県瀬戸内側の在地系諸窯（明石焼・朝霧焼等）の製品と推定される施釉陶器類（碗・行平・火入れ）がある。これら以外に京焼、瀬戸・美濃焼の施釉陶器皿・甕、萩焼施釉陶器碗、肥前焼陶磁器の皿、碗類等が出土している。出土した陶磁器のなかでも肥前焼磁器の出土量が圧倒的に多い。この項をまとめるにあたって、肥前焼陶磁器の鑑定は大橋康二氏（佐賀県立陶磁文化館）にお願いし、その成果は観察表備考欄に記載している。

また、在地系の陶磁器については、青木重雄、真野 修、稲原昭嘉（明石市教育委員会）の各氏に有益な御教示を得、その成果は、肥前焼陶磁器と同様、観察表備考欄に記載している。

個々の陶磁器の詳細については観察表に委ね、ここでは土師質皿・鍋、無釉・施釉陶器の皿・挿鉢を主体に述べていく。

土師質皿

土師質皿は、その技法および形態的特徴からA～Eの5つに大別できる。

A類：口縁部内外面がヨコナデ調整、外面体部がユビオサエ調整を施す手捏ねの皿。

B類：回転糸切り手法による底部切り離し、内外面回転ナデ調整を施すロクロ使用の皿

C類：施釉の皿。調整はB類と同じ。

D類：受口部をもつ施釉の皿。調整はB類と同じ。























E類：有脚・受口部をもつ施釉の皿。調整はB類と同じ。

これらA～E類の皿は、各類ごとにその形態の特徴から幾つかに細分できる。

A 類

1類：底部が平底で口縁部が短く外傾する皿。内面のヨコナデは底部中央まで至る。口径10cm前後、器高1.5cmを測る。

表3 土師質皿器形分類表

分類	A	B	C	D	E
1	 635	 127	 327	 170	1類  716
2	 528	 128	 371	 408	
3	 690	 208	 214	 370	2類  766
4	 695	 609	 341	 621	
5		 611		 659	
6		 333			
7		 348			

2類：底部は平底で、内面口縁部を強くヨコナデを施すため、内面の底部から口縁部にかけての立ち上がりが急である。調整はA類のなかでは丁寧である。口径10～12cm、器高1.5～2cmを測る。

3類：平底の底部から口縁部は内彎気味に立ち上がる。内面底部中央は不定方向のナデ調整を施す皿が多く、また内面にユビオサエの凹凸が顕著に残る粗雑なつくりである。口径10～12cm、器高1.5cm前後を測る。

4類：丸底の底部で、口縁部は内彎気味に立ち上がる。内面底部中央は1方向のナデ調整を施す。口径9～11cm、器高は2cm前後と高い。

B 類

1類：口縁部は内彎して立ち上がり、端部を丸くおさめている。外面口縁部下位は強い回転ナデ調整を施し、凹んでいる。内面の回転ナデは底部中央まで及んでいる。口径9cm前後、器高2.5cm前後を測る。

2類：口縁部は直線的に外傾し、内外面とも回転ナデ調整の凹凸を顕著に残す。内面の回転ナデ調整は底部中央まで及んでいる。口径9cm前後、器高2.5～3cm前後とB類のなかでは高い器高値を示す。

3類：内面底部と口縁部の境に屈曲部をもち、口縁部は直線的に短く外傾する。内面底部中央は一方向のナデ調整を施す。口径9～11cm、器高1.5cmを測り、量的には口径9cm前後の皿が多い。

4類：内面口縁部と底部との境は明瞭ではなく、滑らかに移行する。内面の回転ナデ調整は底部中央まで施している。口径6.5～11cmと幅をもつが、器高は1.5cm前後と一定である。

5類：内面口縁部と底部との境に若干凹みをもち口縁部は斜め上方に大きく外反する。内面の回転ナデ調整は底部中央まで施されている。口径7.5cm前後と10cm前後の法量に分かれるが、器高は1.5cm前後に収まる。

6類：内面底部と口縁部の境は明瞭ではなく、滑らかに口縁部に移行する。口縁部は大

きく外反して立ち上がる。内面の回転ナデ調整は底部中央まで施される。

口径は5類と同様口径11cm前後と8cm前後に分かれる。器高は1.5cm～2cmと幅をもち、口径11cm前後の皿が高い傾向にある。

7類：内面底部と口縁部の境に屈曲部をもち口縁部は直線的に外傾する。内面の回転ナデ調整は底部中央まで施される。

口径は9～11cmと幅をもち、器高は2cm前後と高い。

C 類

1類：内面底部と口縁部の境は若干凹んでおり、口縁部は大きく外反する。内面の回転ナデは底部中央まで施される。口径は6.5～8.5cmと幅がある。

2類：内面底部と口縁部の境に屈曲部をもち、口縁部の立ち上がりは直線的である。底部は若干突出した円板状高台様を呈する。内面の回転ナデは底部中央まで施される。口径11cm、器高2.5cmとC類のなかでは大型の皿である。

内面底部には「明石口」の刻印が施されるものがある。

3類：内面底部と口縁部の境には屈曲部をもたず、滑らかに口縁部へ移行する。口縁部は短く外反する。内面の回転ナデ調整は底部中央まで施される。

口径6cm、器高1cmを測る。

4類：底部は上底気味で口径に比して底径の小さい皿である。内面底部から口縁部への移行部は滑らかで、口縁部は大きく外反する。内面の回転ナデ調整は底部中央まで及ぶ。外面の施釉は1～3類のように、口縁端部付近で留まらず、口縁部下位まで及ぶ。

D 類

受口部の位置で3つに分類した。調整技法は内外面とも回転ナデ調整を施し、内面の回転ナデ調整は、底部中央まで施されている。底部の切り離しは回転糸切り手法を用いている。施釉は内面および外面口縁端部に施されている。

1類：受口部が内面底部付近に作られる皿。芯置部をもたない。口径9.5cm、器高1.3cmを測る。

2類：受口部の位置が口縁部とはほぼ同一の高さに作られる。芯置部を1箇所もつ。口縁部は中位で括れ、短く斜め上方に立上がる。口径6cm、器高1cmと小型の皿である。

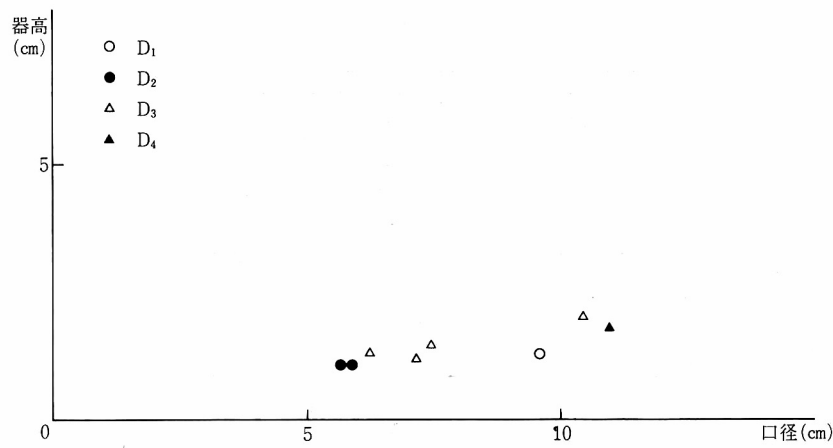
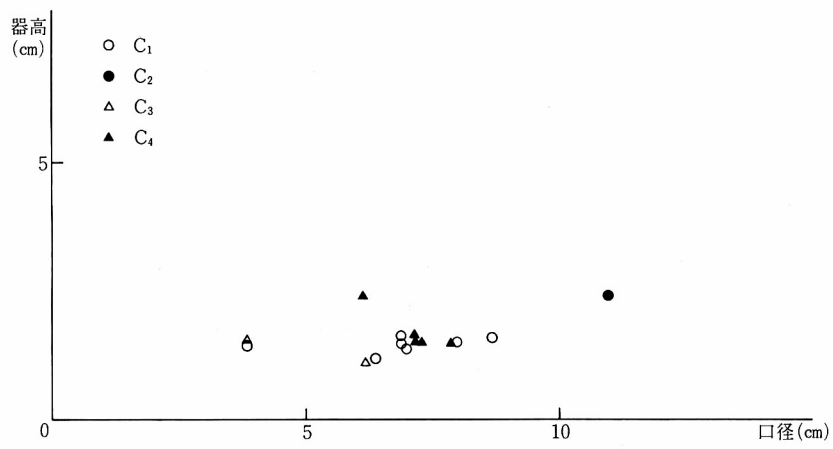
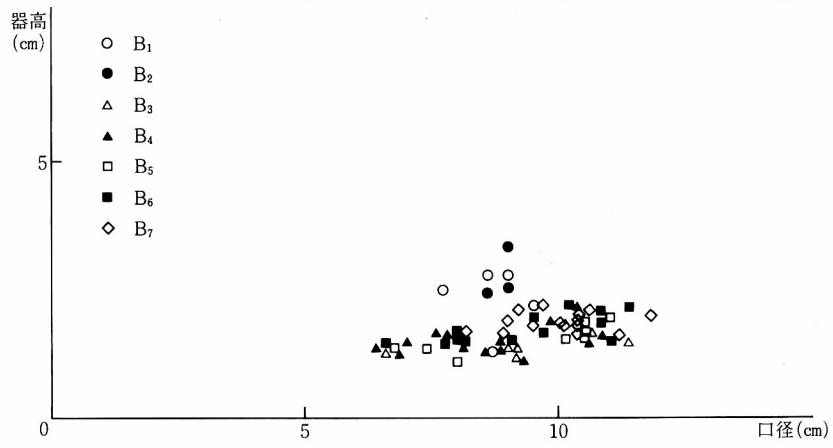
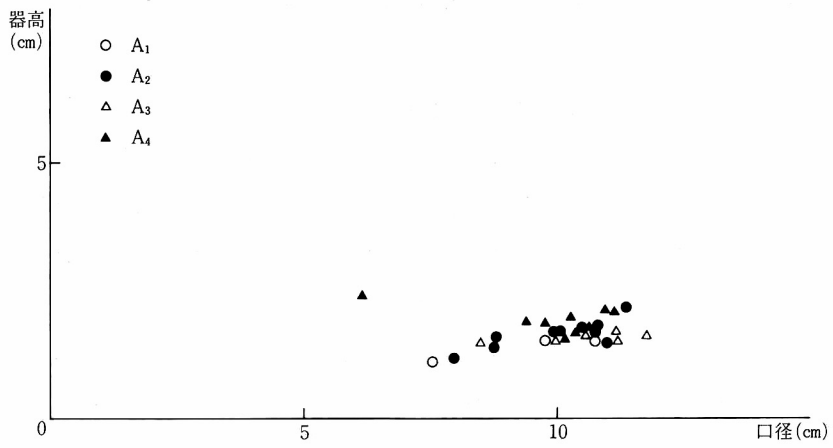
3類：受口部を内面口縁部中位付近にもつ。芯置部は1箇所である。口径11cm前後、器高2cmを測る大型の皿と口径7.5cm、器高1.5cmの小型の皿がある。この類の皿には内面底部に「八木口」の刻印が施されるものがある。

E 類

有脚受口付皿である。いずれも内面皿部および外面口縁端部に橙色の釉が施されている。器形・調整技法から2つ細分した。

1類：深い皿部をもち、受口部は口縁端部より若干低い位置にある。脚柱部は円柱状を呈し、脚裾部内面はヘラ状工具によって抉られている。口径7cm前後、器高6～7cmを測る。

2類：浅い皿部をもち、受口部は口縁端部よりやや上にある。脚柱部は下膨れの円柱状を



第60図 皿の法量分布

呈し、底部には回転糸切り痕跡を残す。口径5～6cm、器高5cm前後と小型の皿である。

遺構から出土した土師質皿は、総数129を数える。各類ごとの内訳はA類が30点(A1類：3点,A2類：10点,A3類：6点,A4類：11点)、B類が65点(B1類：5点,B2類：3点,B3類：6点,B4類：12点,B5類：10点,B6類：13点,B7類16点)、C類が14点(C1類：7点,C2類：1点,C3類：1点,C4類：5点)、D類8点(D1類：3点,D2類：2点,D3類：3点)、E類7点(E1類：3点,E2類：4点)である。

各類のなかではB類の皿が最も多い。このB類の皿のうち、B1・B2類とB3～B7類とは異なった特徴をもっている。前者は色調が褐色を呈し、砂粒の含有量も多く、調整も粗く、粗雑な作りである。後者は灰白色の精良な胎土をもち、調整も丁寧に仕上げている。

C類の施釉皿のうち371(C2類)には前述したように「明石ロ」の印刻が施され、不明文字は「浦」もしくは「湊」と理解できる。このC類は各小類とも胎土、調整技法が類似しており、おそらく明石の製品と推察される。さらにこのような印刻は受口付皿D類にも認められる。370(D3類)には「八木ロ」が印刻され、おそらく不明文字は「浦」ないしは「湊」のいずれかと解読でき、これもC類と同様、明石近辺(明石市八木)の製品と考えられる。

またE類の一群もC・D類と同様の胎土をもつところから、C～E類の施釉土師質皿は明石およびその近辺で焼かれた可能性が高い。

土師質鍋

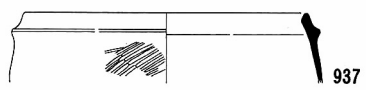
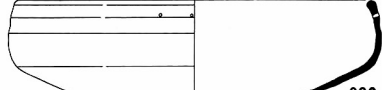
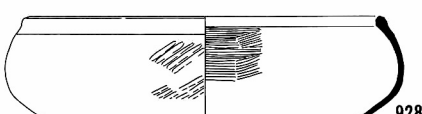
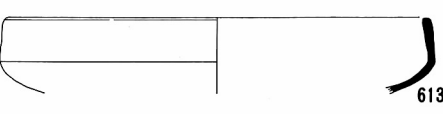
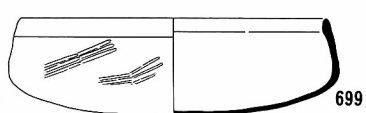
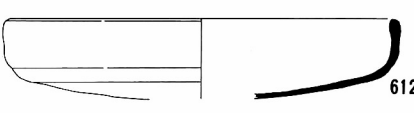
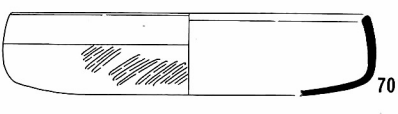
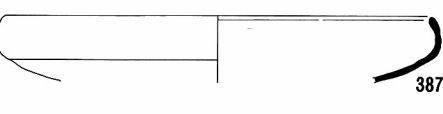
遺構から出土した鍋は完存するものが少なく、法量など不明な点がある。鍋は中世的な要素であるタタキ目の有無によって2つに大別した。

A類：外面体部にタタキ目を残す鍋

B類：外面体部にタタキ目を残さない鍋

これら両類の鍋は、その器形的特徴から各類4つに細分した。

表4 土師質鍋器形分類表

	A	B
1	 937	 932
2	 928	 613
3	 699	 612
4	 701	 387

A 類

- 1 類：口縁部と体部との境に突帯を貼付ける鍋。内面口縁端部直下に面をもつ。口縁部は内外面とヨコナデ調整を施し、内面はナデ調整である。口径は推定で22.4cmを測る。
- 2 類：最大径を体部中位にもち、口縁部は内彎する。口縁端部は丸くおさめている。底部は深い丸底を呈すると思われる。口縁部は内外面ともにヨコナデ調整、外面底部はヘラケズリ調整で、タタキ目を消している。内面体部はハケ目調整を施す。口径は推定で28cm前後である。
- 3 類：最大径を体部下位にもち、口縁部は直線的に内傾する。内面口縁端部直下に面をもつ。外面口縁部と内面にはヨコナデ調整を施す。口径は推定で23cm前後、器高は、7.5cmを復元できる鍋がある。A類のなかではやや小型の鍋である。
- 4 類：最大径を体部下位にもち、口縁～体部が短く、直線的に内傾する。底部は浅い丸底を呈する。内面底部から体部への移行部は屈曲して立ち上がる。外面口縁部・内面はヨコナデ調整を施す。口径は推定で27～29cmを測る。

B 類

- 1 類：最大径を体部上位にもち、体部から口縁にかけて大きく内彎する鍋である。口縁端部は丸くおさめている。底部は深い丸底を呈する。外面口縁部と内面はヨコナデ調整が施される。口径30cm前後を測る。
- 2 類：最大径を口縁部直下にもち、そのまま底部に移行する鍋である。内面底部から口縁部への移行部は屈曲して立ち上がる。口縁部内外面はヨコナデ調整、内面はナデ調整が施される。口径は推定で34cm前後である。
- 3 類：最大径を口縁部付近にもち、そのまま底部に移行する浅い丸底の鍋である。口縁部は垂直気味に立ち上がる。口縁部は内外面ともヨコナデ調整で外面口縁部と体部との境には面取り様のヘラケズリ、ないしはナデ調整が施される。口径は30～35cmと幅がある。
- 4 類：最大径を口縁部中位にもち、そのまま底部に移行する鍋である。口縁部は短く内彎し、底部は浅い丸底である。外面口縁部・内面は回転ナデ調整、外面底部周辺に面取り様のヘラケズリ調整を施す。口径は31～36cmと幅がある。

遺構から出土した鍋は、総数43点を数える。うちA類が11点（A1類：1点、A2類：3点、A3類：3点、A4類：4点）、B類が32点（B1類：5点、B2類：5点、B3類：17点、B3類：5点）をそれぞれ数える。出土量の多いB類の鍋の内でもとりわけB3類の出土が多く他を圧倒している。ここでは中世的な技法である外面体部のタタキ目の有無でA・Bの両類に分けたが、A2類とB1類、A4類とB2類は器形が近似しており、器形から判断すると同じタイプの鍋と理解できる。

無釉陶器皿






無釉陶器皿は受口部をもたない皿をA類に、受口部を持つ皿をB類に大別した。各類はさらに器形で細分した。

A 類

A類の皿は法量に差がなく、口径10.5cm前後、器高2cm前後の間におさまる。底部の切

り離しには回転糸切り手法を用い、外面体部に回転ヘラケズリ調整を施している。

表 5 無釉陶器皿器形分類表

分類	A	B
1	 522	 136
2	 578	 605
3	 576	

1 類：口縁部が内彎して立ち上がる厚手の皿である。外面底部には回転糸切り痕跡が明瞭に残り、外面体部下位には回転ヘラケズリ調整を施す。内面底部には一方向のナデ調整を施す。

2 類：器形は 1 類と同様、口縁部が内彎して立ち上がるが、全体に薄手のつくりである。外面体部のヘラケズリは外面底部から体部上位までおよび、底部の回転糸切り痕跡は消されている。内面の回転ナデ調整は底部まで至る。

3 類：口縁部が外反する薄手の皿である。回転ヘラケズリは外面体部上位まで及び、内面の回転ナデは底部まで至る。底部の回転糸切りはわずかにその痕跡を残す。

B 類

受口部をもつ皿は 2 点であり不明瞭な点が多い。いずれも 3 箇所の芯置き部をもつ。A 類と同様、底部の切り離しは回転糸切り手法を用いているが、体部の回転ヘラケズリ調整によってその痕跡は消されている。内面の回転ナデ調整は底部まで及んでいる。口径は 11 cm 前後、器高 2 cm 前後を測る。

さらに 2 つに細部した。

1 類：口縁部が大きく外反する薄手の皿である。受口部は口縁端部とほぼ同一の高さに作られる。外面体部のヘラケズリ調整は体部下位まで施される。

2 類：口縁部が内彎気味に立ち上がり、1 類に比べしっかりした受口部をもつ皿である。外面体部の回転ヘラケズリは体部上位まで及ぶ。

無釉陶器の皿は 7 点出土し、その内訳は A 類が 5 点 (A1 類：2 点, A2 類：2 点, A3 類：1 点)、B 類が 2 点 (B1 類：1 点, B2 類：1 点) である。土師質の皿と比べ出土量は極めて少ない。

A・B 両類は回転糸切り手法・外面体部の回転ヘラケズリ調整など技法的に類似する点が多い。産地は現在のところ不明であるが、おそらく同一産地の製品と考えられる。

施釉陶器皿



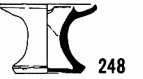

受口部の有無によって 3 つに大別した。

A 類

受口部をもたない皿である。

表 6 施釉陶器皿器形分類表

1 類：口縁部が外反する皿である。外面体部から底部は回転ヘラケズリ調整を施し、とくに底部は上げ底になっている。口径 10.8 cm、器高 2 cm を測る。

分類	A	B	C
1	 409	 171	 248
2		 172	

B 類

受口部をもつ皿である。1か所の芯置部をもつ。調整はA類と同様、外面底部から体部にかけて回転ヘラケズリ調整を施し、底部は上げ底である。

B類は受口部の位置で2つに細分した。

1類：受口端部と口縁端部が同一の高さに作られる皿。口縁部は大きく外反し全体に薄手の作りである。口径13cm前後、器高4.5cmを測る。

2類：受口端部が口縁端部より下位に作られる皿。口縁部は直線的に外傾し、全体に厚手の作りである。

C 類

いわゆる「ひょうそく」と呼ばれるものである。器形的に見て皿の範疇に入れることは無理があるが、灯明具としての機能を考えここで取り扱う。

1類：受口端部と口縁端部が同一の高さにつくられる。1か所の芯置部をもつ。口径7.5cm、器高5.4cmの大型のものと、口径6.5cm、器高4.5cm前後の小型のものがある。

施釉陶器皿は6点出土している。

内訳はA類が1点、B類が2点（B1類：1点、B2類：1点）

C類3点である。全体的に出土量は希薄である。

施釉陶器皿B類は、近年実施された舞子焼窯から近似した製品が出土しており、在地系の製品であることが判明している。

無釉陶器播鉢

播鉢はその形態からA～G類の7つに分類し、F・G類についてはさらに数類に細分した。

A 類

口縁端部を四角におさめる。卸し目は一回一条描きのものがある。

B 類

体部から口縁にかけて直線的に開く。口縁端部は丸くおさめ、一条の沈線が巡る。内面には5本一単位の櫛状工具による卸し目をもつ。口径は36cm、器高15cmを測る。

C 類

口縁端部は肥厚して立ち上がり、先端が尖がる。内面には4～8本一単位の卸し目が施される。口径は30cm前後である。


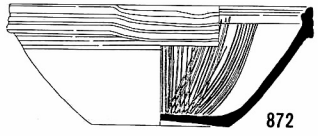
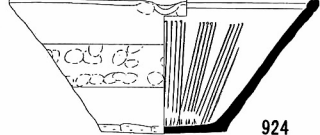
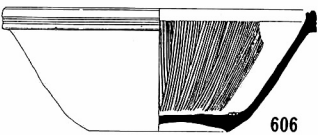

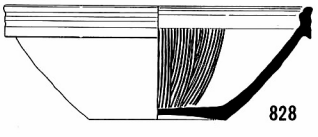
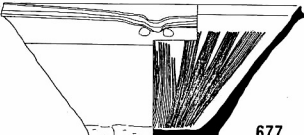
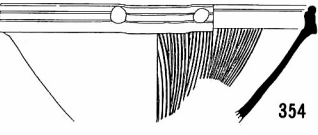
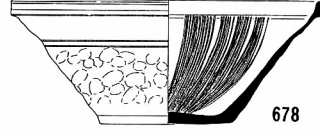
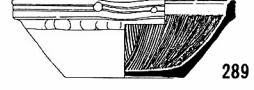
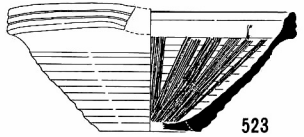
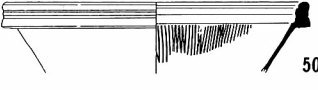
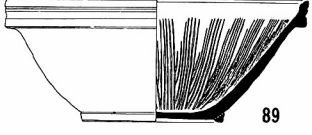
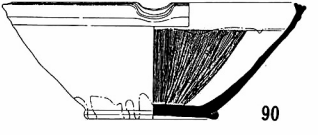
D 類

口縁端部が若干上下方向に拡張する。内面には7本一単位の卸し目をもつ。口径33cm前後、器高は13～15cmを測る。

E 類

口縁部が上方に拡張し、口縁部外面に幅広の面をもつ。内面には6・8本一単位の櫛状工具による卸し目をもつ。口径26cm前後、器高14cm前後の中型のものと、口径34.5cm前後、器高13.5cm前後の大型のものがある。

表7 播鉢器形分類表

A		G ₁	
B		G ₂	
C		G ₃	
D		G ₄	
E		G ₅	
F ₁		G ₆	
F ₂		A	

F 類

幅広の口縁部外面に2条の沈線をもち、内面口縁端部直下に面をもつ。内面は櫛条工具による7~11本一単位の卸し目をもつ。各卸し目単位間の間隔は広い。口径30cm前後、器高13cm前後のものが多いが、まれに口径20cm前後の小型のものがある。

F類はさらに2つに細分した。

1類：底部が平底のもの。

2類：底部が輪高台のもの

G 類

幅広の口縁部外面に2条の沈線を持つ点はF類と同じであるが、内面端部に1条の沈線

が巡る播鉢である。口径30cm前後、器高12cm前後の大型の播鉢と、口径22～25cm、器高9cm前後の中型の鉢がある。卸し目は7～12本一単位とその数に幅がある。調整は口縁部が回転ナデ、外面体部は回転ナデ調整ないしは回転ヘラケズリ調整を施す。まれに289のように外面体部上位にユビオサエを施すものがある。

G類はその形態、とくに口縁部によって6つに細分した。

- 1類：内面の口縁部と体部の境がなく、口縁部中位で屈曲して立ち上がる。内面口縁端部直下に内傾する面をもつ。卸し目は7～11本一単位と幅がある。卸し目各単位の間隔があき、口縁部上位まで及ぶ。外面体部はヘラケズリ調整後ナデ調整を施す。また556のように外面体部上位にユビオサエの痕跡をもつものもある。
- 2類：口縁部下端が大きく外方に張出し、その先端は角張っている。内面は体部からそのまま口縁部に至る。卸し目は8～9本一単位で、口縁部中位まで及んでいる。卸し目各単位間の間隔は非常に密である。外面体部上半は回転ヘラケズリ調整の痕跡を残すが、下半は回転ナデ調整でヘラケズリを消している。
- 3類：口縁部下端が垂下し、幅広の面をなす。内面は体部と口縁部の境で屈曲して立ち上がる。卸し目は7～12本一単位で、口縁部中位付近まで及ぶ。卸し目各単位間の間隔は狭く、卸し目の上端付近に間隙を残す。外面体部の最終調整は、回転ナデないしはナデである。外面底部には筵状の圧痕が残るのが特徴である。
- 4類：口縁部下端が若干下方に張り出す。端部は丸くおさまる。内面口縁部は、体部と口縁部の境で屈曲して立ち上がる。卸し目は8～12本一単位で、口縁部下位で止まる。卸し目各単位間の間隔は狭く、卸し目の上端付近に間隙を残す。外面体部の調整は回転ナデ調整である。
- 5類：口縁部下端に張出しをもたず、そのまま直立する口縁部をもつ。卸し目は7～12本一単位で、口縁部直下で止まる。卸し目各単位間の間隔は非常に密である。外面体部の調整は回転ヘラケズリである。3類と同様、外面底部には筵状の圧痕が残る。
- 6類：口縁部が厚く、短く直立する。卸し目は9本一単位で口縁部下位でとまる。卸し目各単間の間隔は狭く、卸し目の上端付近に間隙を残す。

出土した播鉢は、すべて片口をもつ鉢である。これらの鉢のうち、A～E類の播鉢は丹波焼である。調整方法では外面体部のユビオサエ調整、焼成方法では目に陶片を採用している等の共通点がある。これらの技法の特徴は、近世丹波焼の窯である下相野近世窯跡の製品の特徴と極めて類似している。

F類は備前焼ないしは備前焼系の製品と考えられる。この備前焼の流れを汲むG類の播鉢はいわゆる堺播鉢、明石播鉢、丹波焼播鉢に採用されている。明石城では丹波焼G類の播鉢が包含層から若干認められたが、出土状態が希薄で今回の分類では除外している。

G類の播鉢は、明石城から最も多く出土し、形式的にも多様である。現段階で生産地を限定できるものは少ない。ただG3・G5類の播鉢は、いずれも外面底部に筵状の圧痕を残す等、狩口台遺跡出土の明石播鉢と近似している。

また、G2・G4類の播鉢には内面底部周縁に沿って熔着物が付着しており、焼成の際、播鉢どうしをそのまま重ねている。

86・506・607は丹波焼ないしは丹波焼系の甕である。86は口径20cm前後と比較的小型で口縁端部が内方向に拡張する甕である。506・607は口径30～40cmと大型で、口縁端部が内・外方に拡張する甕である。607は幅広の口縁端部に3条の沈線が巡る。

施釉陶器

施釉陶器は明石城出土の陶磁器のなかでも最も出土量が多く、器種も多様である。施釉陶器のなかで産地の推定が可能なものとしては、肥前焼、京焼、萩焼、瀬戸・美濃焼、丹波焼の諸窯がある。これら以外に量的には少ないが、明石周辺で焼かれた朝霧焼の製品も出土している。しかし多くの施釉陶器は生産地が特定できない。

肥前焼

明石城武家屋敷跡で出土した肥前焼は主として碗、皿で構成されている。このほかに甕、猪口、鉢、火入れ、鬚盥、壺などの器種が若干出土している。

碗は42・43・656・664・657・756等の16世紀末～17世紀初頭に比定される古い一群、51や125に代表される刷毛目・打刷毛目文が施される一群、44・115・342・629・661・909のいわゆる「京焼風」と呼ばれる京焼写しの一群で構成される。これら以外に45・161・663のように高台内をアーチ状に削り出した呉器手の碗がある。

16世紀末～17世紀初頭の一群のなかでも43は内野山窯の製品と推定されるものである。

京焼風碗は高台部あるいは高台端部が露胎しており、外面体部が無文のものと同須描きの山水文(629)が描かれるものがある。この京焼風碗のうち44・115・661・909は高台内に「雲」、「清水」、「新」の銘を印刻している。

皿は、京焼風、二彩手、三島手のものが出土している。

61・252・306・666～669は、砂目跡をもつ皿である。この一群の皿は、17世紀初頭に比定され、明石城出土の陶磁器のなかでも古い一群である。

48・162・549は「京焼風」の深皿である。48・549は外面体部に呉須で山水文が描かれ、高台内には「木下弥」の刻印が施されている。162は無文であるが、高台内に印刻が施されている。

62・215・216・221・232は内面に蛇ノ目釉剥ぎが施される皿である。62は内面に波状の刷毛目文をもつ。銅緑釉を流し掛けした215、蛇ノ目釉剥ぎ部分に泥漿を塗布した216の皿は内野山窯の製品である。

大皿は緑釉・褐釉を流し掛けしたもの、あるいは松を描いた521・670の二彩手の皿をはじめ575の蓮弁・花の象眼を施した三島手の皿がある。

63・207・232・501・604は鉢である。63・207・604は刷毛目文をもち、501は二彩手の鉢である。

55・110は香炉ないしは火入れである。55は外面に刷毛目文を施し、110は陶胎染付の火入れである。124・936は小坏で、113は刷毛目文をもつ猪口である。

大型の器種としては419と437の鉄絵の甕がある。437は焼成後底部を穿孔している。

658の鉄絵の壺は、16世紀末～17世紀初頭の比定され、明石城出土の陶磁器のなかでも古いものである。特殊な器種としては757の鬚盥が出土している。

京 焼

明石城で出土した京焼は多くが、京焼系の範疇に収まるもので生産地の特定ができないものである。器種は碗に限られる。碗には無文、鉄絵、上絵を施すものがある。598は外面に太い凹線が数条巡る腰折れの碗である。49、53、368、369は若杉等を描いた鉄絵の碗である。50、52、411、619は赤・緑・紺彩で松、笹文を描いたものである。これらのうち52、53の内面身込み部には足付ハマの痕跡が残る。

萩 焼

330・331・446・482・633は萩焼ないしは萩焼系の製品である。器種は碗が多いが、663は胎土・釉調が非常に萩焼に近い鉢である。

446・482は藁灰釉、黒釉を流し掛けした碗で、萩焼の製品である。330・331は透明釉を施すが、器形的にみて446・482の一群に近似しているため、萩焼系の範疇で捉えられるものである。

瀬戸・美濃焼

瀬戸・美濃焼ないしは瀬戸・美濃系の製品は、皿、碗、鉢（練鉢・植木鉢・片口鉢）、甕（水甕）の器種で構成されている。量的には皿が多い。

60・186・202・485・573は黄瀬戸風の輪花皿である。口径12～13cmの皿が多いが573は口径7cmと小型の皿である。内面の身込み部には3箇所が目跡が残るのが通例である。485は内面に布目痕跡を残し、型作り成形である。447は、瀬戸・美濃系の大皿である。内面には渦巻きの鉄絵が施されている。

185・483は瀬戸・美濃系の碗である。185は「五郎八茶碗」と呼ばれる碗で、高台畳付には「本山」の刻印が認められる。483は白・黒釉を流し掛けした碗である。

494・552の練鉢および822の片口鉢は美濃焼の製品と考えられる。

671・890は美濃焼の水甕と考えられる。外面には緑・褐色釉が流し掛けされており、内面は無釉である。

丹波焼

丹波焼ないしは丹波焼系の製品は、徳利（377～379）、鉢（288）、播鉢（90）甕および桶で構成されている。量的には甕が圧倒的に多い。

甕は口縁部の形態で3つに大別される。すなわち口縁端部が内方向に拡張する174・255の甕、口縁端部が内外方向に拡張する434・825・945の甕、内外方向に拡張した幅広の面に数条の沈線が巡る500・673の甕である。甕は口径20cm前後・器高25cm前後、口径30cm前後・器高30cm前後のものが多く、まれに945のように口径40cm前後、器高が50cmを越える甕もある。その他、体部上半に条線を施す86・255・673の甕がある。945の大型甕の底部には焼成後底部を穿孔している。桶は、外面体部に波状の陸起文を施す460と500がある。

その他の施釉陶器

上記した以外にも多くの施釉陶器が明石城から出土している。この項で扱う多くの施釉陶器は生産地を特定することができないが、明石市周辺で生産されたもののがかなり多く混入していることは間違いない。

朝 霧

347・630の製品には、「朝霧」の刻印が施されており朝霧焼の製品と特定できる。また602の小鉢と329の小碗は、明石焼ないしは朝霧焼の製品と推察される。

この他に在在系と考えられる製品は、「イッチン」技法を用いたもの、白化粧後鉄絵ないしは呉須絵を施すもの、施釉陶器皿B類、把手部に「樹下仙人図」を印刻した行平鍋等

がある。

これまで述べてきた各生産地の施釉陶器は、器種が椀、皿、甕、鉢に限定されるのに対し、在地系の施釉陶器は灯明具、行平、土瓶、火入れ等のより生活に密接した日常雑器が中心である。

在地系

明石市周辺には、明石・朝霧・舞子・三国・須磨焼等の諸窯が江戸時代から焼物を生産していたと言われている。今回、「在地系」の製品として報告したものの多くは、これらの明石周辺の諸窯で生産されたものと考えられるが、個々の製品がどの窯のものかは、現時点では明確ではない。

磁器

明石城出土の磁器は、染付・色絵・白磁・青磁で構成される。器種は鉢、皿、瓶、椀、蓋、猪口、小杯、火入れ、仏飯具、水滴、香炉、段重等がある。出土量は、染付椀が最も多く、ついで染付小杯・皿が続く。

生産地は、肥前焼ないしは肥前焼系が圧倒的に多く、僅かに中国製、瀬戸・美濃焼ないしは瀬戸・美濃焼系の製品が混ざる。これら以外に、存地系の製品と推測される製品もあるが現段階では確定できない。

肥前焼磁器

ここでは肥前焼系の製品も併せて報告する。

肥前焼磁器は染付・色絵・青磁・白磁がある。量的には染付が最も多く、ついで白磁、色絵、青磁の順で出土している。

染付には、呉須絵を施す通常の染付以外に外面が青磁釉で内面に染付を施す青磁染付がある。また特殊なものとして、外面に瑠璃釉を施す瑠璃釉染付(364)が出土している。

染付は、鉢、瓶、椀、皿、小杯、蓋、仏飯具、蓋物、猪口、火入れが出土している。前記したように染付のなかでは椀の出土量が最も多く、ついで小杯、皿、蓋、瓶、鉢の順で出土している。

25の鉢は、高台内に鉛ガラスで「ロ九」の記号が描かれており、焼き継ぎされた鉢と推察される。

椀は316・317・352・358・710・881の広東形椀、762の端反形椀、877の天目形椀がある。特殊な椀としては、外面に「大ロロ老笹紅」と呉須描きされた紅椀(271)が出土している。

皿は245の手塩皿、715の角皿等の特殊な器形をはじめ、技法的には32の型打ち成形の輪花皿がある。809・810の皿は波佐見系の製品と推定される。

蓋には広東形椀・端反形椀・鉢・蓋物に使用されたものがある。106の椀蓋は嬉野町吉田窯の製品の可能性がある蓋である。

これらの以外に597の蓋物、287の型作りの水滴がそれぞれ1点出土している。

色絵は、染付に比べ出土量はきわめて少ない。器種も鉢、椀、蓋、小杯、小椀、段重、小椀に限られる。これらのなかでも椀・皿の出土は比較的多く、鉢(29)、小杯(532)、段重(399)、小椀(537)は各1点ずつ出土している。また29の龍文の鉢は有田赤絵町より類似した鉢が出土している。

青磁染付は椀、鉢、蓋、皿が出土している。椀の出土が多く、蓋・鉢がこれに続く。268の皿は山内町筒江窯の製品である。

白磁は染付について多く出土している。椀、小椀、蓋、猪口、皿、小杯、紅皿、蓋物が

出土している。量的には紅皿・皿が多く、蓋・碗類がこれに続く。33・34は波左見系の白磁皿である。251は蓋物の身である。外面底部に「六九」と墨書きされているが、意味は不明である。

青磁は肥前焼磁器のなかでも量的に少なく、器種も瓶、碗、小碗、鉢に限られる。

明石城より出土した肥前磁器は18世紀代に比定される磁器が最も多く、出土した肥前焼磁器の約65%を占める。18世紀代でも18世紀後半（Ⅲ期）と18世紀前葉～中葉（Ⅱ期）に比定される製品が突出して多い。17世紀代（Ⅰ期）は、約10%を占め、とくに17世紀中～後葉の製品が多い。19世紀代（Ⅳ期）は約30%を占め、18世紀代の製品について多い。

肥前磁器はⅡ・Ⅲ期に比定される製品が圧倒的に多く、碗・皿を始めとする殆どの器種が出土する。Ⅳ期になると肥前磁器は、碗、鉢を主体とした器種構成に絞られてくる。

瀬戸・美濃焼系磁器

瀬戸・美濃焼系磁器は染付、白磁がある。出土量は肥前磁器に比べて極めて少ない。時期的には幕末に比定される製品が多い。

染付は碗（3・4・338・395）が主体である。3・4は外面に青磁釉を用いた青磁染付の碗である。338・395は染付碗で、このうち395は端反形碗である。860は碗蓋である。碗以外には246の仏飯具が出土している。

白磁は2点出土しており、いずれも皿である。

中国製磁器

中国製磁器は青磁、白磁、染付が出土している。青磁は龍泉窯系の碗が2点出土している。119は14世紀後半から15世紀に比定される碗である。203は外面に連弁文が施されており15世紀後半から16世紀前半に比定される碗である。

253は染付の大皿である。内面に花卉様の窓をもち、身込み部には鳳凰が描かれる。中国福建・広東省地方の産と推察される。時期は16世紀末から17世紀初頭と理解している。

小 結

明石城武家屋敷出土の陶磁器について概要を述べてきた。この項では肥前焼陶磁器の年代観をもとに、明石城における陶磁器の変遷を追ってみる。

明石城Ⅰ期

Ⅰ期初頭の遺構としては、西中ノ町SK3518a・3533がある。これらの遺構から出土している肥前焼陶磁器は16世紀末に比定されるものが多く、Ⅰ期よりも古い様相を呈している。しかしこれらの土坑は、調査所見では明石城築城期の土坑と理解されており、Ⅰ期でも古い段階の土坑と理解する。

SK3518aは、16世紀末から17世紀初頭に比定される肥前焼陶器皿を中心に丹波焼播鉢、土師質鍋が出土している。丹波焼播鉢は播目が一回一条描きのA類（922）と櫛状工具の播目をもつB類（924）が出土している。近世丹波焼の窯跡である下相野近世窯跡の調査によれば、器形的にはA類が新しい要素を具備しており、B類は明石城Ⅰ期以前から続くものと理解する。土師質鍋はA2類（928）、A3類（927）が出土している。土師質鍋は新しい要素として器高が低くなる傾向が看取される。この観点からA2類からA3類への流れを考えておきたい。

SK3533からは、慶長前後に比定される肥前焼陶器とともに土師質鍋A1類（937）が出土している土師質鍋分類では同一の系譜として捉え分類したが、口縁部に鋸状の突起をもち器形的に中世的な要素が強く、土師質鍋のなかでも別系譜を引く鍋として捉えられる。

I期前半の遺構としては中ノ町B地区SK3208がある。SK3208は無釉陶器皿(A1類)のような比較的新しい皿を含み¹⁾、あまり良好な資料とはいえないが、出土した肥前焼陶磁器は17世紀前半のものが中心である。522は混入品と考え、I期前半の資料と考えたい。この土坑からは土師質皿A2・A4類、B3類出土している。A2・A4両類の前後関係は、I期後半からII期前半に比定されるSK3506よりA2類(897)の皿が出土していることから、A4類からA2類へ続くと考えたい。

明石城II期

明石城II期の遺構は、良好な資料を伴うものが少ない。明石城II期を埋める資料をあえてあげるならば、西中ノ町SK3506出土の土師質皿と土師質鍋がある。SK3506は17世紀後葉から18世紀前半の肥前焼陶磁器が主体で、年代の幅から言えば、I期後半からII期前半に該当する。この土坑から出土した土師質皿はA2類を中心に、新しい器形としてA3類が出土している。またB類ではB3類とともにB7類が出土している。現段階では、これらA3類とB7類をII期前半を埋める資料として考えておきたい。土師質鍋は、B1類(900・901)とB2類(903)が出土している。902・904のようにB2類とB3類の中間形態を示す鍋があるが、直線的な口縁部の立ち上がりから判断してB2類の範疇として捉えておきたい。上記したように器高の低い鍋を新しい要素と考え、B1類をII期前半に、B2類をII期後半と理解した。

明石城III期

明石城III期の遺構は、中ノ町C地区SD2311およびA地区のSD3101がある。ともに溝内の資料であるため、遺物の出土状況に問題がある。

III期前半の資料は、SD2311出土遺物のなかに求められる。SD2311は18世紀前葉から中葉の肥前焼陶磁器とともに土師質皿、土師鍋、丹波焼甕、京焼系、在地系の施釉陶器が出土している。

土師質皿はB4(609)・B5(610・611)類がある。III期に先立つII期後半に比定できる土師質皿が空白になっており、B4・B5類の新旧関係は確定できない。III期後半からIV期前半に比定されるSD2102からは土師質皿B6類が出土している。B6類は内面の底部から口縁部への立ち上がりが滑らかであることが特徴である。この点を考慮するとB5類からB6類への変遷が想定でき、B5類をIII期前半の資料として考えたい。

土師質鍋はII期後半に比定したB2類と新しい器形としてB3類が出現する。

また無釉陶器では皿B2類(605)、播鉢G2類(606)が出土し、施釉陶器は602のような在地系のものが現れる。

これら以外にIII期の資料としては、SD3101より出土した無釉陶器播鉢G4類(290)、G5類(289)および丹波焼鉢(288)があげられる。

明石城IV期

明石城IV期の資料は、明確に限定できるものはない。ここではIII期後半からIV期にかけての資料である中ノ町A地区SD2102および西中ノ町SD2501出土の遺物を取り上げる。

土師質皿は上記したように新たな皿としてB6類(332・333)が出現する。さらに施釉土師質皿C1類(327)・E1類(716)がこれに加わる。無釉陶器では播鉢G3類が出土し、施釉陶器は、329の在地系の陶磁器とともに萩焼椀(330・331)が出現する。

以上、明石城出土の陶磁器を肥前焼の年代観をもとにならべてみた。しかし、明石城各

種別	土師質土器		無釉
時期	皿	鍋	鉢
1600		A2 928	
1617	B3 525 A4 529	A3 927 A1 937	F1 523
1650-I	A2 897		
1682		B1 901	
1700	B7 891 A3 896		
II	B4 609	B2 613	G2 606
1750	B5 611	B3 612	III B2 605
III			G4 290
1800	B6 333 C1 327		
IV		716	G3 719
1850			
1880			

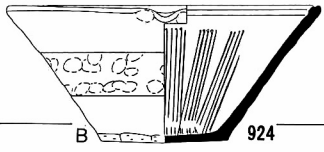

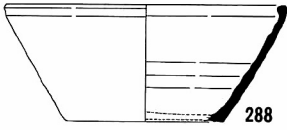
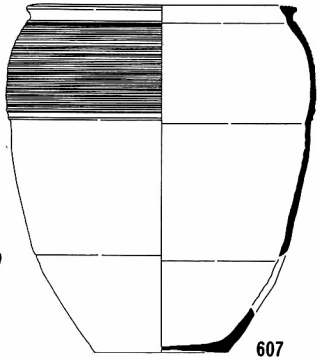
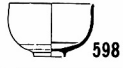






陶器	施釉陶器	
	碗	
		
		
	<p style="text-align: center;">堯</p>  	
	    	
		

表 8 明石城出土陶磁器変遷表

期ともに良好な一括資料がなく、あえて溝内の資料を使用している。このため強引にならべた部分が多いことをお断りしておかなければならない。したがって再検討の余地があることも事実である。

また上記したように良好な資料の不足から、変遷図にかなり空白部分が残っている。この時点で明石城出土陶磁器を並べることは問題があるが、明石城の陶磁器様相を知る一つのたたき台として役立てばと考えている。

明石城武家屋敷の調査は、明石市教育委員会の手で、現在も継続的に実施されている。調査の過程で良好な一括資料も増加していると聞きおよんでおり²⁾、今後それらの資料をもとに陶磁器の再検討をする必要性を痛切に感じている。

最後に在地系の陶磁器について少し触れておく。無釉陶器播鉢は、A～E類の丹波焼、F類の備前焼系、G類の堺焼播鉢系の3つの生産地が推定できる。これらのうちG類の播鉢は明石周辺でも生産されている可能性が指摘されている³⁾。堺焼播鉢と明石焼播鉢との区別は明確でなく、両者の識別は困難である。本遺跡から出土した播鉢のなかでは、「上」の刻印をもつ播鉢が堺焼播鉢の可能性が高い。明石焼播鉢は、陶器工房址と推定されている狩口台遺跡⁴⁾から出土しており、明石焼播鉢の生産地が従来推定されていた明石市魚住町周辺以外に広がる可能性が指摘される。明石城より出土したG類の播鉢の多くは在地系（明石焼播鉢）である可能性を考えている。

土師質皿では、C2類（371）とD3類（370）に「八木口」・「明石口」と明石の地名を刻印した皿が出土している。技法的には土師皿C・D・E類は近似しており、明石周辺で生産された可能性が高い。

施釉陶器は、確実に産地が確定できるものがある。347・630は器面に「朝霧」の刻印が施された「朝霧焼」の製品である。これら以外にも舞子焼の特徴をもつ施釉陶器⁵⁾があり、施釉陶器のなかにかかなりの比率で在地系の製品があると推察される。

明石市および明石周辺には江戸時代より操業された明石焼、朝霧焼、舞子焼、須磨焼等の存在が知られている。とくに三国焼は「狩口」で播鉢・土瓶・鍋等の日常雑器が生産されていたと言われ⁶⁾、上記の狩口台遺跡との関係が注目される。今後、明石城出土陶磁器の様相を解明するためには、明石周辺の諸窯の実体も併せて解明する必要がある。

最後に明石城から出土した汽車茶瓶について、大川 清、真野 修の両氏から有益な御教示を得た。しかし、著者の力量不足から実測図・観察表のみ提示し、本稿では触れなかった。

- 注
- 1) 水口富夫氏の御教授による。このタイプの無釉陶器皿は、淡路・叶堂城より18世紀末から19世紀初頭の肥前磁器と共存している。
 - 2) 稲原昭嘉（明石市教育委員会）氏の御教示による。
 - 3) 白神典之1990「堺摺鉢と明石摺鉢」江戸遺跡研究会第3回大会『江戸の陶磁器』発表要旨4)
真野 修1991『狩口台遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
 - 5) 真野 修氏より、舞子焼窯出土の資料を見せていただいた。舞子焼の特徴としては、胎土にヤスリ粉を混入する以外に、「イチン」・「飛ビガンナ」・「白化粧掛けの鉄絵・染付」・印刻「樹下仙人図」等の装飾技法が挙げられる。また施釉陶器皿B類も出土している。
 - 6) 青木重雄氏の御教授による。

第61図 肥前陶磁の出土状況からみた遺構の年代

年 代		1600	1617	1682	1700	50頃	1800	1884	1900
地 区	遺 構			I 期	II 期	III 期	IV 期		
東 中 ノ 町	S D 2002								
	S D 3001								
	S D 2012								
	S D 3002								
	S D 2003								
	S D 3004								
	S D 2001								
	S D 2013								
	S D 3011								
	S D 3012								
	S E 2001								
	S E 3001								
	S G 2001								
	S G 2002								
S K 2011									
中 ノ 町	A	S D 3101							
		S D 3101							
		S D 2102							
		S D 2101							
		S E 2101							
		S E 2102							
		S G 2101							
		S K 2124							
		S K 2159							
	S K 2179								
	B	S D 2201							
		S D 3201							
		S D 3202							
S K 3208									
S G 3201									
S X 3202									
C	S D 2321								
	S D 2310								
	S D 2305								
D	S D 2404								
	S K 2417								
西 中 ノ 町	S D 3501								
	S D 3501								
	S D 2501								
	S D 2502								
	S K 2501								
	S G 3501								
	S D 2506								
	S K 2503								
	S K 2502								
	S D 2505								
	S K 2505								
	S G 2501								
	S D 3505								
	S K 3506								
	S K 3508								
	S K 3518								
S K 3533									
S K 3534									
S K 3536									

2. 木製品

概 要

明石城武家屋敷跡出土の木製品は、小片を含めると約240点に達する。本報告では、このうち遺存状況の比較的良好な漆器21点、下駄20点、水道施設に伴う部材5点、その他の木製品26点の計72点について図化を行い、掲載した。

表9に、地区別、器種別の出土木製品の一覧表を示す。木製品が遺存しにくい性質であること、用途の不明な遺物が多いことを考えれば、これを単純に比較することは困難であるが、西中ノ町地区からの出土量が多く、総じて漆器や桶、箸、下駄などが目立っていることが分かる。また、これら木製品は日常的な消費生活に関連するものがほとんどであり、紡織などに用いられた木錘2点を除けば、工具・農具・漁具などの生産に関する道具類が欠落しているものである。このことは、調査区が武家屋敷に限定されていることと矛盾せず、当遺跡の木製品にみられる特徴のひとつに挙げられる点である。

木製品の樹種については、島地 謙氏に試料100点の鑑定を依頼し、玉稿を頂いている。また、漆器の製作技法については、北野信彦氏に自然科学的な手法を用いた調査をしていただき、玉稿を頂いた。

以下においては、量的に多い漆器および下駄の形態的な観察を中心に記述する。なお、出土遺構・樹種・法量などは別表に、漆器の木取り、塗り構造などの詳細については表13に記されているので参照されたい。

表9 地区別・器種別出土木製品一覧表

器種	地区	西中ノ町地区	中ノ町地区	東中ノ町地区	合 計
	容器・食器具	漆 器	30	7	5
曲 物		2			2
蓋		1		1	2
桶		20	4	17	41
箸		63	1		64
栓		1	2	1	4
服飾具	下 駄	5	12	3	20
	横 櫛			1	1
生産用具	木 錘		2		2
建築部材など		11			11
水道関連施設		1	1	4	6
そ の 他		11	17	4	32
合 計		145	46	36	227

漆 器

当遺跡から出土した漆器は約50点あり、小片を除く22点を掲載した。その形態から大きく蓋、坏、椀、盤に分けられ、それぞれ5点、3点、13点、1点を図化している。図化していないものを含めれば、椀の出土が30点前後あり、全体の約6割を占めている。ここではロクロ挽きの木地に漆を塗って仕上げた容器をとりあげることにする。

漆器の製作技術の観察は北野氏の稿に詳述されているので、ここでは蓋、坏、椀ごとに型式分類を行い、製作技術についての北野氏の検討結果にも簡単に触れることにする。

1. 型式分類

蓋 形態から3型式（A・B・C型式）に分類できる。

A：口縁部に段を削り出し、平坦な形状を示す。

1点しか出土していない（W1）。天井部上面にはつまみの痕跡と考えられる直径2cmの変色部分がある。中央には内面から打ちこんだ直径4mmの鉄釘が遺存しており、つまみを内面から留めるための鉄釘と思われる。

なお、北野氏の分析によれば、W1はヒノキ製の優品資料とされる。

B：全形が不明であるが、平坦な天井部とまっすぐに下りる体部をもつもの。

1点のみ出土している（W2）。約3mm削りこんだ天井部に朱漆を塗布するものである。

C：小さな環状のつまみをもち、天井部から口縁部にかけて緩く内湾するもの。

W3は、ケヤキ製の優品資料とされるものである。残存率が1/4のため、文様の有無は明らかでない。

W4は、家紋かと思われる文様が体部のおそらく3箇所均等に配されているようである。

W5は、外面の文様に植物文様を描くが、金ではなく代用金彩である石黄を用いていることが判明した。

坏 体部および高台の形状により2型式（A・B型式）に分類できる。

A：直線的にのびる体部をもち、高台内の挽き込みは凹面鏡状のもの（W6・8）。

W8は、北野氏によれば、山陽地方に特徴的な塗りの構造を示しているという。

B：緩く内湾する体部をもち、高台内の挽き込みが直線的なもの（W7）。

椀 器高と口径の比率から分類ができそうだが、全体的に残存状況がよくないため、台部に着目して分類する。大きく3型式（A・B・C型式）に分かれ、A・B型式はさらにおのおの2つに細分される。

A：高台の高さが3cm程度と高いもので、

A₁：高台内の挽き込みが極めて浅いもの（W9・10・11）と、

A₂：挽き込みの深いもの（W12・13）の二者に分けられる。

W9は、体部外面に文様がなく、ロクロによるケズリの痕跡を明瞭に残している。高台の高さは2.8cmを測る。

W10も、体部外面に文様がなく、ロクロによるケズリの痕跡を残すものである。高台の高さは3.1cmを測る。

なお、A₁型式のものの中には、図化したもの以外に、ケヤキ製の優品が4点含まれている。

B：高台の高さが1cm前後のもので、

B₁：底部からなだらかに立ち上がる型式（W14・15・16・17）と、

B₂：底部から緩い角度でのび、途中から上方に向かって立ち上がる体部をもつもの（W18・19・20）に分けられる。

W14の底部には平行する2本の刻線を有する。ロクロの爪痕ではない。

B₁型式のW17は、山陽地方に特徴的な塗りの構造を示しているとされ、また外面の文様には金ではなく代用金彩である石黄を用いている。

W16・18・19の外面には、ベンガラによって松などの上絵が描かれている。

C：口径に比して器高が著しく低いもの。底部外面を削り出すことにより、低く厚い高台をつくり出すものであり、体部は外反する。

当遺跡では1点しか出土していない（W21）。底部内面に漆絵が描かれるのも他の型式にはみられない特徴である。塗りの構造は山陽地方に特徴的とされるものである。

2. 漆碗の変遷と地区別の出土傾向

一般に漆碗は、大ぶり、厚手で高台の高いものが古いとされている。この堅牢なタイプの碗（本稿の碗A₁型式）は、飯碗として使用されたものといわれており、その後の陶磁器の普及に伴って、漆碗は次第に汁物用の食器（本稿のB型式）として専用化されてゆくのではないかとされている。

当遺跡では、漆碗の変遷を考えるための良好な一括資料が少ないため、型式の変遷を具体的に指摘することができなかった。しかし、B₁・B₂型式に分類される資料が1630年～17世紀後半という比較的古い時期に存在した可能性があることが判明した。

当遺跡の漆器は、西中ノ町地区より30点、中ノ町地区より7点、東中ノ町地区より6点出土しており、西中ノ町地区での出土量が比較的多い。また北野氏の分析によれば、西中ノ町地区および中ノ町地区出土資料については、東中ノ町地区に比べ、サビ下地を用いた優品が多い傾向があるとされ、武家屋敷内の居住者の階層を考えるうえにおいて貴重な資料が得られた。

下 駄

当遺跡から出土した下駄は20点である。東中ノ町地区から3点、西中ノ町地区から5点、中ノ町地区から12点が出土している。なかでも中ノ町地区のS K 3208から7点がまとまって出土した。いずれも歯の磨耗や指圧痕などの使用痕跡が認められ、未製品は確認できない。

1. 型式分類

分類に際しては下駄の構造に注目し、

I：別個に作成した台部と歯を組み合わせるにより製作したものを構造下駄、

II：一木から台部と歯を削り出したものを一木下駄とよぶこととする。

I) 構造下駄

A：台部裏面に設けられた二本の溝の中のホゾに嵌め込まれた歯が台部を貫通し、表からみえるもの（いわゆる露卯下駄）。

B：二本の溝に歯を差し込むだけのもの（いわゆる陰卯下駄）に分けられる。おのおの台部の平面形から、

a：やや前開きの長方形を呈するものと、

b：長円形のものの二者に分けられる。

これをもとに出土した構造下駄を分類すれば、以下のとおりとなる。

I A a 型式・・・W22・23・24・25

I B a 型式・・・W26・27・28

I A b 型式・・・W29・30・31

I B b 型式・・・W32

構造下駄は、台部と歯の結合を強くするため、台部裏面を寄棟状に高くし、台部と歯との接着面積を広くする工夫がなされている。ただし、ホゾをもつものともたないものの区別（本稿のI A型式とI B型式）の意味は明らかではない。ホゾの数は、前後各1個のものと各2個のものがあるが、台部の幅の大小との明瞭な対応は認められなかった。

また、台部による分類a・bの差異は、寄棟状に削り出した台部裏面の形状にも稜線の直線、曲線という差異として表れており、前者が男性用、後者が女性用あるいは小児用として認識されていたのではないと思われる。

中ノ町B地区・SK3208出土のW27とW28は同一遺構からの出土であり、法量、形態が酷似しているため、一对のものと考えてよい。台上面に残された使用痕の観察からは、W27が左足用、W28が右足用と思われる。

I・II型式をとおしてみた長さは、20.5～22.0cmに集中している。W31は台部の長さ16.2cmであり、子供用と考えてよい。

構造下駄は、磨耗、破損の激しい歯の交換が可能という利点をもっている。台部と歯の樹種の関係についてみれば、台部と歯に同一の材を用いるもの（W22・23・25・29・30）と、歯に別の材を用いるもの（W28・32）の二者が認められることが分かる。下駄の製作にあたって、足裏、地面にそれぞれ接する台部と歯に各々適材を用いる工夫があったかもしれないが、同一材を使用する例が多いことから、各所に別の樹種を使用したものについては、歯の破損等に伴う処置の結果である可能性があると考えておく。

II) 一木下駄

A：二本の直線的な歯を有するもの（いわゆる連歯下駄）と、

B：台部裏面の中央をくり、Aよりも広い接地面をもつもの（いわゆる露地下駄）に分けられる。

またA型式については構造下駄と同様、台部の平面形から、

a：やや前開きの長方形を呈するものと、

b：長円形のものの二者に分けられる。

これをもとに出土した一木下駄を分類すれば、以下のとおりとなる。

Ⅱ A a 型式・・・W33・34・35・36

Ⅱ A b 型式・・・W37

Ⅱ B 型式・・・W38・39・40・41

W35は、前歯の欠損に伴って別の材を直方体に加工し、3本の鉄釘で打ちつけるという補修を行っている例である。台部は二葉マツ、補修した歯にはモミ材を使用している。

当遺跡出土の下駄には塗下駄などの、装飾を施したものはないが、台部上面に三角形の刻線が印されているものがある（W33）。

Ⅱ B 型式は4点出土している。接地面積が広いのは庭をいためないためで、また活発な活動を抑制する意図のもと、例えば茶席の露地の歩行などを目的に製作されたものとされている。

Ⅱ B 型式の台部は長円形を呈するもののみである。このうち2点は前後の鼻緒を通す「眼」が認められず、台上面から打ち込まれた鉄釘が数箇所残存している（W40・41）。台表に畳表などが貼られ、そこに緒が結ばれていたと考えられる。

2. 時期

下駄の構造の変遷は、東京都立一橋高校の校舎改築工事に伴う調査成果の所見で詳細が判明している¹⁾。それによれば、

- ①露卯下駄（本稿のⅡ A 型式）が江戸初期から17世紀前半にかけて盛行し、それ以降に漸減する。
- ②連歯下駄（本稿のⅡ A 型式）は17世紀後半以後、急激に普及する。
- ③陰卯下駄（本稿のⅡ B 型式）は18世紀後半以前には普及していない。
- ④表つきの下駄類（本稿のⅡ B 型式のうちW40・41）は、17世紀前半以前に存在したかどうか不明。
- ⑤露地下駄（本稿のⅡ B 類）は江戸初期から存在する。

これを基準に当遺跡出土の下駄の時期を検討した結果、従来から指摘されていた変遷に合致する例が多いものの、Ⅱ B 型式のなかに1630年～17世紀後半に属すると思われる資料が存在することが分かった（W27・28・32）。ただし、これらの下駄がただちに、陶磁器の編年から得られた上記の年代に符合するかどうかは確定できないため、その可能性を示す資料として記すこととする。

その他の木器

本遺跡出土の木器のうち、漆器、下駄を除いたものを列記すれば以下のとおりとなる。

服飾具（横櫛-W42）、木筒（W43・44・58）、食事具（箸-W45・46・47）、紡織具（木錘）、容器（曲物・漆盆-W62・栓-W48・桶）、雑具（飾り板-W51・52・53）、武器（鞘？-W55）、水道施設（W68・69・70・71・72・73）、その他の用途不明品。

横櫛（W42）は、用途の点からみれば挿櫛とされるもので装飾性に富むものである。表面に梅とウグイスを、裏面には花のつぼみを肉筆書きし、それが乾燥する直前に金粉を蒔く蒔絵の技法が確認されている。また、ウグイスの目と頬の表現には黒漆を用いている。

櫛の齒は1cmあたり11本を数える。

木簡のうちW43は表面に「口江白川村源藏」の墨書が認められる。一文字目は「酉」かと思われる。地名と人名を記した木簡と考えられる。裏面には墨書がなく、下端を欠失する。

また、裏面に「口口寺」と記された曲物?の底板がある(W44)。城下町における社寺の配置は、寺が兵士の屯所となる計画であったため、防御上重要な門あるいは港付近に配されたことが明らかとなっている。当時の絵図を検討しても、今回の調査区内あるいはその近隣には寺の存在が認められない。また、絵図等にみられる明石城下の社寺名にはこの曲物に記されたと考えられる寺名は確認できないため、歴代城主が信州松本、美濃加納、丹波篠山、大和郡山、越前大野などから度々移動してきたことから、この曲物もこれらの地に故地が求められる可能性もある。

W58の片面にも墨の痕跡が認められるが、文字の判読は不可能である。

箸(W45・46・47)のうち、W45・46は全長がそれぞれ22.4cm、22.9cmである。

W55は、鞘と考えた木製品である。残存長31.0cmで、端部から20cmほどのところに突帯が削り出されている。

出土木製品の傾向

今回の調査で出土した木製品は、種類、量に乏しく、良好な一括資料が少ないため、時期別の形態や使用樹種の変化など、細かい検討を行うには不十分であるが、気付いた点を二、三述べることにしたい。

冒頭でも指摘したが、工具・農具・漁猟具などの生産に関する道具類および未製品が欠落していることが最大の特徴である。用途不明の小片などが出土しており、それらが生産用具にならないという確証はない。しかし、全体の出土量の8割近くを占める容器や食器、服飾具と比べて、生産用具が存在したとしても量的には乏しく、日常的な消費生活に関連する遺物が圧倒的に多いことが判る。これらは、今回の調査区が武家屋敷に限定されていることと矛盾しない。また、北野氏による製作技術の分析により、武家屋敷内の階層性が具体的に示されたことは大きな成果である。鞘状の木製品(W55)や、横櫛(W42)の出土も当遺跡を特徴づける遺物のひとつとして挙げられよう。

注

1) 古泉 弘『江戸を掘る—近世都市考古学への招待—』柏書房 1988年

3. 石製品・角製品

明石城武家屋敷跡の一連の調査では、多数の石製遺物が出土している。しかしその多くは、断片的資料であるため、本報告書では、形状をよくとどめる硯10点、石臼2点について、実測図を収録し記載をおこなうほか、角製品1点を記載する。

硯 (図版 S1~10)

ここで記載する硯は、いずれも長方形を呈する長方硯である。各資料の計測値および石材については、付表に示す。また、計測部位および硯各部の名称については、第62図に示したものをを用いる。

S1は丁寧な作りの小型硯である。海と丘の区別は判然としないが、ごくわずかに図の上部が深くなっており、墨の痕跡をとどめる。硯中央部(墨道)は、使用のため凹みを生じている。硯面の彫り込みはほぼ垂直で、硯面はシャープな長方形を呈している。

S2は海部を欠損している。縁部もすべて欠いており、その痕跡をとどめるにすぎない。丘の中央部は、使用のためやや凹んでいる。側面に墨の痕跡をとどめている。

S3も小型の硯である。丘の中央は、使用のため著しく凹んでおり、その凹みは海部にまで達している。硯面はシャープな長方形を呈している。硯面、硯陰および側面に墨が顕著に付着している。

S4は、長い短冊状の平面形を呈する。丘部は強度の使用のため著しく凹んでおり、それが海部にまで達している。硯面は隅丸長方形を呈している。硯面周辺には墨が著しく付着している。

S5は隅丸長方形の硯面をもつものである。丘の中央部には、使用のための凹みが明瞭に観察される。

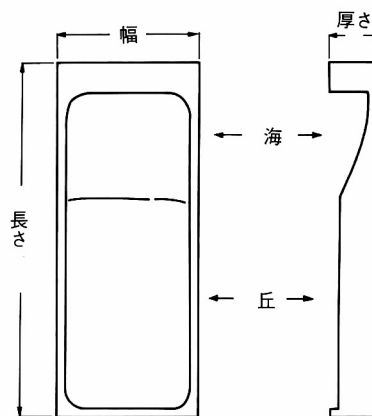
S6は、海部で欠損している。硯面は隅丸長方形を呈し、丘の中央部は使用による凹みが顕著である。硯面全体に、墨の付着が見られる。

S7は、S6と同様海部で欠損している。硯面は隅丸長方形を呈し、縁はやや厚く作られている。丘左半が、使用のため著しく凹んでいる。

S8は海部で欠損しているが、本遺跡出土の硯の中で最大の資料であろう。硯面は隅丸長方形を呈している。他の資料に比べて使用はあまり進んでおらず、丘の中央は製作時の膨らみをとどめている。硯面から海部にかけての不規則な線状付着物は、埋没後に付着したものであろう。

S9は隅丸長方形の硯面を見せる。使用はあまり顕著ではなく、8と同様に丘部は製作時の膨らみをとどめている。海部に墨の付着が認められる。

S10は、S9と極めて近似した形態の資料である。隅丸長方形を呈する硯面を見せ、使



第62図 硯各部の名称と計測位置

用のため丘部の中央はわずかに凹んでいる。硯面全体に、隅が付着している。

砥石 (図版 S12~14)

S12はほぼ半欠していると思われる、細粒の仕上げ砥である。中央部の幅がやや広くなる、「わらじ」状の形態を呈する。表裏両面が使用されているが、特に図右面が使用のため平滑な面となっている。側面には製作時の工具痕をとどめている。

S13はやはり折損した資料で、細粒の仕上げ砥である。図中央の面には、研磨の痕跡が見られるが、面自体は凹凸が著しく荒れた状態であり、主たる使用面とは考えにくい。裏面は粘板岩のラミナに沿って剥落した面である。両側面が図上方にかけてゆるやかなカーブを描き、やや幅を減ずる。むしろこの両側面（特に左側面）が主たる使用面であり、本来角柱状を呈していた砥石が、ラミナに沿って破損したものである可能性が高い。

S14は長方形を呈する、扁平な砥石である。図左面が使用面であり、側面および裏面には製作時の整形痕をとどめる。使用面中央は、なめらかな凹みを見せている。

石 臼 (図版 15~16)

S15・S16は石臼の下臼である。いずれも花崗岩製で、臼面は、ともに8分画であるが、S15は3溝、S16は5溝である。両資料ともに使用のため臼面には一部光沢が見られるが、S15では風化のためか溝の彫り込みの稜がやや不明瞭になっている。S16では、中央の孔に鉄製の回転軸が残存している。

法量は、S15が直径30.0cm、厚さ7.8cm、S16が、直径28.0cm、厚さ7.5cmである。

角製品 (図版 12)

S12は、角製（または象牙製）のへらである。図左面の右側縁が背にあたり、相対する縁辺はゆるやかな丸みをもちつつ薄く仕上げられている。上部は次第に隅丸正方形の断面を呈するように作られ、上端近くに円形の1孔が設けられている。孔の周辺には、側面と上面にかけて線状の細い溝が刻まれており、紐ないしは房がつけられていたものと思われる。全体に丁寧な研磨により、美しい光沢をもった仕上がりとなっている。

まとめ

今回記載した硯には、概ね下記のような類型が認められる。

S7.9.10は、幅が極めてよく近似し、また石材も同一であることから、同じ産地の製品と考えられる。また、大きさはこれらと異なるものの、同一石材を用いたS6.8も同一の産地である可能性が高いであろう。

これに対して、S5ではS6~10に比べて丘部の比率が大きく、石材も全く異なっていることから、別の産地を考えねばなるまい。

またS3.4は、長さは大きく異なるものの、石材がよく類似し、幅もほぼ同じである点が注目される。石材の点では、S2もこれらに類似している。

S1の小型硯は、石材は黒色の粘板岩であるが、S5とはやや異なっている。

S 6～10は、いわゆる高島石に酷似しており、滋賀県の同地産と考えてよいであろう。他の硯については、現在のところ産地を明確に比定する根拠に乏しいが、少なくともS 4か所の産地から流通されたと思われる記載の硯は、江戸時代後期における商品流通の一端を示すものと思われる。

4. 金属製品

金属製品は82点出土している。内訳は、簪が6点、煙管の雁首が8点、吸い口が7点、銅銭が31点の他に、包丁、刀、飾り金具、釘、油注、釣など多種にわたっている。これらは別表94～96頁に示してある。

5. 貝類

明石城武家屋敷跡では、全地区にわたって貝類が出土している。ほとんどが包含層中から出土しており、遺構からまとまって出土したものがないので細かな分析はできないが、確認できたものを挙げると以下のとおりである。

巻き貝類： アカニシ、サザエ、アワビ、バイ、タニシ

二枚貝類： ミルクイ、カキ、ハマグリ、ウチムラサキ、アサリ、ヤマトシジミ
カラスガイ

地区別の出土傾向をみると、アカニシ、ミルクイなどの高級品が西中ノ町地区で出土量が多く、東中ノ町地区で少ないことが指摘できる。

貝独楽 東中ノ町地区で出土したバイに玩具に転用されたものが1点ある。殻口の1/3ほどを残して切断され、貝独楽（ばいごま）として使用されていたようである。殻の内部は外面に比べてあまり風化しておらず内部には蠟を流しこんでいたものと思われる。兵庫県内では、伊丹市伊丹郷町遺跡で出土例がある。

西中ノ町地区1区では、直径14mmの整円形の孔が連続して開けられた貝殻片が2点出土している。貝種はアコヤガイと考えられ、1点は7箇所以上、もう1点は5箇所以上の円が確認できる。断面観察によると、内面側から先の円い彫刻刀様の工具を使用してくり抜いていることがわかる。いずれも直径が同じで、隙間なく切り取られているところから、まとまった貝細工に利用するための円盤を切り取ったものと考えられる。円形という形状からみると、ボタンに加工したとも考えられなくはないが、アコヤガイという殻の薄い貝を用いていることから考えて、その可能性は低いといえる。

VIIの6.は公開していません

7. 明石城武家屋敷跡出土漆器資料の製作技法

(財)元興寺文化財研究所 北野 信彦

1. はじめに

明石城武家屋敷跡からは、明石城城下町・武家地関連の遺構および遺物が多数検出されている。その内には漆器資料も多く含まれており、今回、兵庫県教育委員会の御厚意により、これらの製作技法について自然科学的な手法を用いて調査する機会を得た。その結果を報告する。

2. 調査方法

一般に漆器の製作は、原木から木地をつくり挽き物・板物の形態にする木胎製作の工程と、その木胎に下地および漆を塗布し、装飾、研磨作業を行う漆工の工程から成り立っている。本稿では、漆器資料の製作技法に関する調査として、まず形態、漆塗り表面の状況を表面観察した後、(1) 用材選択 (2) 木取り方法 (3) 漆膜面の塗り構造 (4) 色漆の使用顔料、等の項目別に自然科学的な手法を用いた分析を行った。以下、その調査方法を記す。

(1) 用材選択 (樹種鑑定)

本漆器資料の内、主要なものに関しては、島地先生によって同定がなされている。本稿では、この結果を参考にさせていただくとともに、それ以外の資料については、以下の方法をもって同定作業を行った。

樹種の同定作業は、出土木材の内部形態の特徴を顕微鏡で観察し、その結果を新材と比較することでなされる。試料は、遺物本体をできるだけ損傷しないように破断面などオリジナルでない面から木口、柾目、板目の三方向の切片をカミソリの刃を用いて作成した。切片は常法に従い脱水し、検鏡プレパラートに仕上げた。

(2) 木取り方法

挽き物類である漆器資料の木取り方法の調査は、樹種鑑定の切片作成時に同時に行った。

(3) 漆膜面の塗り構造

まず肉眼で漆器資料の漆塗り表面の状態を観察した後、簡易顕微鏡を用いて細部の観察を行った。次に漆器資料の表面洗浄作業の際に出た1 mm×3 mm程度の漆膜剥落片を採取し、合成樹脂(エポキシ系樹脂/アラルダイトGY1252 JP. HY837)に包埋した後、断面を研磨し、漆膜の厚さ、塗り重ね構造、顔料粒子の大きさ、下地の状態等について顕微鏡観察を行った。

(4) 色漆の使用顔料の定性分析

色漆に用いられた顔料の無機物に関する定性分析には、先の漆膜剥落片をカーボン台に取り付け、日立製作所S-415型の走査電子顕微鏡に掘場製作所EMAX-2000エネルギー分散型X線分析装置(X線マイクロアナライザー)を連動させてそれを用いた。分析設定時間は500SEC. 分析ポイントは30倍スポット照射。なお分析チャートの補正には、Geochemical Journal vol.8 p175-192 (1974)「1974 compilation of data on the GSJ

geochemical reference sample JG-1 grandiorite and JB-1 basalt」Atusi Ando and others
 のJG-1、JB-1サンプルを用いた。

3. 調査結果

今回の調査で用いた漆器資料は、合計61点である。これらの漆器資料について、前章で項目別に記した方法を用いて製作技法の調査を行った。その結果を（表13）に示す。

まず、本漆器資料の材の利用（用材選択）は、挽き物類では、広葉樹材は11種類（オニグルミ、ハンノキ属、クリ、ブナ、ニレ科《ケヤキもしくはニレ》、カツラ、サクラ亜属、エゴノキ、イタヤカエデ、トチノキ、ミズキ）、板物類では、針葉樹材2種類（ヒノキ、マツ）の合計13種類である。

表13 出土漆器資料観察表

No.	器型	木取り	樹種	塗り表面			顔料			塗り構造	
				内	外	文様	内	外	文様	内	外
128	蓋	—	トチノキ	赤	黒	外—赤紋	ベンガラ		ベンガラ	I	II
129	板物	—	ヒノキ	暗紫色	暗紫色	無				VI	VI
130	杯	A	トチノキ	赤	暗紫色	無	ベンガラ			I	I
131	杯	A	イタヤカエデ?	赤	赤	内—金	HgS	HgS	Au	V	VI
132	杯	—	不明	赤	赤	内—金	HgS	HgS	Au	V	VI
133	碗	A	オニグルミ	赤	黒	無	ベンガラ			III*	III*
134	碗	B	エノキ	赤	赤	外—黒絵	HgS	HgS		X	XI
135	碗	B	ケヤキ	赤	赤	無	HgS	HgS		多	多
136	碗	A	ケヤキ	赤	赤	無	HgS	HgS		VI	VI
137		B	ブナ	暗紫色	暗紫色	金(高蒔絵)	ベンガラ		Au	V	VI
138-1		A	ミズキ	赤	黒	無	ベンガラ			III*	I
138-2		A	トチノキ	赤	赤	無	ベンガラ	ベンガラ		I*	I
138-3	板物	—	ヒノキ	黒	黒	無				I	I
139	碗	B	ケヤキ	赤	黒	無	ベンガラ			X	X
140	皿	A		赤	黒	無	ベンガラ			XII	XII
141	皿	A	トチノキ	赤	暗紫色	無	ベンガラ			I	I
142-1		B	ブナ?	赤	黒	外—赤絵	ベンガラ		ベンガラ	I	II
142-2	板物	—	マツ	黒	黒	無				I	I
143	碗	A	ブナ	赤	黒	無	ベンガラ			I	I*
144	碗	A	カツラ	赤	暗紫色	無	ベンガラ			I	I*
145	碗	A	クリ	赤	黒	無	ベンガラ			*III	III*
146-1	碗	A	クリ	赤	黒	無	ベンガラ			*I	I*
146-2	碗	B	クリ	赤	黒	無	ベンガラ			*I	I
146-3	碗	A	カツラ	赤	黒	無	ベンガラ			I*	I*
147	板物	—	ヒノキ	暗紫色	暗紫色	無				I	I
148	碗	?	トチノキ	赤	暗紫色	外—銀絵	ベンガラ		Ag+	I	II

No.	器型	木取り	樹種	塗り表面			顔料			塗り構造	
				内	外	文様	内	外	文様	内	外
149	杯	B	エゴノキ	赤	暗紫色	無	HgS			I*	I
150	杯	C?	エゴノキ	赤	緑	無	HgS	As+S		V	V
151-1	椀	A	トチノキ	赤	暗紫色	外一金	ベンガラ		As+S	I	II
151-2	椀	A	トチノキ	暗紫色	暗紫色	銀	ベンガラ	ベンガラ	Ag++	I	II
151-3	椀	B	トチノキ	赤	赤	外一金銀	ベンガラ	ベンガラ	As+S(金) Ag(銀)	I	II
151-4	椀	A	カツラ	黒	暗紫色	無				I	I
152	蓋	—	ヒノキ	暗紫色	赤	無		HgS		VII	VII
153	椀	A	トチノキ	赤	黒	赤紋	ベンガラ		ベンガラ	I	II
154	椀	A	クリ	赤	黒	無	ベンガラ			III*	III*
155	椀	A	クリ	赤	黒	無	ベンガラ			III*	III*
156	椀	A	トチノキ	赤	黒	無	ベンガラ			I	I
157		B	クリ	赤	黒	無	ベンガラ			I	I
158	椀	B	ブナ	赤	赤	無	ベンガラ	ベンガラ		I	I
159	椀	B	ブナ	赤	黒	無	HgS			III	III
160-1	椀	A	ブナ	黒	緑	外一赤絵		As+S	HgS	III	IV
160-2	椀	B		赤	黒	無	ベンガラ			I	I
160-3	杯	B	ブナ?	赤	赤	内一金(高蒔絵)	HgS	HgS	Au	V	VI
161	椀	A	カツラ	黒	黒	外一赤絵			ベンガラ	I	II
162	クシ	—	不明	金	金	蒔絵	Au	Au	Au	木+黒+金	
163		B	トチノキ	赤	黒	無	ベンガラ			I	I
164	椀	B	ブナ	赤	黒	無	HgS			IV	IV
165-1	椀	A	トチノキ	赤	赤	無	ベンガラ	ベンガラ		I	I
165-2	板物	—	ヒノキ	赤	黒?	無	ベンガラ			I*	I*
166	高台のみ	C	広葉樹散孔材	黒	黒	黒				I	I
169	皿	A	ハンノキ属	内赤外黒	黒	無	HgS			VII	VII
170	蓋(椀?)	A	トチノキ	赤	黒	無	ベンガラ			I	I
171	板物盆	—	ヒノキ	暗紫色	暗紫色	無				VII	VII
172	椀	B	ブナ	黒	緑	内一赤絵		As+S	ベンガラ	多	多
173	ロクロ挽き物	C	ミズメ	—	一朱線				HgS	—	—
180	椀	A	トチノキ	赤	黒	外一金絵	ベンガラ		As+S	I	II
237	椀	A	ブナ	赤	暗紫色	外一赤絵	ベンガラ		ベンガラ	III*	II*
239	蓋	A	ケヤキ	赤	黒	無	HgS			VIII	VIII
A	椀?	A	トチノキ	赤			ベンガラ		ベンガラ	I	II
B	椀	B	サクラ亜属	赤	暗紫色	無	HgS			III	III
D-1	椀	—	ケヤキ	赤	黒	無	HgS			VII	VII
D-2	椀	—	ブナ	赤	赤	無	ベンガラ	ベンガラ		I	I

*は、漆膜層が特に薄いもの

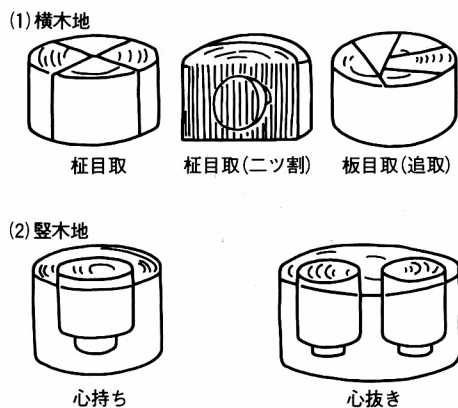
末沢（1975）の研究によると、近世以降のろくろ挽き物である漆器類の用材には、早晚材の組織の差が少ない広葉樹の散孔材もしくは、ケヤキ、ニレのような環孔材ではあるが韌性がある材が適材であるとしている。（註1）これらの木材の組織、工作の難易、割れ狂い、色光沢、塗り等を考慮に入れて分類すると表14に示すようになる。また、板物である漆器類の用材には、アテ（アスナロ）、ヒノキを最良材とし、ネズコ、サワラ、ヒバ、スギ、モミ、マツ等の針葉樹を適材であるとしている。この点を考慮に入れて、本漆器資料の用材選択の傾向をみてみると、挽き物類、板物類ともに、最良材であるケヤキ、ニレ、ヒノキ材などと、かたや加工や入手の容易さという大量生産の点からみて極めて一般性が高いと考えられる、トチノキ、ブナ、マツなどの適材の2種類のグループに大別された。

次に、挽き物類である本漆器資料の木取り方法をみてみる。資料は、横木地と堅木地に大別され、横木地は、板目取り、柁目取りの2種類の方法が見出された。（第68図）近世以降の近江（蛭谷）系木地師による挽き物類の木取り方法をみてみると、横木地の場合、板目取りはトチノキ地帯に、柁目取りはブナ地帯に定着し、その細かい技術は、個々の集団に受け継がれてきたとされている。（註2）一般にトチノキは、芯を中心にして割れ狂いの大きい赤味が広がり、表皮に近い部分にシラタといわれる白い部分がある。シラタは、多く取れても四寸（約12cm）程しか利用できないので、おのずと碗を伏せたような形で木

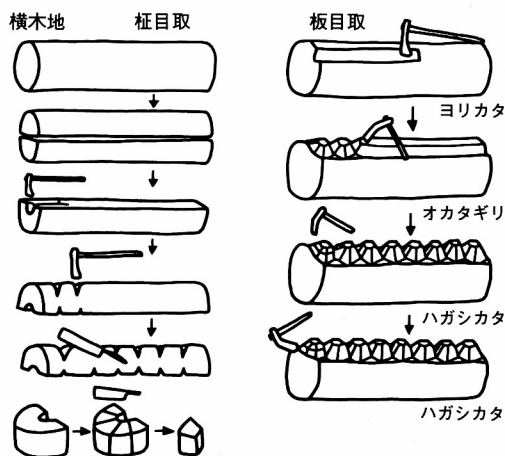
表14 ろくろ挽き物の用材分類一覧表

A 環 孔 材	a. ケヤキ系 ニレ、ケヤキ、シオジ、ハリギリ、クリ、ヤマグワなど	木目が明瞭に表われる。堅硬であるが韌性もあり、木皿など薄手物に適する。
	B 散 孔 材	
	b. サクラ、カエデ系 イタヤカエデその他のカエデ類、ヤマザクラ、ウワミズザクラ、ミズメなど	白木で美しい光沢があり、白木地物にも適している。割れ狂いが少なく、やや堅さはあるが、加工は容易。下地が少量で足りるので、塗り物にもっとも適する。
	c. ブナ、トチノキ系 トチノキ、ブナ、ミズキ、カツラ、ホオノキなど	軟かくて加工は容易であるが、乾燥が難しくて狂いも多い。しかし、大量に入手できるので使用量は大である。
	d. エゴノキ系 エゴノキ、アオハダなど	白い軽軟で加工が容易である。仕上げは見た目にもよく、彩色もし易いので、玩具、小物等に向いている。とくにエゴノキは大材を得られないが、入手が容易であり、割れにくいので使用に適する。

橋本鉄男「ろくろ、ものと人間の文化史31」1979などを参考にして作成



第68図-1 横木地と堅木地の要領
（末沢春一郎「近世以降木地師のろくろ
製品製作技術の研究」原図）



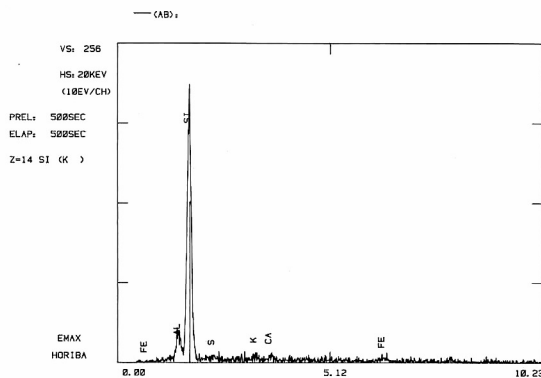
第68図-2 近世会津木地師の木取りの方法
（註2）須藤（1982）より原図引用

第68図 近世以降の漆器(挽き物類)の木取り方法

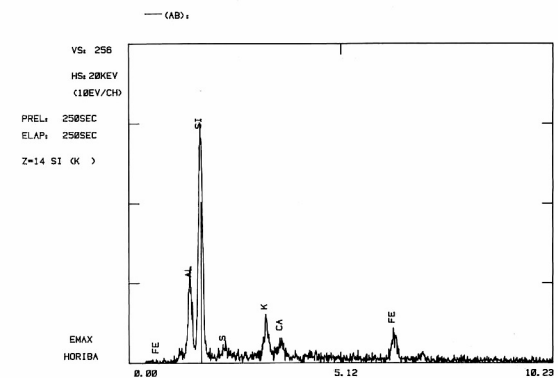
地を取る板目取りの方法が適している。一方、ブナは、芯に近いところまで利用が可能なので、木の狂いが少なく木地が多く取れる柾目取りの方法が適している。このような用材の利用は、大変理にかなっているといえよう。この事例を考慮に入れて本漆器資料の樹種と木取り方法の関係をみてみる。その結果、トチノキ材の場合は横木地板目取り、ブナ材の場合は、横木地柾目取りの割合がかなり高い傾向が見出された。この事からも、本漆器資料の木胎製作の工程が、一環してそれぞれの材の性質を考慮に入れたものであったことが理解される。

次に、個々の漆器表面の漆塗り技法をみてみる。塗りは、地と文様からなり、本漆器資料の場合、無文様で地塗りのみの資料と、家紋等の漆絵文様を地内外面に描く漆器に分かれた。また、一部の資料には、金粉による高蒔絵がほどこしてあった。

漆膜面の塗り構造、特に木胎と漆塗り層との間の下地層を定性分析してみると、無機物



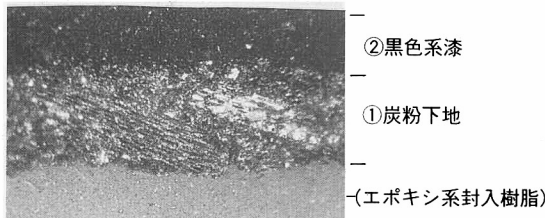
第69-1図 サビ下地のX線分析結果 下層(第2層)
(資料No.135)



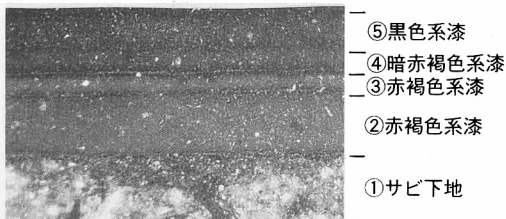
第69-2図 サビ下地のX線分析結果 上層(第1層)
(資料No.135)

(写真1-①、②) 黒色系漆の塗り構造

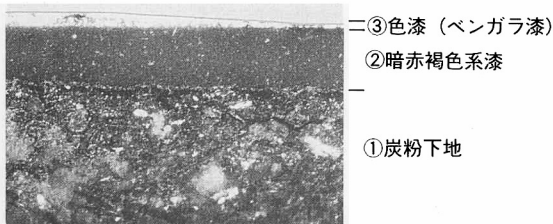
(写真1-①)



(写真1-②)



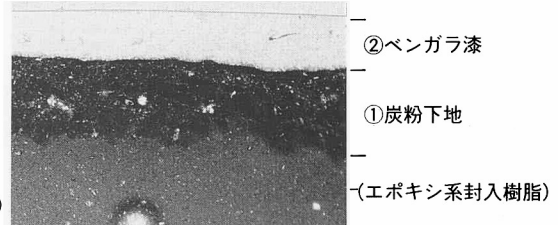
(写真3)



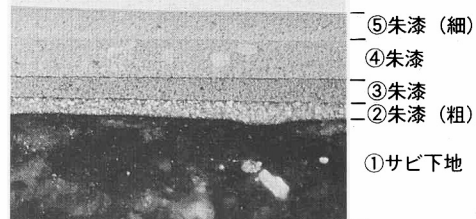
(写真3) 有加飾漆膜の塗り構造

(写真2-①、②) 赤色系漆の塗り構造

(写真2-①)

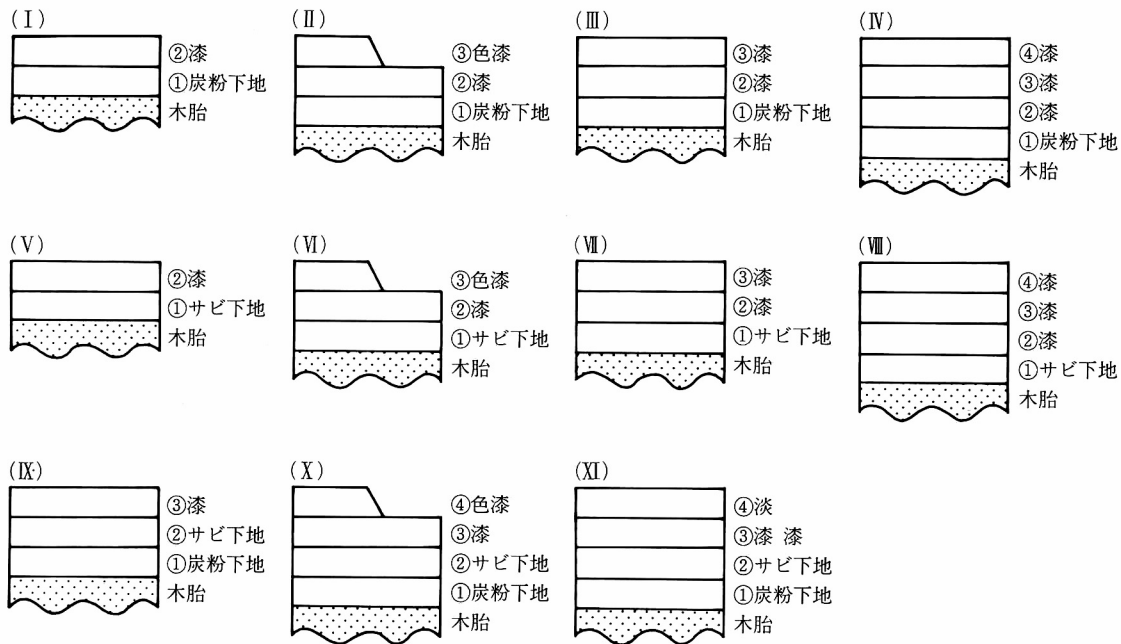


(写真2-②)



(すべて×76)

第70図 漆膜面の塗り構造(写真)



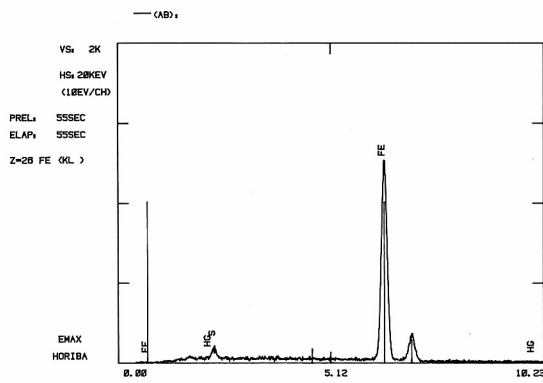
第71図 漆塗り構造の分類

を含んでいないため、ピーク自体がほとんど見出されない資料と、Al(アルミニウム)、Si(シリカ)、K(カリウム)、Fe(鉄)などの粘土鉱物もしくは珪藻土の構成要素に近いピークが認められる資料に分けられた。(第69図-1・2)さらにこれらを顕微鏡観察し、前者を、炭粉(柳炭および松煙の2種類)を柿渋などに混ぜて用いる炭粉下地(代用下地)、後者を、細かい粘土もしくは珪藻土を生漆に混ぜて用いるサビ下地(堅下地もしくは本下地ともいう。)と理解した。また、地の漆塗り層は、いずれも1層塗りから4層塗りまで見出され、文様等の装飾は、いずれも地の上塗り層の上に描かれていた。(第70図写真1・2・3)(第71図)

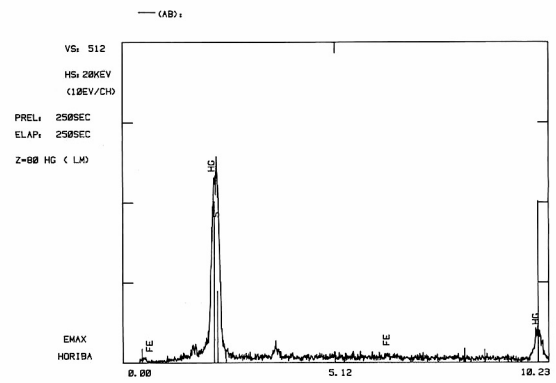
このような近世漆器の製作技法のあり方を示す民俗事例の一つに、新潟県糸魚川市大所のナカジマ家小椋丈助氏による実用に即した近世木地師、漆器碗の製作技法に関する口碑資料がある。(註3)

それによると、〔上品〕布着せ(碗の欠け易い縁や糸じりに麻布を巻く)～サビ下地(砥の粉を生漆に混ぜたサビを二回塗布)～下塗り(生漆)～上塗り(生漆に赤色系顔料もしくは黒色系顔料を混ぜた赤色系漆もしくは黒漆)の工程をふみ、人一代は持つ堅牢なもの。〔下品〕炭粉漆地(柳炭や松煙を柿渋に混ぜて用いるサビ下地の代用下地)～上塗り(生漆の使用量を節約するために偽漆である不純物を多く混入して用いる粗悪な漆)。〔中品〕下品とほぼ同様の工程をふむが上塗りの漆の濃度を濃くしたり、ミガキを丁寧にしたりする。下品よりかなり持ちが良い。などとしており、各ランク別の工程をよく示している。この事例を参考にして本漆器資料の塗り構造をみると、きわめて簡素で一般的な日用漆器の塗り構造を持つ資料から、やや堅牢で複雑な多層塗り構造を持つ優品資料まで、いくつかのランクに分類された。

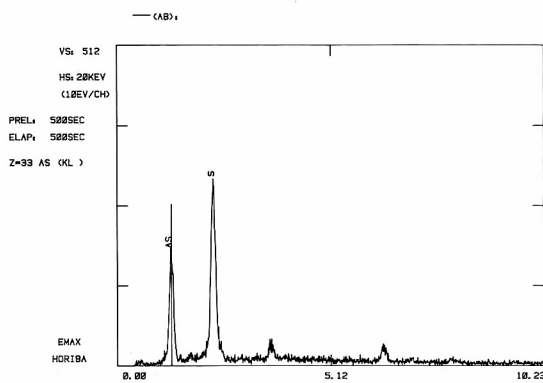
次に、色漆の性質についてみる。赤色系漆の使用顔料の定性分析結果では、Fe(鉄)のピークが強く認められる資料(第72図)、Hg(水銀)およびS(硫黄)のピークが強く認



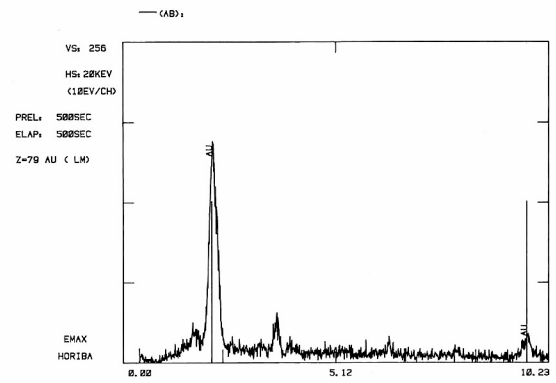
第72図 赤色系漆(ベンガラ漆)のX線分析結果



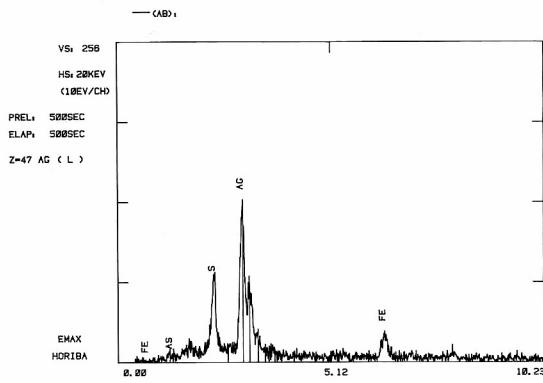
第73図 赤色系漆(朱漆)のX線分析結果



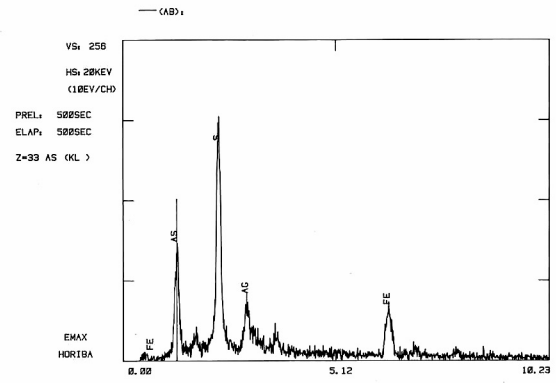
第74図 緑色系漆のX線分析結果(硫化ヒ素)



第75図 金粉状蒔絵装飾(金彩)のX線分析結果



第76-1図 銀粉状装飾(銀彩)のX線分析結果



第76-2図 銀粉状装飾(銀彩)のX線分析結果

められる資料(第73図)の二種類に分けられた。これらをさらに顕微鏡観察し、それぞれ、ベンガラ(酸化第二鉄 Fe_2O_3)、朱(辰砂もしくは水銀朱 HgS)の二種類の異なる赤色系顔料を用いた赤色系漆であると理解した。ベンガラ、朱ともに赤色系顔料としての歴史は古いが、近世漆器の顔料としては、幕府の統制物資であった朱に比較して、ベンガラの方が廉価で一般的であったようである(註4) 本漆器資料の場合にも、簡素で一般的な塗り構造を持つ資料にはベンガラを、堅牢で複雑な多層塗り構造を持つ資料には朱を使用する例が多く、その状況が理解される。

緑色系漆の定性分析結果では、いずれも石黄(硫化ヒ素 $As+S$)のピークが強く認められた。(第74図) これらをさらに顕微鏡観察することで、藍等の染料で青色に着色した

漆に石黄粉（黄色）を混入する、当時の色漆の髹漆技法の一端が確認された。

金粉状蒔絵装飾（金彩）の定性分析結果では、Au(金)のピークが強く認められる資料が多い。(第75図) これらのいくつかについての顕微鏡観察では、生漆で絵柄を肉筆書きし、それが乾燥する直前に金粉を蒔く蒔絵の技法が顕著に確認された。ただ、No160-3資料等一部の資料では、石黄による代用金彩の使用が確認され、資料自体の性格を考える上で参考となる。また、本漆器資料の銀粉状装飾（銀彩）の定性分析結果では、Zn(スズ)等の代用銀彩ではなくAg(銀)のピークがいずれも強く認められた。(第76図)

(4) まとめと若干の考察

以上、前章では項目別に明石城武家屋敷跡出土漆器資料の製作技法をみてみた。その結果、本漆器資料は、簡素で一般的な日用漆器資料から、やや堅牢で複雑な髹漆技法を持つ優品資料にいたるまで、いくつかのランク別のグループに分類された。そしてこれらは、文献資料等を参考にしてみると、基本的にはいずれも実用に即した生活什器（飲食器）類であることも理解された。(註5)

すなわち、挽き物（碗、蓋、皿、杯）の場合、トチノキ材を用いた資料は、いずれも炭粉下地で、地の漆塗りは一層塗りという簡素な製作技法である。そしてその使用顔料も、ベンガラ（赤色系漆）、石黄（金粉状装飾）という廉価で一般的なものであった。一方、ケヤキ材を用いた資料は、いずれもサビ下地で、やや複雑な多層塗り構造を持つ優品である。そしてその使用顔料も、朱（赤色系漆）・金（金粉状装飾）であり、トチノキ材のそれとは大きく異なっている。また、板物類であるが、ヒノキ材を用いた資料のように、個々の資料によって髹漆技法や使用顔料が異なる資料も見出されている。

以上のような実例によって示される製作技法別グループは、それぞれの漆器資料の使用目的や使用階層の差、文化的・経済的な時代背景のあり方に対応していたものであろう。

今回の調査対象となっている明石城武家屋敷跡は、絵図等の文献史料調査により、西中ノ町、中ノ町は上、中級武家地に、東中ノ町地区は下級武家地に関連した遺構であると考えられている。そして、各発掘地区からは、江戸時代全般にわたり各年代の漆器資料がある程度まとまった形で出土している。

これら個々の漆器資料を、第Ⅰ期〔17世紀前〕、第Ⅱ期〔17世紀前～18世紀前〕、第Ⅲ期〔18世紀後～19世紀中（幕末）〕の三つの時期に大別し、製作技法（用材選択および漆塗り構造）の面からみてみた。(表15-1・2)

表15-1 年代別出土漆器資料の髹漆技法

	年代 髹漆技法	I	II	III	IV	不明	合計
		17世紀前期	17世紀前期 -18世紀前期	18世紀後期 -19世紀中期(幕末期)	江戸時代全般		
有加飾率	全 個 体 数	11	19	18	2	11	61
	うち装飾をほどこした個体数	5	5	5	0	3	18
	%	45.5	26.3	27.8	0	27.3	29.5
サビ下地率	全 個 体 数	11	19	18	2	11	61
	うちサビ下地(粘土下地)をもちいた個体数	1	4	10	0	2	17
	%	9.1	21.1	55.6	0	18.2	27.9
朱使用比率	赤 色 素 漆 の 全 調 査 漆 器 の 数	11	23	21	3	12	70
	うち朱の使用が検出された件数	0	7	14	0	1	22
	%	0	30.4	66.7	0	8.3	31.4

表15-2 年代別出土漆器資料の樹種

樹種	年代	I	II	III	IV	不明	合計
オニグルミ			1				1
ハンノキ属				1			1
クリ		1	5				6
ブナ		1	5	2		3	11
ニレ科		1	3	2			6
カツラ		1	3				4
サクラ亜属						1	1
エゴノキ				2			2
イタヤカエデ				1			1
トチノキ		5	1	4	1	4	15
ミズキ						1	1
広葉樹散孔材				1			1
ヒノキ		1		3	1	1	6
マツ		1					1
不明			1	2		1	4
合計		11	19	18	2	11	61

その結果、まず第Ⅰ期・第Ⅱ期の比較的古い年代の漆器資料の場合、クリ材を用い、やや大振りが高台が高く、ロクロ目を多く残す飯椀タイプのものが多く見出された。そして、これらの資料を中心として、薄い漆層を1-2層地塗りに施す、きわめて簡素な髹漆技法の資料が全体的にやや多い特徴を持っている。一方、第Ⅲ期の比較的新しい年代の漆器資料の場合、最良材、大量生産の点からみて一般性が高いと考えられる材問わず、やや多層で複雑な髹漆技法を持つ優品が多い特徴が認められた。このような傾向は、各地の近世消費地遺跡出土漆器資料の場合でも見出されており、一般性が高いものようである。(註6)

次に、個々の漆器資料の製作技法を各発掘地区別に集計・比較してみた。(表16-1・2) その結果、西中ノ町・中ノ町地区出土漆器資料の方が、東中ノ町地区のそれに比較して、総体的にサビ下地を用いた優品資料が多い傾向が見出される。このことは同時に、本漆器資料が出土した遺構の性格を考える上でも、何らかの示唆を与えてくれるものといえよう。

さて、近世とりわけ江戸時代は、今日の各地の伝統工芸、物産、名産品の基礎をなす地方産業の多くが発達した時代でもある。本稿で取り上げたような日常生活で用いられていた漆器の生産に関しても、主要な大規模生産地から、きわめて地域色の強い小規模な地方生産地まで、数多くの生産地が発達した。そしてこれらの生産地は、特に文化・文政年間以降、個人や複数の組織による椀講などの需要に応じて、十人揃、二十人揃など、優品から廉価で大量生産的なものに至るまで、さまざまな器形の漆器を複雑な流通経路で消費地に供給していたようである。本漆器資料の構成が、どのような生産地の漆器に依るものか、個々の資料について明確な判断を下すことは、この程に関する調査自体発展途上にある今日、若干時期尚早の感もある。

その内でも、No.135, 136資料は、地塗りのみで、内外両面に赤色系漆(朱漆)を塗布するいわゆる根来手朱漆器椀である。当初からこれらは、近世当時からその存在が広く知られながら文献史料等の裏付けが乏しく、その実態に不詳な点が多い、播州姫路近世書写塗りとの類似性が指摘されていた資料でもある。今回の調査では、いずれの資料も、ケヤキ材を用いた木胎にやや粗い粘土系サビ下地および細かい珪藻土系サビ下地を二層以上施

表16-1 地区別出土漆器資料の髹漆技法

	髹漆技法	地区				合計
		中ノ町地区	西中ノ町地区	東中ノ町地区	不明	
有加飾率	全個体数	13	38	8	2	61
	うち装飾をほどこした個体数	5	11	2	0	18
	%	38.5	29.0	25.0	0	29.5
サビ下地率	全個体数	13	38	8	2	61
	うちサビ下地(粘土下地)をもちいた個体数	6	11	0	0	17
	%	46.2	29.0	0	0	27.9
朱使用比率	赤色系漆の数が全調査された数に占める割合	16	44	7	3	70
	うち朱が使用された件数	6	13	2	1	22
	%	37.5	29.6	28.6	33.3	31.4

表16-2 地区別 出土漆器資料の樹種

樹種	地区				合計
	中ノ町地区	西中ノ町地区	東中ノ町地区	不明	
オニグルミ		1			1
ハンノキ属	1				1
クリ		6			6
ブナ	5	3	2	1	11
ニレ科	2	4			6
カツラ		3	1		4
サクラ亜属				1	1
エゴノキ		2			2
イタヤカエデ		1			1
トチノキ	3	10	2		15
ミズキ		1			1
広葉樹散孔材			1		1
ヒノキ	1	4	1		6
マツ		1			1
不明	1	2	1		4
合計	13	38	8	2	61

している。(図68, 69) そして地塗り自体も、塗り直し補修を含む、堅牢で複雑な髹漆技法をもっていることが確認された。この結果は、近年発見され、書写塗自体とも目されている書写山円教寺所蔵の近世朱漆器資料のそれときわめて類似したものである。(註7) 今後、資料の充実を待つ必要はあるが、この二つの結果は、近世山陽地方における在系朱漆器資料の特徴を知る上で、何らかの参考となろう。

次に、一般的に18世紀以降その出現が認められる、緑色系漆を地外面に塗布した資料が、本漆器資料では、3例出土している。(No.150, 160-1, 172資料) 江戸市中出土漆器資料の場合、いずれの資料もブナ材を用い、炭粉下地で、地内面には赤色系漆(ベンガラ)、地外面には大変薄手の緑色系漆(石黄+藍系)を一層のみ塗布する特徴がある。(註8) 本漆器資料の場合、緑色系漆自体は、他地の遺跡出土のそれと同様の製作技法をもっている。しかし、用材の選択性では、ブナ材2例、エゴノキ材1例で、地塗り漆も朱漆やうるみ系漆を中塗り、上塗りに用いるなど、その状況は江戸市中出土漆器資料のそれとは大きく異なっている。この点も、近世山陽地方における漆器資料の特徴を知る上で何らかの参考となろう。

いずれにしても、本漆器資料は、それまであまり調査例が報告されていない、まとまった数量の地方城下町関連の近世漆器資料である。これらの製作技法は、総体においては江戸市中出土漆器資料をはじめとする各地のそれと、ほぼ同様の傾向を示している。しかし、細部の検討をしてみると、近世山陽地方の漆器資料の特徴もいくつか見出された。今後は、さらに資料の充実をはかり、その地域性を明らかにしていきたい。

本調査を行うにあたり、兵庫県教育委員会の別府洋二，山下史朗，甲斐昭光氏をはじめとする多くの方々のお世話になりました。謝意を表します。

なお、本調査は、昭和63年文部省科学研究費奨励研究（A）「近世漆器の製作技法に関する研究」 同、平成2年度「出土漆器の保存に関する基礎的研究」および同平成3年度「漆器資料の保管に関する基礎的研究」の成果の一部を含む。

(註1) 「近世以降木地師のロクロ製品製作技法の研究」(1975) 末沢春一郎 京都大学農学部林学科 卒業論文

「ろくろ ものと人間の文化史 31」(1979) 橋本鉄男 法政大学出版局

(註2) 「日本人の生活と文化 ⑤ 暮らしの中の木器」(1982) 須藤 護 日本観光文化研究所編 ぎょうせい

(註3) 「木地師の習俗 民俗資料選集2」(1974) 文化庁 文化財保護部編 国土地理協会

(註4) 「輪島市史 資料編 第6巻」(1973) 輪島市教育委員会 には、幕府の統制物資であった朱の入手の繁雑さに関する記載として、「住吉文庫文書」, 「高森辰己家文書」等の文献史料が掲載されている。これより、当時の状況が理解される。

(註5) 消費地における生活什器としての漆器の販売の状況を知る文献史料の一つとして『名古屋諸色直段集, 寛延四未年小買物諸色直段帳』寛延四年(1751)の以下の記載がある。

「塗物

一, 一匁一分	せしめ漆一匁	
一, 三分七厘	こくその粉一袋	
一, 二匁五分五厘	布着せ蠟色塗	一尺四方一坪
一, 二匁	布なし 同	断一坪
一, 二匁二分	上花	塗一坪
一, 一匁五分	布なし堅地花	塗一坪
一, 七分五厘	常花	塗一坪
一, 二分五厘	上溜	塗一坪
一, 一分七厘	常溜	塗一坪
一, 三分	春慶	塗一坪
一, 二分	常春慶	塗一坪
一, 二分	上かき合	塗一坪
一, 一分五厘	常かき合	塗一坪
一, 八厘	拭	塗一坪
一, 五厘	常拭	塗一坪」

この記載内容から、当時、漆器の髹漆技法の程度別に、明確な価格のランク付けが存在していたことが理解される。

(註6) 「漆器資料の製作技法」(1989) 拙稿 『港区No.19遺跡』 港区西新橋二丁目遺跡調査会
「近世出土漆器に関する一調査方法」(1990) 拙稿 考古学ジャーナルNo.322 ニュー・サイエンス社

(註7) 「中・近世寺社什器としての朱漆器—播州姫路書写山円教寺所蔵什器を例として—」(1989) 拙稿 『信仰と民具』日本民具学会編 雄山閣出版

(註8) 『旧芝離宮庭園』(1988) 旧芝離宮庭園調査団
『芝増上寺寺院群』(1989) 東京都港区教育委員会 ほか

VIIの8.は公開していません

VIII おわりに

前章では、明石城武家屋敷跡出土遺物について詳しく検討したので、最後に調査成果を元に遺構について検討を加えておきたい。

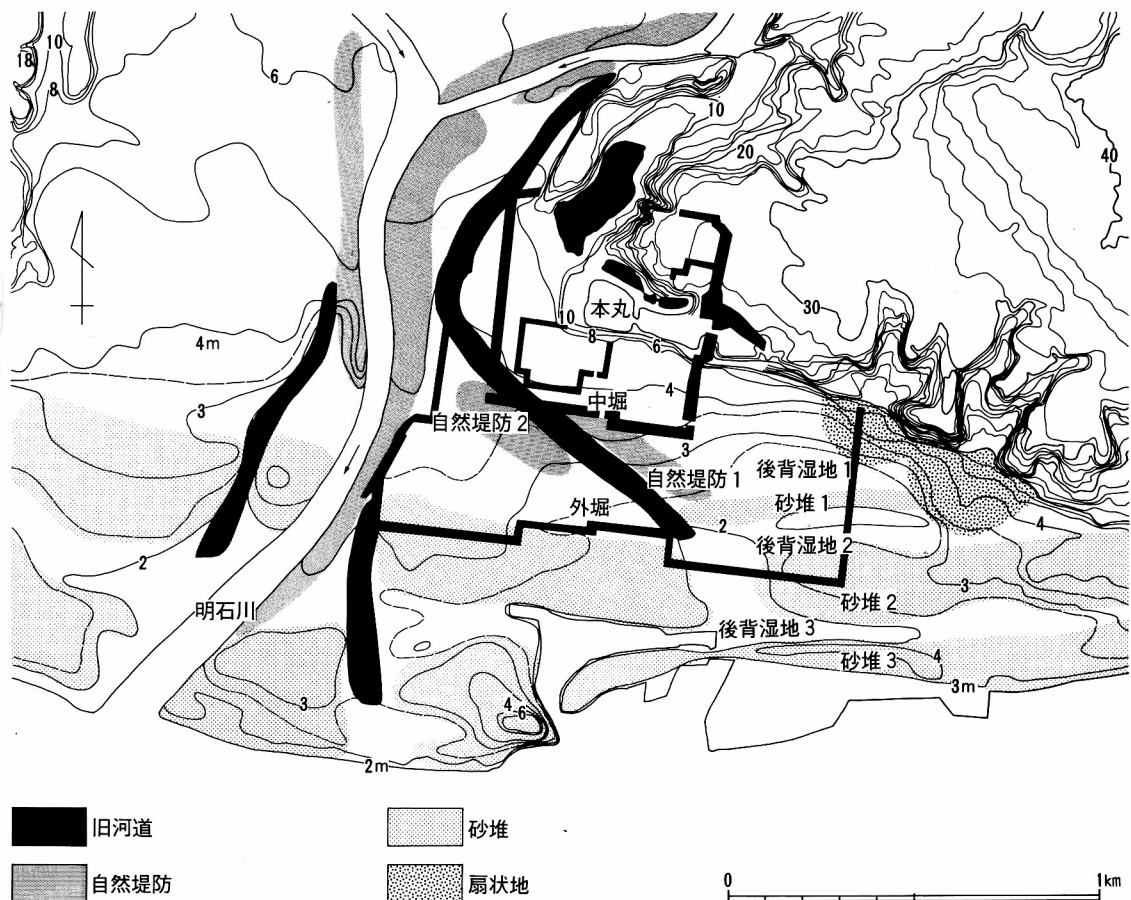
微地形分析と城の構造

遺構の検討を行う前に、まず、発掘調査を通じて明らかとなった地形環境についてふれておくことにする。

発掘調査では、明石城築城以前の地形環境の変遷を知ることが目的に、下層の地層確認のための断ち割り調査を綿密に行った。こうした事実と現地地形観察、地形図の判読とを併せて微地形分析を試みた（高橋1990・前葉1984・1985参照）。

第79図は、明石市発行の1/2,500都市基本図を元に現況観察を行い、地形分類をしたものである。明石城本丸の立地する大阪層群からなる段丘の南端の崖面から海側には、わずかばかりの平地がひろがっている。縄文中期以降の海退に伴い明石川の供給した砂が、明石海峡の早い潮流により堆積し、形成された平地である。

この平地には3列の砂堆が確認できる¹⁾。1列目は最も内列の砂堆で、人丸町から東仲ノ町にかけてのびている。幅、高さともに比較的規模は小さく、明石川右岸では不明瞭で



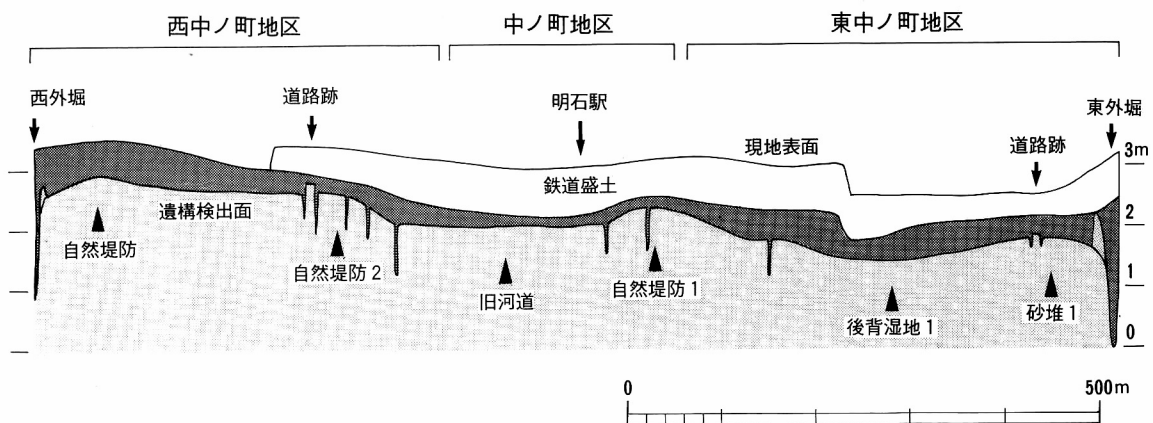
第81図 明石城付近の微地形図

ある。2列目は、大蔵町から本町にかけて、さらに明石川を越えて和坂まで延びる大規模な砂堆である。3列目は、現海岸線に沿って延びるもので、現在も形成中の砂堆である。それぞれの砂堆列は山側に後背湿地を形成しているが、第3列の砂堆は後背湿地が埋め残されて入江となり、江戸時代以降、明石港として利用されている。

一方、明石川が現河道に固定される以前の数本の旧河道が確認できる。このうちの最も東にあるのが旧河道Aで、ちょうど大手通りから現在の明石駅の真下にあたる。こうした河川はその両側に自然堤防を形成しており、ちょうど中ノ町地区の東端あたり、すなわち明石駅東半部が自然堤防に該当している。また、こうした自然堤防の内側は後背湿地となるため、砂堆第1列と自然堤防1との両方にさえぎられた東中ノ町から山下町にかけての一带は、水の出口を失って、完全な後背湿地となってしまったのである。東中ノ町地区の発掘調査の結果からは、調査地付近では、中世までは水田が営まれ、徐々に埋没していった様子うかがえるが、一部には沼地が残っていたのであろう。明石築城後は沼ノ町の名となって残されている。

このことを如実に示す資料に明治16年の「明石町の図」がある²⁾。この図は旧武家屋敷跡地の土地利用区分を図示したもので、明治初期には旧明石城外曲輪の大半が農地となっている様子がよくわかるが、武家屋敷の区画がそのまま地割りとなって残されており、武家屋敷街の復元にも役立つものである。この図が特に注目できるのは水田と島地の利用区分である。第81図にこの利用区分を示してみた。

この図でみると、自然堤防地帯である大手以西では島地が優勢であり、後背湿地地帯である東中ノ町から山下町にかけては水田が主体を占めていることがわかる。ここにこれまでみてきた地形の差、すなわち地面の高低差がそのまま土地利用の差となって現れているのである。明治時代になってもこれほどの差が残されているのは興味深い。上級武士の屋敷は西に、下級武士の屋敷は東に位置するのには、このような立地上の良否という理由があったのである。



第82図 明石城武家屋敷跡東西断面図



第83図 明治16年頃の土地利用

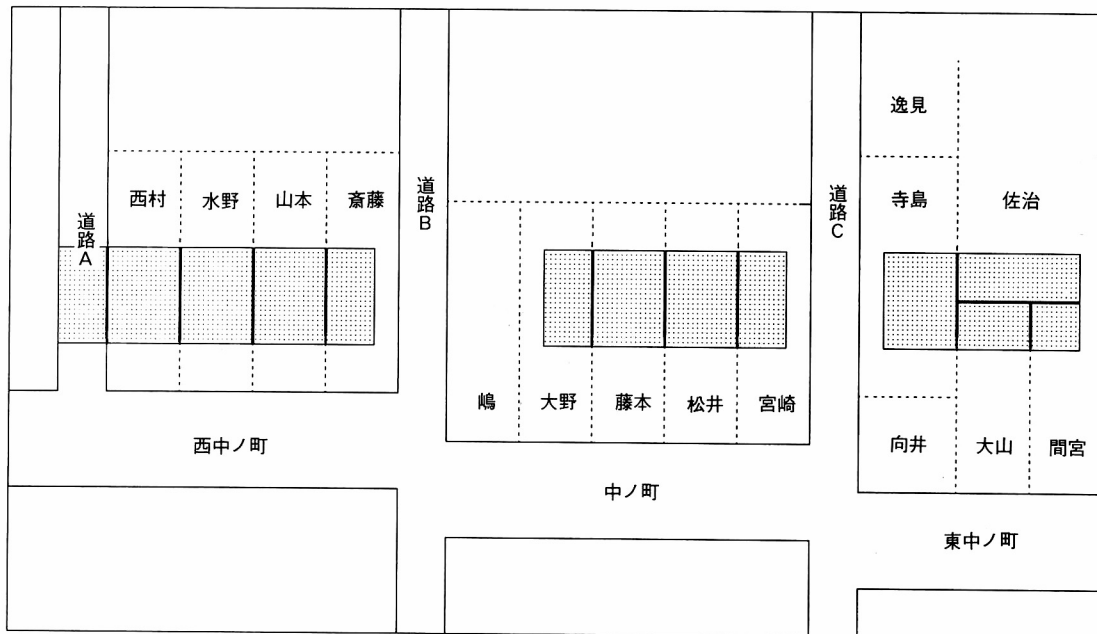
武家屋敷の区画について

発掘調査の結果、武家屋敷の区画は、当初は基本的には素掘り溝によってなされているということが明らかとなった。溝の幅は1~2m、深さは30cm~100cm程度で、底がU字形を成すことが多いが、単に屋敷の区画だけを目的とした溝としては規模が大きすぎるものが指摘できる。これらのことは、明石城の立地に起因するものであるといえる。先に触れたように明石の土地は全般に低湿で、城下町の立地条件としては不適合であったのである³⁾。この地を屋敷地とするには、排水を充分に行わなければとても居住できる状態ではなかったのである。

すなわち、明石城の武家屋敷街を区画する溝は、単に武家屋敷境界部の区画の役割を持つと同時に、廃水路網としての機能を有していたといえよう。これらの事実から、明石城がいかに軍事目的を重視して築かれたかがあらためて理解される。

ところで、これらの溝は江戸後半期には規模を縮小するものが多い。たとえば、SD 2 0 0 1、SD 2 5 0 3などは規模を縮小しているし、SD 3 2 0 2やSD 3 5 0 1は完全に埋まってしまっている。この変化は何に起因するのだろうか。

一つの可能性としては、自然環境変化が指摘できる。つまり、相対的な地下水位の低下により、排水の必要性が薄れたということである。二つ目は、人工的な治水により、溝の役割が相対的に低下したということが考えられよう。現段階では結論を得ることができな



第84図 調査地周辺の屋敷割概念図

いが、この変化が意味するところの大きさが感じられよう。

なお、これらの発掘調査成果と、先の「明石町の図」とを用いて武家屋敷街の区画を復元したものが第83図である。

井戸と水道

今回の発掘調査では、合計3箇所の井戸跡が検出されたが、すべてが上総掘りと称せられる桶積み井戸であった。構造は、素掘りの穴に底を抜いた桶を5ないしは6段に積み重ねて埋め、井側としているものである。この深さは、地表下6m前後にある沖積層の基底部の深さと一致しており、水脈の深さを示すものである。

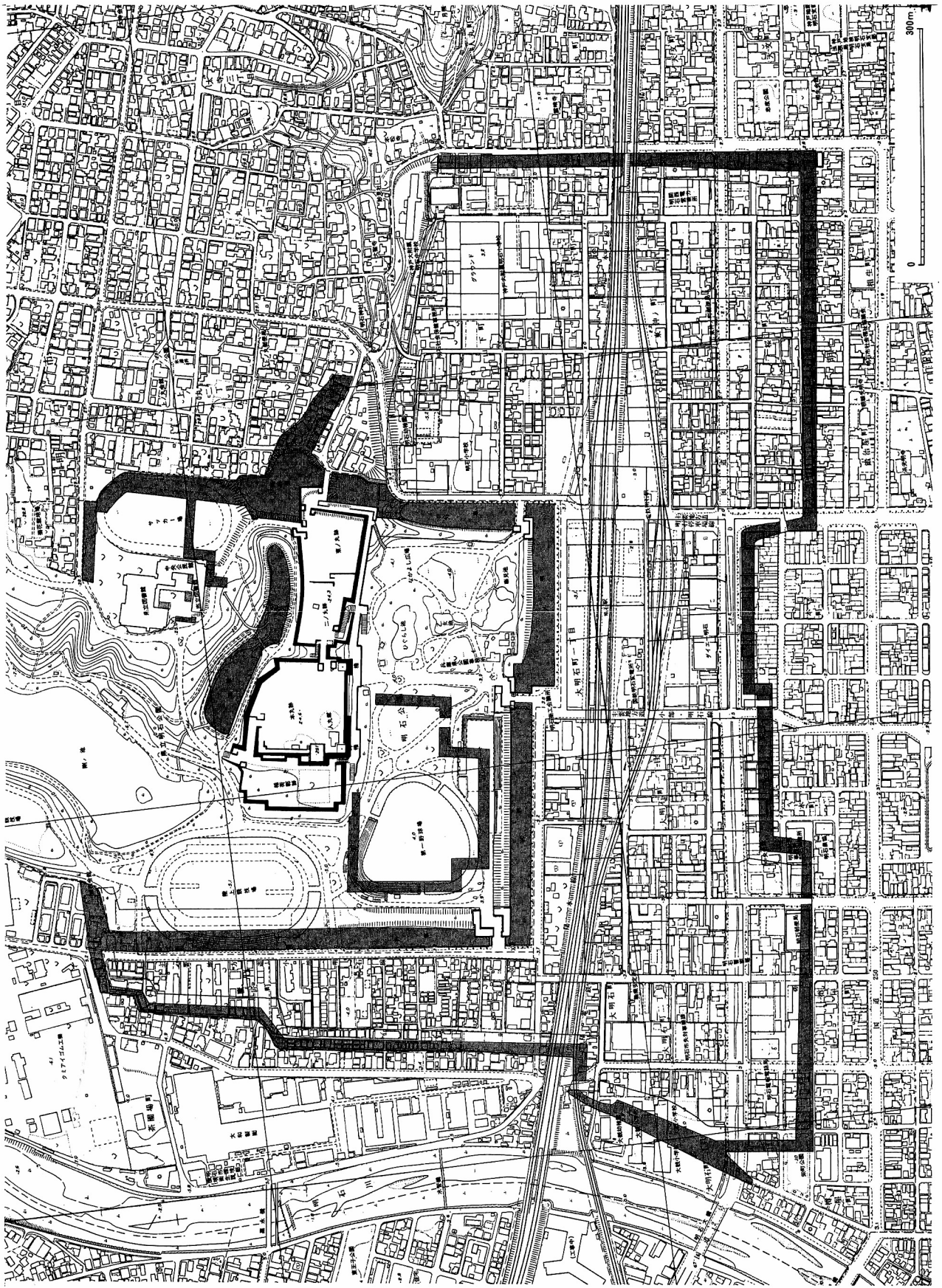
この井戸は、通常、低湿地に築かれることが多く、兵庫県下の他遺跡の例では、沖積地に立地している姫路城武家屋敷跡⁴⁾では石積み、段丘上に立地する伊丹郷町屋例⁵⁾では、素掘り井戸の開口部にのみ石や瓦積みを持つなど、それぞれに特徴を有している。

このことは、明石が石材に乏しい場所であると同時に、この種の井戸は比較的簡易に造れるというメリットがあるのだろう。

上水道について

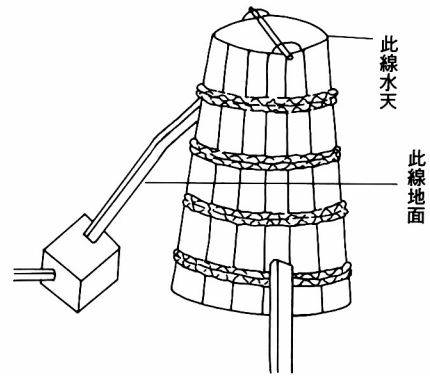
明石ではこれまでに近代水道以前には水道の存在が知られていなかったのだが、すでに江戸時代後半期には水道が敷設されていたという新事実が明らかとなった。

水道の構造は、竹管の節を抜き水道管としたもので、繋ぎ目には、角材ないしは丸木を円筒形に切ったもの（枕と称する）の中央に穴を開け、竹筒を差し込んで結合している。結合部から水が漏れないように、竹筒の回りには豊皮もしくはシュロ縄を巻いて隙間が埋



第85图 明石城武家屋敷敷地復原图(未完)

めてある。また、特徴的なのは、水道の汲み上げ場所である枡には桶を利用してあるが、水道管は半地下式の桶の底近くに結合し、桶上部から下に落とした構造を取っていることである。この構造は、「彦根城水道絵図」に見える「上げ枡」の構造に他ならず（第84図参照）、この種の構造の遺構の出土資料としては、初めてのものであった⁶⁾。



第86図 上げ枡(文化元年彦根城水道絵図)

この水道遺構は、東中ノ町地区の他、中ノ町地区でも枕が出土している他、明石市教育委員会の発掘調査で山下町地区（新駐車場）でも同様遺構が検出されている。ただ、後者は、井戸を水源としていた可能性が指摘されているが⁷⁾、武家屋敷地で最も地盤の低い旧沼ノ町地区の井戸から水道への揚水が可能なほどの水圧が得られたとは考え難く、水源は別にあったものと考えたい。おそらくは、段丘下面の湧き水などが利用されたのではないだろうか。

また、これらの水道の敷設理由は、比較的上級武士の居住する西中ノ町地区で水道が発見されていないことから考えると、東中ノ町地区一帯が低湿で、良質な地下水が得にくかったことが原因ではなかろうか。または、この地域の地下水脈が途絶えた可能性も考えられよう。この場合、先に指摘した屋敷境溝の縮小と期を一にしており、環境変化があらためて問題となるだろう。この結論は、今後の調査の結果を待ちたい。

廃城後の土地利用

明治17年（1884年）に現在の山陽本線の全身である山陽鉄道（兵庫～姫路間）が開通している。この鉄道は、当時まだ一部に武家屋敷の残る明石の町を家並みの間を縫って通されている。発掘調査の結果では、この鉄道敷設の際に、地盤の軟弱な東中ノ町地区では粘土層を敷いて地盤強化を図っていることがわかっている。この鉄道の敷設された道筋をみると、通りに面して宅地があることから、屋敷地の背中合わせになった裏庭を縫って通されていることがよくわかる。このことは近代における鉄道敷設に共通することである。

一方、現在の国道2号線は、同じく武家屋敷地の真ん中を横断しているが、この道路は元々あった道路と堀跡を繋いで直線的に通されている。一部には屋敷の立ち退きもあったようである。

これらのことから、鉄道は武家屋敷の裏庭を縫って走り、道路は既存の道を広げて通るという事実が指摘できる。現在の明石駅前が、なにか正面感に乏しいのはこうしたことに起因しているのである。

また、外堀跡をみると、堀の埋め立てが早い東部の柳町では、埋め立て地が民有地となっているが、埋め立ての遅かった西部では外堀跡は公共用地となっており、旧明石市役所、旧明石警察署、明石郵便局、県明石財務事務所などが集中していることがわかる。こうした事実にも、城跡という遺跡が現在の街や社会を強く規定しているものであることがわかるだろう。

おわりに

今回の一連の発掘調査で、明石城の外曲輪に初めてメスが入れたわけである。そこから得られた新知見は武家屋敷跡の生々しい実際を見せてくれたが、現在の町並のすぐ下に明石城武家屋敷跡の遺構が予想以上に良好な状態で残されていたことは、大変な驚きであった。

現在、明石市教育委員会の手で武家屋敷街の発掘調査が進められており、さらに遺跡の実体を知る手掛かりが得られることだろう。今後は、今回の調査では明らかにできなかった武家屋敷内の空間構造や、年代的な変遷についての解明が期待される場所である。

注

- 1) 高橋学氏の御教示による。
- 2) 明石市教育委員会山下俊郎氏の御好意により実見。
- 3) 高橋学氏の御教示によれば、明石城下町は、高松と並んで全国でも最も低湿な場所に立地しているという。
- 4) 『特別史跡姫路城跡』兵庫県立歴史博物館 1985
- 5) 兵庫県教育委員会が昭和62年に発掘調査
- 6) 神戸大学工学部 神吉和夫氏の御教示による。以後、大阪市住友銅吹所遺跡でも同様の遺構が見つかっている。
- 7) 大谷英夫『明石水道60年史』明石市水道部 1990

参考文献

- 高橋学 1990 「播磨沿岸平野の地形環境と土地開発」『今里幾次先生古稀記念播磨考古学論叢』
- 前葉和子 1984 a 「明石川流域の地形環境」『玉津田中遺跡調査概要 I』兵庫県教育委員会
- 1985 b 「6000年前の明石平野」『神戸の歴史』神戸市史編纂委員会
- 神吉和夫・三和啓司 1986 「彦根藩における水道について－彦根と長浜－」『第6回日本土木史研究発表論文集』
- 神吉和夫 1983 「近江八幡水道の研究」『建築工学研究所報告』25

付 表

1. 「種別」欄の上段は器種、下段は通称名および陶磁器の機能を表す名称を記入した。ただし下段に（ ）付の場合は器種名を記入し、上段に部位名を記入した。
2. 「口径」項目のなかで、（ ）を付した数字は復元値である。
3. 「成形・調整技法の特徴、文様」欄の「釉」小項目は、釉色を主として記入した。釉色の表記は、(財)日本色彩研究所監修の「新版標準土色帖」によったが、該当する色が同書にない場合は、筆者の判断で色名を表記した。
4. 「備考」欄記載のうち、肥前陶磁器についての記載は、大橋康二氏（佐賀県立九州陶磁文化館）によるものである。ただし、校正段階での編集上の過ちについては、編集者がその責を負う。

土器類

東中ノ町地区

SD2002

図面	番号	種別	器種	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴、文様	備考
1	1	青磁	鉢	—	—	高台端部露胎 内面：底部 片彫(?)	肥前(波佐見) 17世紀前半
	2	青磁	瓶	(9.0)	—	内面露胎 外面：左上から右下方向の貫入 肩部：桃実と葉の飾り	肥前 17世紀末～18世紀
	3	青磁染付	碗	8.4	4.7	高台端部露胎 外面：口縁端部鉄錆 内面：底部 龍文印文(龍)→呉須塗布	瀬戸・美濃系 幕末
	4	青磁染付	碗	(8.3)	4.3	高台端部露胎 外面：口縁端部鉄錆 内面：底部 龍文印文(龍)→呉須塗布	瀬戸・美濃系? 幕末
	5	染付	碗	6.0	2.1	高台端部露胎 外面：体部 笹	肥前 18世紀
	6	染付	碗	5.9	2.3	高台端部露胎(砂熔着) 外面：体部 笹 内面：紅付着	肥前 18世紀
	7	染付	碗	6.8	2.4	高台端部露胎 外面：体部 笹	肥前 18世紀
	8	染付	碗	(6.6)	2.6	高台端部露胎 外面：口縁部 雨降り	肥前 18世紀前半
	9	白磁	碗	6.8	2.8	高台端部露胎(砂熔着)	肥前 18世紀
	10	染付	碗	7.6	3.4	高台端部露胎 外面：体部 草・菊花(印判) 内面：黒色物(紅?)付着	肥前(有田)
	11	染付	蓋 (碗)	9.4	2.6	つまみ部端部露胎 外面：体部 花唐草、つまみ内「？」 内面：口縁 ?、中央部「寿」	肥前系 幕末

SD2002

図面	番 号	種 別	器 種	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴、文様	備 考
1	12	染 付	椀	(9.0)	4.9	高台端部露胎(砂熔着) 外面:体部 二重網目、高台内 渦「福」 内面:体部 一重網目、底部 菊花	肥前 18世紀前半~中葉
	13	染 付	椀	(9.5)	5.4	高台端部露胎 外面:体部 二重網目、高台内 二重角椀渦「福」 内面:体部 一重網目、底部 菊花	肥前 18世紀前半~中葉
	14	染 付	椀	9.8	5.3	高台端部露胎(砂熔着) 外面:体部 井桁・菊(印判)	肥前 18世紀前半~中葉
	15	染 付	椀	10.0	5.1	高台端部露胎 外面:体部 椿・竹	肥前 18世紀前半~中葉
	16	染 付	椀	9.8	5.3	高台端部露胎 外面:体部 雪輪・梅 高台内「太明年製」	肥前(波佐見系) 18世紀中葉~末
	17	染 付	椀	9.6	5.5	高台端部露胎 外面 体部 松・草、高台内 「太明年製」	肥前 18世紀
	18	染 付	椀	(10.2)	6.3	高台端部露胎 外面:体部 芥子・蓮弁	肥前 18世紀中葉~末 蓋付か?
	19	染 付	椀	10.2	5.5	高台端部露胎 外面:体部 菊(印判)・草花、 高台内「太明年製」	肥前 18世紀前半
	20	染 付	椀	10.0	4.9	高台端部露胎 外面:体部 松(印判)	肥前 18世紀前半~中葉
	21	染 付	椀	10.4	5.0	高台端部露胎 二重外面:体部 垂柳桜・松、高 台内角椀渦「福」	肥前 18世紀前半~中葉
	22	陶胎染付	椀	11.2	7.5	高台端部露胎(砂熔着) 外面:体部 松・竹・梅	肥前 18世紀前半~中葉 施釉部分に貫入
	23	陶胎染付	椀	(11.4)	7.0	高台端部露胎(砂熔着) 外面:体部 山水	肥前 18世紀前半~中葉

SD2002

図面	番号	種別	器種	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴、文様	備考
1	24	染付	椀	(10.5)	6.9	高台端部露胎 外面：体部 山水	肥前 18世紀前半～中葉
	25	染付	鉢			高台端部露胎 外面：体部 ?、高台内 鉛ガラス描き(傘九)	肥前 19世紀初頭～幕末 焼継されたものか?
2	26	染付	猪口			蛇ノ目凹形高台(露胎) 外面：体部 梅 内面：底部 五弁花	肥前 18世紀後半
	27	染付	椀			高台端部露胎 外面：草花・橋、高台内「太明年製」 内面：底部 五弁花(印判)	肥前 18世紀前半～中葉
	28	染付	椀	14.6	6.9	高台端部露胎 外面：体部 亀甲・牡丹・蝶 内面：口縁 花菱、底部 松竹梅 繋ぎ	肥前系 19世紀～幕末
	29	色絵磁器	鉢	(20.4)	10.5	高台端部露胎 外面：体部 龍唐草・雲(赤絵)、 高台内 「…製」 内面：口縁部 赤絵(梅)、 底部 染付(龍)、赤絵(蓮弁)	肥前系(有田赤絵町より 類似品出土) 18世紀
	30	染付	鉢	15.0	5.3	蛇ノ目凹形高台(露胎) 外面：体部 雷・草花 内面：体部 柘榴繋ぎ、底部 山水	肥前系 19世紀～幕末
	31	染付	蓋付鉢	15.3	8.7	口縁端部・高台端部露胎 外面：体部 鶴・椿	肥前 19世紀～幕末
3	32	染付	皿	(7.4)	2.5	型打ち成形 輪花、蛇ノ目高台、 高台端部露胎 内面：底部 寿	肥前 1630～40年代
	33	白磁	皿			体部下位～高台部露胎、内面底部 蛇ノ目状釉ハギ	肥前(波佐見系) 18世紀
	34	白磁	皿			体部下位～高台部露胎、底部蛇ノ 目状に釉ハギ	肥前(波佐見) 18世紀
	35	染付	皿	(13.0)	3.6	高台端部露胎 外面：体部 唐草、高台内「太明年製」 内面：体部 扇・唐草、底部 五 弁花(印判)	肥前 18世紀前半～中葉
	36	染付	皿	13.0	3.6	高台端部露胎(砂熔着) 外面：体部・唐草、高台内 「太明年製」 内面：体部 扇・唐草、底部 五 弁花(印判)	肥前 18世紀前半～中葉 焼成時に釉面赤化

SD2002

図面	番号	種別	器種	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴、文様	備考
3	37	染付	皿	15.4	4.2	輪花、高台内ハリ跡、高台端部露胎、外面：体部 鋸齒、高台内？ 内面：体部 梅・竹、底部 松	肥前（有田） 1670~90年代 型打ち成形
	38	色絵	皿	(12.2)	2.4	高台端部露胎 内面：底部 人物・竹垣・菖蒲 (赤絵)	肥前系 明治
	39	染付	瓶 油壺	—	—	高台端部露胎 外面：体部 唐草	肥前 17世紀末~18世紀中葉
	40	色絵	瓶	—	—	高台端部露胎（3箇所砂熔着） 外面：体部 赤絵（不明）	肥前 19世紀~幕末
	41	染付	徳利	—	—	内面体部下半露胎 外面：体部 椿？・蓮弁	不明 19世紀
4	42	施釉陶器	椀	—	—	高台部回転ヘラケズリ痕顕著、高台内露胎 釉：5Y8/1	肥前 1600~1630年代
	43	施釉陶器	椀	—	—	体部下半~高台部 回転ヘラケズリ痕顕著、高台内露胎 釉：2.5GY7/1	肥前（嬉野町内野山窯） 1620~1630年代
	44	施釉陶器	椀	—	—	体部下半~高台内露胎 高台内「雲」刻印 釉：透明釉	肥前系 17世紀後半 京焼風
	45	施釉陶器	椀	—	—	高台端部露胎 釉：透明釉（全面に貫入）	肥前系 17世紀後半~18世紀初頭 呉器手
	46	施釉陶器	椀	(9.6)	7.7	外面体部 櫛描き条線（回転）、高台端部露胎 釉：5YR4/6	肥前系 18世紀
	47	施釉陶器	椀	—	—	高台部露胎 釉：10Y8/1	京焼系 18世紀
	48	施釉陶器	深皿	(12.8)	5.0	高台部露胎 高台内「木下弥」刻印 内面：底部 山水 釉：透明釉	肥前系 17世紀後半 京焼風
	49	施釉陶器	椀	9.8	5.1	高台部露胎 外面：体部 鉄絵（草花） 釉：透明釉	京焼系 18世紀
	50	施釉陶器	椀	9.2	5.9	高台部露胎 外面：体部 緑・紺上絵（笹） 内面：体部 緑・紺上絵（不明） 釉：透明釉 10Y7/2	京焼系 18世紀

SD2002

図面	番号	種別	器種	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴、文様	備考
4	51	施釉陶器	椀	9.2	6.4	高台端部露胎 外面 体部 波状刷毛目 釉：透明釉	肥前 18世紀前半～中葉
	52	施釉陶器	椀	(11.0)	5.1	高台部露胎、内面底部足付ハマ痕 (2箇所以上) 外面：体部 緑・上絵（松） 釉：透明釉	京焼系 18世紀
	53	施釉陶器	椀	(11.0)	6.3	高台部露胎、内面底部足付ハマ痕 (3箇所) 外面：体部 鉄絵（不明） 釉：透明釉	京焼系 18世紀
	54	施釉陶器	椀	9.1	5.4	高台部露胎 釉：透明釉・緑釉（口縁部）	京焼系 18世紀末～19世紀前半
	55	施釉陶器	香炉	(10.0)	7.0	高台部回転ヘラケズリ痕顕著、高 台内・内面体部～底部露胎 外面：体部 刷毛目 釉：透明釉	肥前 18世紀前半～中葉
	56	施釉陶器	蓋物	(8.8)	5.4	張り付け高台、口縁部・外面体部 下半～高台内露胎 内面底部目跡 (3箇所) 釉：2.5GY8/1	
	57	施釉陶器	鉢	(6.8)	3.6	体部下半～底部回転ヘラケズリ、 外面体部下半～底部露胎 釉：10YR4/4	不明
	58	施釉陶器	不明	—	—	型造り、底部穿孔、高台内・内面 露胎、高台内墨書「ヨチ」 外面：体部 印刻（蓮弁） 釉：緑釉	
	59	施釉陶器	鉢	(13.2)	8.2	外面体部下半 蓮弁様のヘラケズ リ体部下位～底部露胎 釉：2.5Y7/6	
	60	施釉陶器	皿	(11.9)	2.7	輪花、高台内目跡、高台端部露胎 釉：5Y8/2	瀬戸・美濃
	61	施釉陶器	皿	—	—	高台部回転ヘラケズリ痕顕著、体 部下位～底部露胎、内面底部目跡 (砂目2箇所以上) 釉：透明釉	肥前 1600～30年代
	62	施釉陶器	皿	(21.4)	6.0	内面底部蛇ノ目状に釉ハギ（鉄泥 漿塗布）、高台部露胎、高台内墨 書「？」 内面：体部 波状刷毛目（4本1単 位）	肥前 17世紀後半～18世紀前半

SD2002

図面	番号	種別	器種	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴、文様	備考
5	63	施釉陶器	鉢	(29.8)	8.9	体部下半～高台部回転ヘラケズリ 痕顕著、内面底部輪状砂敷 外面体部下半～高台内露胎 外面：体部 波状刷毛目	肥前 18世紀
	64	施釉陶器	蓋	5.4	1.4	内面口縁部露胎 釉：2.5GY8/1	
	65	施釉陶器	蓋	5.8	3.0	内面口縁部露胎 外面：体部 呉須絵(?)	在地系 19世紀
	66	施釉陶器	蓋	8.2	3.2	内面口縁部露胎 外面：体部 鉄絵(?) 釉：10YR6/4	在地系
	67	無釉陶器	蓋	6.6	1.8	底部回転糸切り、体部内外面回転 ナデ	在地系
	68	施釉陶器	灯明具 油差	(5.0)	4.3	口縁端部・体部下位～高台内露胎 外面体部回転ヘラケズリ	
	69	土師質 (施釉)	皿	8.0	1.5	外面底部回転糸切り、内外面回転 ナデ、内面～外面口縁端部施釉 釉：5YR5/8	C1類
	70	土師質 (施釉)	皿	(6.2)	4.0	外面底部回転糸切り、内外面回転 ナデ、内面～外面口縁端部施釉 釉：5YR8/4	C1類
	71	施釉陶器	ひょう そく 灯明具	8.7	1.5	外面底部回転ヘラケズリ、外面底 部・口縁端部・内面脚部露胎 釉：5Y8/2	C1類
	72	施釉陶器	ひょう そく 灯明具	6.8	4.8	外面底部回転ヘラケズリ、外面底 部・口縁端部・内面脚部露胎 釉：5Y6/2	C1類
	73	土師質 (施釉)	皿 灯明具	5.4	5.2	外面底部回転糸切り、内外面回転 ナデ、内面皿部施釉 釉：5YR6/8	E1類
	74	土師質 (施釉)	皿 灯明具	6.0	5.3	外面底部回転糸切り、内外面回転 ナデ、内面皿部施釉 釉：7.5YR7/8	E2類
	75	土師質 (施釉)	皿 灯明具	(6.8)	5.7	外面底部回転糸切り、内外面回転 ナデ、内面皿部施釉 釉：5YR6/6	E1類
	76	土師質	皿 灯明具	6.4	6.0	外面底部回転糸切り、内外面回転 ナデ、内面皿部施釉 釉：5YR6/8	E2類

SD2002

図面	番号	種別	器種	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴、文様	備考
6	77	施釉陶器	蓋 (行平鍋)	(13.3)	3.2	つまみ部内露胎 外面：体部 トビガンナ・鉄泥漿 ・白泥漿（不明）、かえり部 白 泥漿 内面：10YR7/4	在地系 18世紀後半～19世紀
	78	施釉陶器	蓋 (行平鍋)	17.4	4.0	つまみ部内・体部中位・かえり部 露胎 外面：つまみ部脇・縁部 鉄泥 体部中位 トビガンナ、体部 白 泥漿（松） 内面：白泥漿	在地系 18世紀後半～19世紀
	79	施釉陶 器	蓋 (行平鍋)	(19.1)	4.1	つまみ端・かえり部露胎 外面：鉄釉・白泥漿（梅） 釉：5Y6/3	在地系 18世紀後半～19世紀
	80	施釉陶器	鍋	(14.6)	7.7	外面体部下半～底部回転ヘラケズ リ、内面口縁端部・外面体部下 半露胎 釉：7.5YR4/6	18世紀後半～19世紀 足3個張り付け
	81	施釉陶器	行平鍋	(20.0)	10.1	外面体部下半～底部回転ヘラケズ リ外面体部下半～底部・内面口縁 部露胎 外面：把手部 印文（樹下仙人） 釉：5Y6/3	在地系 18世紀後半～19世紀
	82	無釉陶器	壺	(6.1)	8.2	口縁部片口、内外面回転ナデ調整 内面体部露胎 釉：5YR4/4	丹波系
	83	土師質	風炉	21.9	18.8	底部3足（穿孔）、口縁部 窓（3 方） 外面体部回転ヘラケズリ 外面：赤色顔料塗布	
7	84	無釉陶器	蓋	4.2	1.0	内面回転ヘラケズリ	
	85	無釉陶器	椀	6.3	3.2	内外面回転ナデ	
	86	無釉陶器	甕	(19.2)		外面体部上半櫛描き条線	丹波系
	87	無釉陶器	鉢	23.2	13.9	内外面回転ナデ、内面底部中央ユ ビオサエによる凹み	

SD2002

図面	番号	種別	器種	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴、文様	備考
8	88	無釉陶器	鉢	(24.1)	9.0	内面・外面口縁部・口縁部直下回転ナデ、外面体部回転ヘラケズリ 底部砂付着 内面：体・底部 櫛描き条線（9本1単位）	
	89	無釉陶器	鉢	33.3	13.8	内外面回転ナデ、底部擬高台様、内外面鉄泥漿塗布、口縁端部剥落（重焼の痕跡） 内面：体・底部 櫛描き条線（7本1単位）	
	90	施釉陶器	鉢	32.0	13.1	口縁端部沈線（2条）、片口、外面底部露胎、内面底部輪状に砂敷・目跡（8箇所） 内面：体・底部 櫛描き条線（9～10本1単位） 釉 10YR3/2	丹波焼
9	91	瓦質	不明	10.4	—	内面底部穿孔、内外面ナデ、	
	92	瓦質	風炉	—	—	外面ヘラ描き（花・直線）	
	93	土師質	蓋 (焼塩壺)	7.6	2.2	胎土に雲母含有 外面：回転ナデ 内面：布目	
	94	土師質	皿	10.4	1.9	底部回転糸切り 内外面：回転ナデ	B7類
	95	土師質	皿 灯明具	10.1	1.8	底部回転糸切り 内外面：回転ナデ 口縁部スス付着	B7類
	96	土師質	皿	10.6	1.7	底部回転糸切り 内外面：回転ナデ	B5類
	97	土師質	皿	(10.4)	1.9	底部回転糸切り 内外面：回転ナデ	B6類
	98	土師質	皿	(9.5)	2.2	底部回転糸切り 内外面：回転ナデ	B1類
	99	土師質	皿 灯明具	10.0	1.6	底部回転糸切り 外面：口縁部ヨコナデ、体部ユビオサエ 内面：口縁部ヨコナデ、底部ナデ 口縁部スス付着	A3類

SD2002

図面	番号	種別	器種	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴、文様	備考
9	100	土師質	鍋焙烙	(32.6)	—	外面：口縁部ヨコナデ、体部上位面取り様のナデ 内面：口縁部ヨコナデ 外面スス付着	B3類
	101	土師質	炉	(31.0)	29.5	底部3足 外面：回転ナデ 内外面スス付着	

SD3001

図面	番号	種別	器種	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴、文様	備考
10	102	陶胎染付	椀	—	—	高台端部露胎（赤化） 外面：？	肥前 18世紀
	103	染付	皿	7.1	1.1	糸切り細工、高台端部露胎 外面：体部 虫 内面：底部 花	肥前 17世紀後半
	104	染付	皿	—	—	高台端部露胎（砂熔着） 外面：体部・雲、高台内 角枠「卍」 内面：底部 龍	肥前 18世紀

SD2012

図面	番号	種別	器種	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴、文様	備考
10	105	染付	小杯	5.9	2.0	高台端部露胎 外面：体部 笹	肥前 18世紀
	106	染付	蓋（椀）	10.0	3.1	つまみ端部露胎 外面：つまみ脇部 蓮弁、体部 寿 内面：口縁部 花菱、中央部 寿	肥前（嬉野町吉田窯か） 18世紀後半
	107	色絵	椀	5.6	—	内面：体部 赤絵（酒杯他）	肥前 18世紀中葉～末
	108	染付	椀	(9.8)	5.3	高台端部露胎（砂熔着） 外面：体部 二重網目	肥前系 18世紀後半
	109	染付	椀	9.6	5.5	高台端部露胎 外面：体部 若松 内面：底部 「太明年製？」	肥前 1690～1740年代
	110	陶胎染付	火入れ	(9.6)	—	内面体部下半～底部露胎 外面：体部 ？	肥前 18世紀

SD2012

図面	番号	種別	器種	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴、文様	備考
10	111	染付	蓋 (広東形碗)	10.3	1.7	つまみ端部露胎 外面：つまみ部 蝙蝠、体部 柳 内面：中央部 鷺	肥前 1780年代～19世紀前半
	112	土師質 (施釉)	皿	(13.0)	1.5	底部回転糸切り、外面体部～底部露胎 内面・外面：口縁部回転ナデ、体部下半 ナデ 釉：7.5YR8/3	C3類
	113	施釉陶器	猪口	(10.0)	7.1	全面施釉 内外面：刷毛目	肥前 17世紀末～18世紀中葉
	114	施釉陶器	火入れ	(12.1)	6.9	内面・外面体部下半露胎、蛇ノ目様高台 内外面：体部 回転ナデ 釉：7.5YR3/1 高台内墨書(?)	在地系
	115	施釉陶器	碗	—	—	体部下位・高台端部露胎 外面：体部 ? 釉：5Y8/3 高台内刻印「清水」	肥前か 17世紀後半 京焼風
	116	施釉陶器	瓶	4.6	9.2	内面・外面体部下半露胎 釉：5YR1.7/1	肥前系 18世紀
	117	無釉陶器	急須	8.0	6.9	把手張り付け 内外面：回転ナデ 釉：2.5YR5/6	在地系 19世紀

SD3002

図面	番号	種別	器種	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴、文様	備考
11	118	白磁	碗	—	—	釉：5Y8/2	中国製 白磁碗Ⅳ類
	119	青磁	碗	—	—	高台内露胎 釉：10Y6/2	中国製(明代) 14世紀後半～15世紀 龍泉窯
	120	染付	皿	—	—	高台端部露胎 内面：底部 菊花	肥前 1630～40年代
	121	染付	碗	—	—	高台端部露胎 外面：体部 網目	肥前 17世紀中葉
	122	施釉陶器	碗	—	—	削り出し高台、高台部露胎 釉：7.5Y8/1	
	123	染付	瓶	—	—	内面・高台端部露胎 外面：体部 ?	肥前

SD3002

図面	番号	種別	器種	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴、文様	備考
11	124	施釉陶器	小杯	6.4	4.1	高台部回転ヘラケズリ痕顕著、高台部露胎 釉：5YR5/1	肥前系の可能性 (福岡まで含めると)
	125	施釉陶器	椀	—	—	高台端部露胎 内外面：打刷毛目	肥前 1690年～18世紀前半
	126	土師質	皿	8.7	1.3	底部回転糸切り 内外面：回転ナデ	B1類
	127	土師質	皿	(9.0)	2.8	底部回転糸切り 内外面：回転ナデ	B1類
	128	土師質	皿	9.0	2.6	底部回転糸切り 内外面：回転ナデ	B2類
	129	土師質	皿	9.0	3.4	底部回転糸切り 内外面：回転ナデ	B2類
	130	土師質	皿	(10.8)	—	内外面：口縁部 ヨコナデ 外面：体部 ユビオサエ	A1類
	131	土師質	鍋	—	—	内外面：ヨコナデ	
	132	土師質	鍋 焙烙	(30.6)	5.9	内外面：口縁部 ヨコナデ 外面：口縁部下位面取り様のナデ 内面：底部 ナデ	B3類

SD4002

図面	番号	種別	器種	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴、文様	備考
11	133	土師質	皿	(11.2)	1.5	内外面：口縁部 ヨコナデ 外面：体部 ユビオサエ	A2類

SD3004

図面	番号	種別	器種	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴、文様	備考
11	134	染付	急須	7.7	4.7	一次焼成不良、把手・注口部張り付け、内面体部・外面体部下位～底部露胎 外面：口縁 雷、体部 菊花	在地系 19世紀

SD2003

図面	番号	種別	器種	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴、文様	備考
11	135	染付	仏飯具	7.0	6.0	脚底部露胎（赤化） 外面：坏部 草木	肥前 18世紀前半～中葉
	136	無釉陶器	皿 灯明具	11.0	1.8	外面：体部 回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ 釉：10R3/4	B1類

SD2001

図面	番号	種別	器種	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴、文様	備考
11	137	染付	碗	(9.6)	7.5	高台端部露胎 外面：体部 草花・区画線・点文 釉にムラあり	肥前（有田） 17世紀前半
	138	染付	蓋 (蓋物)	11.8	4.6	口縁部露胎 外面：体部 蛸唐草	肥前 19世紀～幕末
	139	施釉陶器	灯明具	6.2	1.2	外面体部下～底部露胎 外面：体～底部回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ 口縁部スス付着 釉：7.5YR7/2	C4類
	140	施釉陶器	蓋付鉢	8.8	5.2	外面口縁端部・体部下位～高台部 露胎 釉：7.5GY8/1 内面底部足付ハマ痕（3箇所）	
	141	施釉陶器	猪口	(6.3)	4.5	外面底部露胎（鉄錆） 外面：体部 白泥漿描き「口茂…」	在地系

SD2013

図面	番号	種別	器種	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴、文様	備考
12	142	白磁	紅皿	4.6	1.4	型押し成形、外面体部～高台内露胎	肥前 18世紀～19世紀初頭
	143	染付	小杯	(5.6)	2.3	高台端部露胎 外面：体部 草	肥前 18世紀後半～19世紀前
	144	染付	小杯	(5.5)	2.9	高台端部露胎 外面：体部 羽子板・羽根	肥前系 18世紀後半～19世紀前
	145	染付	小杯	6.5	2.8	高台端部露胎（砂熔着） 外面：体部 ?（印判）	肥前 18世紀前半～中葉
	146	染付	小杯	(7.1)	2.9	高台端部露胎 外面：体部 桐（印判）	肥前 18世紀前半

SD2013

図面	番号	種別	器種	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴、文様	備考
12	147	染付	碗	(7.8)	4.0	高台端部露胎 外面：体部 井桁・十字	肥前 18世紀
	148	染付	碗	10.5	5.1	高台端部露胎（砂熔着）、底部蛇ノ目釉ハギ 外面：体部？	肥前 18世紀
	149	染付	碗	(10.9)	5.8	高台端部露胎 外面：体部 草花、高台脇 蓮弁 内面：口縁 花菱、底部？	肥前 18世紀後半
	150	染付	碗	9.7	—	外面：体部 水仙 内面：底部 五弁花（印判） 焼成不良	肥前 18世紀後半
	151	染付	碗	9.2	5.6	高台端部露胎 外面：体部？ 内面：底部 花	肥前 1780~1810年代
	152	染付	猪口	(7.4)	5.6	高台端部露胎（砂熔着） 外面：体部 蕨？	肥前 18世紀
	153	染付	碗	(7.8)		外面：体部 牡丹・竹	肥前系 1780~1810年代
	154	染付	碗	8.8	5.7	高台端部露胎 外面：体部 牡丹・竹・蝶 内面：底部 花	肥前 1780~1810年代
	155	染付	碗	7.6	6.0	高台端部露胎 外面：体部 花唐草・草、高台脇 折松葉 内面：口縁部 花菱、底部 五弁花（印判）	肥前系 18世紀後半
	156	染付	仏飯具	—	—	底部露胎 外面：杯部 草花	肥前 18世紀
	157	染付	瓶	—	—	高台端部・内面露胎 外面：体部 朝顔、高台脇 蓮弁	肥前 18世紀後半~19世紀初
	158	染付	小杯	6.5	4.0	高台端部露胎 外面：高台部 圈線	
	159	陶胎染付	碗	—	—	高台端部露胎 外面：体部 唐草	肥前 18世紀前半~中葉
	160	染付	皿	12.6	3.6	内面底部蛇ノ目状釉ハギ（赤化）、高台端部露胎（砂熔着） 内面：体部 折枝	肥前 18世紀
161	施釉陶器	碗	(10.6)	7.3	高台端部露胎 釉：透明釉	肥前系 17世紀末~18世紀前半 京焼風・呉器手	

SD2013

図面	番号	種別	器種	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴、文様	備考
12	162	施釉陶器	皿	(12.5)	5.0	外面体部下位～高台部露胎、 高台内 刻印「？」 釉：7.5Y6/3	肥前系 17世紀末～18世紀初頭 京焼風
	163	施釉陶器	椀	9.3	5.6	高台部露胎 外面：体部 鉄絵（草）	関西系 18世紀後半～19世紀前半
	164	施釉陶器	椀	—	—	高台端部露胎、「白木」刻印 釉：外面 5R3/2、内面 10Y7/1	
13	165	施釉陶器	蓋	3.9	1.1	内面・外面口縁部露胎 釉：外面体部 7.5YR4/3	
	166	施釉陶器	蓋	5.7	1.4	内面露胎 内外面：回転ナデ、つまみ部手づくね 釉：5YR5/8	
	167	施釉陶器	蓋	6.2	1.1	内面露胎 内面：回転ヘラケズリ 釉：体部 7.5R4/4	
	168	土師質 (施釉)	皿 灯明具	(6.4)	1.2	底部回転糸切り、外面体部露胎 内外面：回転ナデ 釉：5YR6/8	C4類
	169	土師質 (施釉)	皿 灯明具	6.9	1.5	底部回転糸切り、外面体部露胎 内外面：回転ナデ 釉：5YR6/6 口縁端部スス附着	C1類
	170	土師質 (施釉)	皿 灯明具	(9.6)	1.3	底部回転糸切り、外面体部露胎 内外面：回転ナデ 釉：5YR5/8	D1類
	171	施釉陶器	皿 灯明具	12.8	4.6	外面底部～体部露胎 外面：回転ヘラケズリ 釉：5Y7/2	B1類
	172	施釉陶器	皿 灯明具	11.0	2.5	外面底部～体部露胎 外面：回転ヘラケズリ 釉：5Y7/2	B2類
	173	施釉陶器	瓶	(11.6)	—	外面頸部貼花 釉：8YR3/4	

SD2013

図面	番号	種別	器種	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴、文様	備考
13	174	施釉陶器	甕	(27.4)	30.8	粘土紐巻き上げ、外面鉄泥漿(2.5YR5/3)、内面・外面口縁部施釉 釉：2.5Y5/2	丹波
	175	土師質	風炉	—	—	底部脚張り付け(3足) 内外面：回転ナデ	
	176	土師質	風炉	—	—	底部脚張り付け(3足) 内外面：回転ナデ	
	177	無釉陶器	播鉢	(28.8)	10.4	外面：回転ナデ、底部繊維状圧痕 内面：口縁部 回転ナデ、体部 櫛描き条線(7本1単位)	G3類
	178	土師質	皿	(10.3)	2.2	底部回転糸切り 内外面：回転ナデ	B6類
	179	土師質	皿 灯明具	11.4	—	外面：ユビオサエ 内面：口縁部 回転ナデ 口縁端部スス付着	A2類
	180	土師質	鍋 焙烙	(32.6)	—	外面：口縁部 ヨコナデ、底部へ ラケズリ 内面：口縁部 ヨコナデ	B3類

SD3011

図面	番号	種別	器種	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴、文様	備考
14	181	施釉陶器	椀	(17.0)	—	外面：体部 陰刻(花) 釉：緑 焼継ぎ痕跡	
	182	染付	椀	(15.0)		外面：体部 鶴 内面：口縁部 ?	肥前系 19世紀～幕末
	183	染付	猪口	(6.6)	4.8	高台端部露胎 外面：体部 柴垣	肥前 18世紀前半
	184	施釉陶器	椀	(10.0)	—	釉：透明釉(貫入)	京焼系? 19世紀
	185	施釉陶器	椀	—	—	蛇ノ目高台、高台端部露胎 高台端部口「本山」刻印 外面：印文(花)・堆点(白色) 釉：外面5YR3/3、内面2.5Y7/3	瀬戸・美濃系
	186	施釉陶器	皿	(13.4)	2.8	菊花、高台張り付け、外面体部下 半～底部露胎、内面底部目跡(3 箇所) 釉：10Y8/2	瀬戸・美濃系
	187	施釉陶器	蓋 (土瓶)	(8.8)	—	内面・外面口縁部露胎 内面：回転ナデ 釉：緑	在地系 19世紀

SD3011

図面	番号	種別	器種	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴、文様	備考
14	188	施釉陶器	蓋	12.7	—	口縁部露胎 外面：口縁部 鉄絵（三つ巴） 釉：10Y8/1	在地系
	189	施釉陶器	蓋	—	—	高台部削り出し、内面・高台部露胎 内面：回転ナデ 釉：緑	
	190	土師質	鍋 焙烙	(17.8)	—	外面：口縁部 ヨコナデ、体部へ ラケズリ 内面：口縁部 ヨコナデ	

SD3012

図面	番号	種別	器種	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴、文様	備考
14	191	色絵磁器	皿	(13.0)	2.5	内面底部蛇ノ目状釉掻ハギ(泥漿) 内面：体部 赤絵（窓に斜め格子）、底部 花	肥前 17世紀後半か

SD2005

図面	番号	種別	器種	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴、文様	備考
14	192	土師質	壺	12.8	14.5	脚張り付け（3足）、双耳（穿孔） 内外面：回転ナデ	
	193	土師質	皿	11.0	2.0	底部 回転糸切り 内外面：回転ナデ	B6類

SE2001

図面	番号	種別	器種	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴、文様	備考
15	194	土師質 (施釉)	皿 灯明具	5.2	4.6	底部 回転糸切り 皿部施釉 外面：回転ナデ 釉：柿釉10YR8/4	E2類
	195	陶胎染付	椀	(10.2)	6.9	高台端部露胎 外面：体部 山水	肥前 18世紀

SE3001

図面	番号	種別	器種	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴、文様	備考
15	196	白磁	蓋	(8.4)	—	口縁部露胎	肥前 18世紀~幕末
	197	染付	椀	(9.0)	—	口縁端部 鉄錆 外面：体部 ?	肥前 17世紀後半~18世紀
	198	染付	椀	—	—	高台端部露胎 外面：体部 ?	肥前 18世紀
	199	染付	椀	(10.9)	6.1	高台端部露胎、内面底部目跡(4箇所) 外面：体部 瓢箪・唐子遊戯、高台内「宣明年製」 内面：底部 瓢箪	肥前(有田) 1670~1680年代
	200	土師質 (施釉)	皿	(7.9)	1.5	底部：回転糸切り 内・外面口縁部施釉 内外面：回転ナデ 釉：5YR5/8	C4類
	201	施釉陶器	椀	—	—	内面底部蛇ノ目状釉ハギ、高台端部露胎(砂熔着) 内外面：刷毛目 釉：7.5YR5/2	肥前系 18世紀
	202	施釉陶器	皿	(13.0)	3.5	口縁部輪花、高台端部露胎 外面：体部 回転ヘラケズリ 釉：2.5Y6/4	瀬戸・美濃系
	203	青磁	椀	(12.8)	—	外面：体部 片切彫(蓮弁) 釉：7.5GY6/1	中国製(明代) 15世紀後半~16世紀前
	204	青磁	椀	8.1	4.6	高台端部露胎 釉：7.5GY8/1	肥前 18世紀前半~中葉
	205	染付	小杯	(6.3)	2.5	高台端部露胎 外面：体部 笹	肥前 18世紀
	206	染付	椀	(10.7)	—	外面：口縁 花菱、体部 草花	肥前 18世紀前半~中葉
	207	施釉陶器	鉢	—	—	外面露胎、内面底部砂目、高台端部ダングの痕跡(砂・胎土目積) 外面：体部下位~高台部 回転ヘラケズリ痕顕著 内面：刷毛目 釉：2.5YR5/3	肥前 18世紀
	208	土師質	皿	(11.4)	1.5	底部：回転糸切り→ナデ 内外面：回転ナデ	B3類

SG2002

図面	番号	種別	器種	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴、文様	備考
16	209	陶胎染付	椀	—	—	外面：体部 ？	肥前 17世紀
	210	染付	椀	—	—	高台端部露胎 外面：体部 扇面に鳥	肥前系
	211	染付	椀	—	—	高台端部露胎 外面：体部 仙芝祝寿 内面：底部 仙芝祝寿	19世紀
	212	染付	皿	—	—	高台部回転ヘラケズリ痕顕著、底部蛇ノ目状釉ハギ、高台部露胎 内面：底部 ？	肥前 18世紀
	213	染付	瓶 仏花器	—	—	内面・高台端部露胎 外面：蛸唐草	肥前 19世紀前半～幕末
	214	土師質 (施釉)	皿 灯明具	(6.2)	1.1	内面施釉 底部 回転糸切り 内外面：回転ナデ 釉：7.5YR5/6 口縁端部スス付着	C3類
	215	施釉陶器	皿	(11.5)	3.7	内面底部蛇ノ目状釉ハギ、高台部露胎 内面：体部 銅緑釉流し掛け 釉：透明釉	肥前（内野山窯） 17世紀末～18世紀前半
	216	施釉陶器	皿	—	—	内面底部蛇ノ目状釉ハギ（鉄泥漿塗布）、高台端部露胎 釉：10YR7/3	肥前（内野山窯） 17世紀末～18世紀
	217	無釉陶器	甕	37.8	52.2	粘土紐巻き上げ、体部下位 焼成前穿孔（1孔） 内外面：鉄泥漿塗布（2.5YR2/3） 外面底部 墨書「作？」、漆喰の痕跡	

SG2001

図面	番号	種別	器種	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴、文様	備考
17	218	染付	椀	(11.0)	—	外面：体部 草花	肥前系 17世紀後半～18世紀前
	219	染付	小杯	6.4	4.0	高台端部露胎 外面：体部 鳥・松・山水、高台内「□□造」	在地系？ 19世紀
	220	染付	蓋 (蓋物)	(9.8)	—	口縁部露胎 外面：体部 水裂・花	肥前 18世紀中葉～末

SG2001

図面	番号	種別	器種	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴、文様	備考
17	221	施釉陶器	椀	—	—	内面底部蛇ノ目状釉ハギ、高台端部露胎 釉：2.5Y7/1	肥前 18世紀
	222	染付	皿	—	—	高台部回転ヘラケズリ痕顕著・露胎、内面底部蛇ノ目状釉ハギ、外面：体部 回転ヘラケズリ	肥前 18世紀
	223	白磁	皿	9.5	2.9	高台部回転ヘラケズリ痕顕著・露胎、内面底部蛇ノ目状に釉ハギ、釉：7.5YR8/1（2次の火を受け変色？）	肥前 18世紀
	224	染付(?)	皿	(12.0)	3.3	高台部回転ヘラケズリ痕顕著・露胎、内面底部蛇ノ目状に釉ハギ、外面：体部 回転ヘラケズリ	肥前 18世紀
	225	染付	皿	(12.2)	3.4	高台部回転ヘラケズリ痕顕著・露胎、内面底部蛇ノ目状に釉ハギ、外面：体部 回転ヘラケズリ 内面：？	肥前 18世紀
	226	染付	皿	(12.1)	3.5	高台部回転ヘラケズリ痕顕著・露胎、内面底部蛇ノ目状に釉ハギ、外面：体部 回転ヘラケズリ 内面：？	肥前 18世紀
	227	陶胎染付	椀	10.3	7.1	高台端部露胎（熔着物） 外面：体部 松・鳥 釉：7.5Y/2 内面に墨の痕跡	肥前 18世紀
	228	陶胎染付	椀	—	—	高台端部露胎 外面：体部 草花？ 釉：10GY7/1	肥前系 18世紀
	229	施釉陶器	椀	(8.6)	5.5	高台部露胎（黒化） 釉：透明釉	肥前の可能性あり 18世紀前半
	230	施釉陶器	椀	(10.0)	5.6	高台部露胎 外面：口縁部 鉄絵（松） 釉：透明釉	関西系 18世紀
	231	施釉陶器	椀	—	—	高台端部露胎（砂熔着） 外面：刷毛目 内面：打刷毛目 釉：透明釉	肥前 1690年代～18世紀前半
	232	施釉陶器	鉢	(23.7)	6.8	内面底部蛇ノ目状釉ハギ（砂熔着）、高台部露胎 外面：体～高台部回転ヘラケズリ 釉：透明釉	肥前 18世紀

SG2001

図面	番号	種別	器種	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴、文様	備考
18	233	施釉陶器	鉢 火鉢	(35.8)	20.3	外面底部露胎 外面：体部 貼り付け文様 花? ・波状 内面：底部中央 凹み 釉：5YR2/4・N2/ 底部に墨書「?」	
	234	土師質	壺 (火消し 壺)	—	—	底部：回転糸切り 内外面：回転ナデ 内面スス付着	
	235	無釉陶器	蓋	8.4		外面：回転ナデ、鉄絵(?) 内面：回転ヘラケズリ	在地系
	236	土師質	皿	(8.8)	1.4	外面：体部 ユビオサエ 内面：口縁部 ヨコナデ	A3類
	237	土師質	皿	(8.9)	1.4	底部：回転糸切り 内外面：回転ナデ	B4類
	238	土師質	皿	(11.0)	1.5	底部：回転糸切り 内外面：回転ナデ	B6類
	239	土師質	皿	(11.8)	2.0	底部：回転糸切り 内外面：回転ナデ	B7類
	240	土師質	壺	12.8	21.9	粘土紐巻き上げ 内外面：口縁部 ヨコナデ	

SK2011

図面	番号	種別	器種	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴、文様	備考
18	241	染付	椀	11.0	6.0	高台端部露胎 外面：体部 粹内鳥・梅 高台内「太明年製」	肥前 18世紀前半～1780年
	242	染付	皿 手塩皿	(6.7)	1.7	糸切細工、高台端部露胎 外面：体部 折松葉 内面：菊(印判)	肥前 1690～1740年代
	243	染付	蓋 (椀)	8.8	2.7	つまみ端部露胎 外面：体部 蛸唐草 内面：口縁 花菱、底部 松竹梅	肥前 19世紀(1820年代)～ 幕末
	244	染付	蓋	7.8	2.3	内面口縁端部露胎 外面：体部 雷・竹	在地系 幕末
	245	染付	皿 手塩皿	(9.9)	2.5	型打ち成形、輪花、高台端部露胎 外面：体部 唐草 内面：口縁 花唐草、底部 松竹梅	肥前 19世紀～幕末

図面	番号	種別	器種	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴、文様	備考
18	246	染付	仏飯具	6.0	5.0	内面脚部露胎 外面：菊花	瀬戸・美濃系 19世紀
	247	染付	仏飯具	8.2	6.0	蛇ノ目高台（露胎） 外面：山水	肥前 18世紀前半～中葉
	248	施釉陶器	灯明具 ひょう そく	7.5	5.4	底部・内面露胎 底部：回転ヘラケズリ 釉：2.5Y7/2	在地系？ C1類
	249	施釉陶器	椀	6.3	4.1	高台端部露胎 釉：5Y8/2	
	250	施釉陶器	椀	—	—	外面体部下位～高台部露胎、回転 ヘラケズリ 釉：5YR1.7/1	肥前 17世紀前半～中葉

その他

図面	番号	種別	器種	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴、文様	備考
19	251	白磁	蓋物	(4.0)	1.5	口縁部・底部露胎 底部墨書「六九」	肥前系 18世紀後半～幕末
	252	施釉陶器	皿	(12.8)	3.4	内面底部目跡（砂目）3箇所 外面：体部下位～底部 回転ヘラ ケズリ痕顕著・（露胎） 釉：5GY7/1 高台内墨書「？」	肥前 1600～30年代
	253	染付	皿	25.6	4.5	化粧掛け、高台内露胎（砂熔着） 内面：口縁 花弁様の窓に花・ 雷、底部 鳳凰・竹・花	中国製（福建・広東地方 産） 16世紀末～17世紀初
	254	染付	皿	13.4	3.0	高台端部露胎 ハリ支え 外面：体部 唐草 内面：山水・雁・五弁花（印判）	肥前 1690年～18世紀前半
	255	施釉陶器	甕	(23.6)	22.2	粘土紐巻き上げ、外面鉄泥漿塗布、 口縁端部露胎、 内外面：回転ナデ 釉：内面 透明釉、外面 5Y4/2	丹波系

SP2001

図面	番号	種別	器種	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴、文様	備考
20	256	無釉陶器	土管	16.2	67.4	粘土板巻合わせ（内面に布目・吊 り紐痕跡） 内外面：受口部 回転ナデ 外面：筒部 ナデ	備前
	257	無釉陶器	土管	14.0	67.0	粘土板巻合わせ（内面に布目・綴 紐痕跡） 内外面：受口部 回転ナデ 外面：筒部 ナデ	備前
	258	無釉陶器	土管	9.5	49.5	粘土板巻合わせ（内面に布目・綴 紐痕跡） 内外面：受口部 回転ナデ 外面：筒部 ナデ	備前

中ノ町A地区
 SD3101

図面	番号	種別	器種	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴、文様	備考
21	259	白磁	紅皿	4.4	1.4	型押し成形、外面体・高台部露胎	肥前 18世紀
	260	白磁	紅皿	5.0	1.6	型押し成形、外面体・高台部露胎	肥前 18世紀
	261	白磁	紅皿	4.6	1.7	型押し成形、外面体・高台部露胎	肥前 18世紀
	262	白磁	蓋 (碗)	(9.9)	2.9	つまみ端部露胎	肥前 18世紀中葉前後(1780年 まで)
	263	白磁	碗	(8.2)	5.1	高台端部露胎	肥前 18世紀
	264	青磁染付	碗	(10.6)	—	口縁端部 鉄錆 内面：口縁部 花菱	肥前 18世紀前半～中葉
	265	青磁染付	碗	(12.0)	—	内面：口縁 花菱、底部 ?	肥前 18世紀後半
	266	青磁染付	碗	(11.2)	6.5	高台端部露胎 内面：口縁部 花菱、底部 五弁 花(印判) 外面：高台内 渦「福」	肥前 18世紀後半
	267	青磁染付	鉢	(18.2)	7.4	蛇ノ目凹形高台、高台端部露胎 内面：口縁 波濤、底部 障子に竹	肥前 18世紀後半
	268	青磁染付	皿	18.8	2.7	輪花、高台内 ハリ目跡(3箇所)、 高台端部露胎 外面：体部 唐草、高台内 二重 角枠「筒江」 内面：底部 双魚・貝・流水	肥前(山内町筒江窯) 18世紀後半
	269	染付	小杯	(6.0)	2.8	高台端部露胎 外面：体部 笹	肥前 18世紀
	270	染付	小杯	(6.4)	2.3	高台端部露胎 外面：体部 笹	肥前 18世紀
	271	染付	紅碗	(8.3)	3.7	高台端部露胎 外面：体部 「大□□老笹紅」	肥前 18世紀
	272	染付	碗	(9.5)	—	外面：体部 桜	肥前 18世紀前半～中葉
273	染付	碗	(9.5)	4.8	高台端部露胎 外面：体部 菊花	肥前 18世紀前半～中葉	

SD3101

図面	番 号	種 別	器 種	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴、文様	備 考
21	274	染 付	碗	11.5	—	口縁端部 鉄錆 外面：体部 丸（印判） 釉：全体に黄色味を帯びる	肥前 18世紀
	275	染 付	碗	(11.0)	5.8	高台端部露胎 外面：体部 草花、高台内 渦 「福」	肥前 18世紀中葉～末
	276	染 付	碗	(10.4)	5.0	高台端部露胎 外面：体部 松 内面：底部 五弁花（印判）	肥前 18世紀後半
	277	染 付	碗	—	—	高台端部露胎 外面：体部 草花 内面：底部 ?（印判）	肥前 18世紀中葉～末
	278	染 付	碗	8.2	—	外面：体部 蛸唐草・波 内面：口縁部 花菱	肥前 18世紀後半
	279	染 付	皿	(12.8)	—	内面底部蛇ノ目状釉ハギ 内面：口縁部 格子	肥前（波佐見系） 18世紀中葉～末
	280	白 磁	皿	—	—	内面底部蛇ノ目状釉ハギ、高台部 露胎（砂付着）	肥前 18世紀
22	281	染 付	蓋 (蓋物)	(9.0)	2.9	口縁部露胎 外面 体部 桔梗・野菊・蝶	肥前 1690年～18世紀前半
	282	染 付	蓋 (碗)	10.0	3.0	つまみ端部露胎 外面：体部 蓮弁・竹林 内面：口縁部 花菱・中央部 松 ?	肥前 18世紀後半
	283	染 付	皿	10.4	2.3	高台端部露胎 外面：体部 唐草 内面：体部 花唐草、底部 五弁花	肥前 18世紀後半
	284	染 付	皿	9.0	2.4	輪花、高台端部露胎 外面：口縁部 花唐草、体部 格 狭間 内面：体部 窓絵八宝、底部 花鳥	芙蓉手ミニチア
	285	染 付	瓶 油壺	(2.4)	—	内面露胎 外面：体部 ?	肥前 18世紀
	286	染 付	瓶	—	—	内面・高台端部露胎 外面：体部 唐草	肥前 18世紀
	287	染 付	水滴	—	2.3	型作り内面露胎 外面：印花（菊花）	肥前 18世紀
	288	施釉陶器	鉢	22.4	9.2	内面施釉 内外面：回転ナデ 釉：5Y3/2	丹波

SD3101

図面	番号	種別	器種	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴、文様	備考
22	289	無釉陶器	播鉢	24.4	9.8	外面底部に繊維状圧痕 外面：体部上位ユビオサエ後回転ナデ 内面：櫛描き条線（7本1単位） 外面口縁部下に熔着物	G5類
	290	無釉陶器	鉢	28.9	10.2	外面底部に繊維状圧痕 外面：回転ナデ 内面：櫛描き条線（7本1単位）	G4類

SD3101下層

図面	番号	種別	器種	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴、文様	備考
23	291	白磁	紅皿	5.0	1.8	型押し成形、外面体部下半～高台内露胎	肥前 18世紀
	292	染付	椀	7.4	3.9	高台端部露胎 外面：体部 水仙	肥前 18世紀中葉～末
	293	染付	椀	(8.8)	—	外面：体部 菊・紅葉（印判）	肥前 18世紀前半
	294	染付	椀	11.0	5.0	内面底部蛇ノ目状釉ハギ（砂熔着）、高台端部露胎（砂熔着） 外面：体部 梅	肥前 18世紀
	295	染付	椀	(10.4)	5.8	高台端部露胎 外面：体部 菊（印判）、高台内？	肥前 1690年～18世紀前半
	296	染付	皿	12.0	3.9	内面底部蛇ノ目状釉ハギ（砂熔着）、高台部露胎 外面：体部下位～高台部 回転ヘラケズリ痕顕著 内面：体部 ？	肥前 18世紀
	297	染付	鉢	(20.6)	9.5	高台端部露胎 外面：体部 唐草、高台内 「太明年製」 内面：体部 草・梅花（型紙摺） 底部 五弁花 漆継ぎ	肥前 18世紀前半
	298	染付	仏飯具	7.4	5.0	蛇ノ目高台（露胎） 外面：体部 鳥？	肥前 18世紀
	299	陶胎染付	椀	9.4	7.5	高台端部露胎（赤化） 外面：体部 山水	肥前 18世紀
	300	土師質（施釉）	皿 灯明具	7.0	1.4	底部 回転糸切り、外面露胎 内外面：回転ナデ 釉：7.5YR6/8 口縁端部スス付着	C1類

SD3101下層

図面	番号	種別	器種	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴、文様	備考
23	301	施釉陶器	碗	(10.0)	—	外面露胎（鉄泥漿塗布） 釉：透明釉	京焼系
	302	施釉陶器	碗	(11.2)	—	内外面：回転ナデ 釉：N8/	福岡県の可能性あり
	303	施釉陶器	碗	(9.3)	—	高台部露胎 外面：体部 回転ヘラケズリ 緑 ・赤上絵（笹） 釉：透明釉	京焼系 18世紀
	304	施釉陶器	碗	9.2	5.5	高台部露胎 外面：体部 鉄絵（柳） 釉：透明釉	京焼系 18世紀
	305	施釉陶器	碗	11.2	4.3	高台部露胎 内面：体部 緑・赤・黒上絵（杜若） 釉：透明釉	京焼系 18世紀
	306	施釉陶器	皿	—	—	高台部回転ヘラケズリ痕顯著、体部下位～高台部露胎、内面底部砂目跡（4箇所） 内外面：回転ナデ 釉：7.5Y7/2	肥前？ 17世紀前半
	307	無釉陶器	鉢	(12.4)	4.2	口縁部穿孔 内外面：回転ナデ	
	308	無釉陶器	鉢	(30.2)	—	外面：ユビオサエ後ナデ 内面：櫛描き条線（8本1単位）	丹波 C類
	309	土師質	蓋 (焼塩壺)	(8.2)	2.1	外面：ナデ 内面：細かい布目	
	310	土師質	皿 灯明具	(8.4)	1.5	口縁端部スス付着	A3類
	311	土師質	皿	(9.0)	1.4	外面：ユビオサエ 内面：口縁部 ヨコナデ	A3類
	312	土師質	皿 灯明具	(8.0)	1.2	内外面：回転ナデ 口縁端部スス付着	B6類
	313	土師質	皿 灯明具	(8.0)	1.1	内外面：回転ナデ	B5類
	314	土師質	鍋 焙烙	(31.4)	—	外面：口縁部 ヨコナデ、 内面：口縁部 ヨコナデ、体部ナデ	B4類
	315	土師質	壺	(20.0)	—	内外面：回転ナデ	

SD2102

図面	番号	種別	器種	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴、文様	備考
24	316	染付	碗 広東形	11.5	6.0	高台端部露胎 外面：体部 龍、高台内「？」 内面：底部 火焰宝珠？	肥前 1780年～19世紀初頭
	317	染付	碗 広東形	11.8	6.5	高台端部露胎 外面：体部 市松	肥前 1780年～19世紀初頭
	318	染付	碗	10.0	5.3	蛇ノ目高台様、高台端部露胎 外面：体部 岩・花他 外面：底部 宝（瓢箪）	肥前 1780年～1820年
	319	染付	碗	(10.0)	6.0	高台端部露胎 外面：体部 八卦、高台内「？」 内面：体部・八卦、底部 大極図	肥前 18世紀後半～19世紀初頭
	320	染付	碗	(14.6)	—	高台端部露胎 外面：体部 牡丹他	肥前 18世紀後半
	321	染付	碗	(9.0)	5.2	高台端部露胎 外面：体部 人物 内面：底部 ？	肥前 18世紀末～19世紀初頭
	322	染付	碗	—	—	高台端部露胎 外面：体部 草花・折れ松葉 内面：底部 五弁花（印判）	肥前 1780年～1800年
	323	染付	猪口	8.2	6.4	蛇ノ目凹形高台 外面：体部 蓮弁・蛸唐草 内面：口縁部 花菱、底部 ？	肥前 18世紀末～19世紀前半
	324	染付	皿	13.6	4.0	高台端部露胎 外面：体部 唐草、高台内 渦 「福」 内面：体部 菊、底部 五弁花 （印判）	肥前（波佐見系） 18世紀後半
	325	染付	皿	(13.2)	3.3	輪花、型打ち成形、口縁端部鉄錆、 蛇ノ目凹形高台 内面：底部 山水	肥前 18世紀末～19世紀前半
	326	施釉陶器	蓋	10.4	2.5	外面露胎 外面：底部 回転ヘラケズリ 釉：2.5Y5/33	在地系
	327	土師質 （施釉）	皿 灯明具	6.9	1.6	内面施釉、口縁端部スス付着 底部：回転糸切り、 内外面：回転ナデ 釉：7.5YR6/8	C1類
328	施釉陶器	碗	(8.9)	4.8	高台部露胎 外面体部・高台部 回転ヘラケズリ 釉：透明釉	京焼系	

SD2102

図面	番号	種別	器種	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴、文様	備考
24	329	施釉陶器	碗	9.2	5.0	内面底部砂目跡(5箇所)、外面体部下位・高台部露胎、外面体部・高台部 回転ヘラケズリ 外面体部 白泥下絵)・鉄上絵(鶴) 釉:5YR4/8	在地系(朝霧焼?)
	330	施釉陶器	碗	(9.6)	5.2	高台部露胎 外面体部・高台部 回転ヘラケズリ 釉:透明釉	萩?
	331	施釉陶器	碗	—	—	高台部露胎 外面体部・高台部 回転ヘラケズリ 釉:透明釉	萩?
	332	土師質	皿 灯明具	(10.8)	1.8	底部:回転糸切り 内外面:回転ナデ 口縁端部スス付着	B6類
	333	土師質	皿 灯明具	(11.4)	2.2	底部:回転糸切り 内外面:回転ナデ 口縁端部スス付着	B6類

SD2101

図面	番号	種別	器種	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴、文様	備考
25	334	白磁	紅皿	(4.8)	1.9	型押し成形、外面体部~高台部露胎 釉:透明釉	肥前 18世紀
	335	白磁	碗	(6.4)	3.3	高台端部露胎	肥前 18世紀
	336	白磁	碗	(11.7)	8.0	高台内露胎 外面:口縁部 沈線(3条) 外面体部下半~高台部 回転ヘラケズリ	肥前の可能性強い 17世紀?
	337	染付	碗	(7.2)	5.5	高台端部露胎 外面:体部 格子	肥前の可能性強い 1820年~幕末
	338	染付	碗	(8.0)	4.2	高台端部露胎 外面:体部 野菊 内面:底部 ?	瀬戸 幕末
	339	染付	碗	(10.6)	5.8	高台端部露胎 外面:体部 ?・蓮弁 内面:口縁部 横線 底部 五弁花	肥前系(肥前ではない可能性強い) 19世紀前半
	340	施釉陶器	蓋	9.4	1.3	受け口部露胎、施釉部分貫入 釉:7.5Y8/2	

SD2101

図面	番 号	種 別	器 種	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴、文様	備 考
25	341	土師質 (施釉)	皿	(6.2)	2.4	内面・外面口縁部施釉、底部回転糸切り 内外面：回転ナデ 釉：5YR6/8	C4類
	342	施釉陶器	椀	—	—	高台端部露胎 釉：透明釉	肥前 17世紀後半～18世紀前半 京焼風・呉器手
	343	施釉陶器	椀	7.4	5.0	高台端部露胎 外面：白泥漿（螺旋状） 釉：7.5Y6/3	京焼系
	344	施釉陶器	椀	(8.2)	4.4	高台部露胎、内外面貫入 釉：5Y6/3	京焼系 19世紀前半
	345	施釉陶器	椀	(8.4)	5.6	高台部露胎 外面：体部 赤・緑上絵（松） 釉：透明釉	京焼系
	346	施釉陶器	椀	9.0	6.0	高台部露胎 外面：体部 鉄絵（山水・「閑中日月長」） 釉：2.5GY8/1	在地系
	347	施釉陶器	火入れ?	10.8	13.5	底部脚張り付け（3足）、外面底部・内面体部下半露胎 内外面：回転ナデ、 外面：体部 瓢箪形透かし彫り、 鉄絵（瓢箪蔓・葉） 底部 印刻「朝霧」	在地系（朝霧焼）
	348	土師質	皿	(10.4)	2.0	底部糸切り 内外面：回転ナデ、	B7類
	349	土師質	皿	(10.3)	1.7	底部静止糸切り 内外面口縁部ヨコナデ	B7類

SE2101

図面	番 号	種 別	器 種	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴、文様	備 考
25	350	染 付	皿	(12.4)	3.4	内面底部蛇ノ目状釉ハギ 高台端部露胎（砂熔着） 内面：体部 斜格子	肥前 18世紀中葉～末
	351	染 付	椀	—	—	高台端部露胎、 外面：体部 石畳、高台内 二重 棹渦「福」	肥前 18世紀前半～中葉
	352	染 付	椀 広東形	(12.4)	6.8	高台端部露胎 外面：体部 笹・花・蝶 内面：口縁部 龍、底部 鷺	肥前 1780～19世紀初頭

SE2101

図面	番号	種別	器種	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴、文様	備考
25	353	無釉陶器	挿鉢	(34.0)	—	外面：口縁部 回転ナデ 内面：体部 櫛描き条線（6本1単位）	丹波焼 E類
	354	無釉陶器	挿鉢	(35.2)	—	外面：口縁部 回転ナデ、体部 回転ヘラケズリ 内面：体部 櫛描き条線（8本1単位）	G4類

SE2102

図面	番号	種別	器種	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴、文様	備考
26	355	青磁染付	蓋 (椀)	(10.0)	2.8	つまみ端部露胎 内面：口縁部 花菱、中央部 五弁花	肥前 18世紀後半
	356	染付	蓋 広東形	9.1	2.6	つまみ端部露胎 外面：体部 四方襷+波の市松 内面：中央部 花	肥前 1780年~19世紀初頭
	357	染付	椀	(14.6)	7.6	高台端部露胎 外面：体部 梅 内面：底部 ?	肥前 18世紀前半~1780年代
	358	染付	椀 広東形	(10.6)	—	外面：体部 椿	肥前 1780年~19世紀前半
	359	染付	椀	5.4	6.5	蛇ノ目様高台、高台端部露胎 外面：体部 五葉若葉重ね	肥前 18世紀後半~19世紀初頭
	360	染付	皿	(18.8)	2.9	高台端部露胎 外面：体部 唐草 内面：体部 籬に花、底部 五弁花	肥前 18世紀前半~中葉
	361	染付	皿	—	—	内面底部蛇ノ目状釉ハギ 外面体部下半露胎 内面：体部 ?	肥前 18世紀
	362	染付	皿 手塩皿	8.5	2.2	型打ち成形、輪花、高台端部露胎 外面：体部 唐草、底部「？」 内面：体部 蛸唐草、底部 松竹梅	肥前 18世紀末~19世紀前半
	363	染付	皿	11.7	2.5	蛇ノ目凹形高台、 外面：体部 丸・源氏香 内面：底部 芙蓉・秋草	肥前 18世紀後半~19世紀初頭
	364	瑠璃釉 染付	椀	7.4	7.8	高台端部露胎 外面：体部 瑠璃釉 内面：口縁部 草花	肥前系？ 19世紀

SE2102

図面	番号	種別	器種	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴、文様	備考
26	365	施釉陶器	椀	(9.2)	4.2	高台部露胎、貫入顕著 釉：5Y7/2	
	366	施釉陶器	椀	—	—	高台部露胎 外面：体部下半～高台部 回転ヘラケズリ、体部 鉄絵(?) 釉：透明釉	京焼系
	367	施釉陶器	椀	—	—	高台部露胎 釉：透明釉	京焼系
	368	施釉陶器	椀	(9.4)	5.3	高台部削り出し(露胎) 外面：体部 鉄絵(若杉) 釉：透明釉	京焼系 18世紀後半～19世紀初頭
	369	施釉陶器	椀	(9.8)	5.2	高台部削り出し(露胎) 外面：体部 鉄絵(若杉) 釉：透明釉	京焼系 18世紀後半～19世紀初頭
	370	土師質 (施釉)	皿 灯明具	10.5	2.0	回転糸切り、外面体部～底部露胎 内外面：回転ナデ、 内面：底部 印刻(「八木口」) 釉：5YR6/8 口縁端部スス付着	D3類
	371	土師質 (施釉)	皿 灯明具	11.1	2.5	回転糸切り、外面体部～底部露胎 内外面：回転ナデ、 内面：底部 印刻「明石口」 釉：5YR6/8 口縁端部スス付着	C2類
	372	施釉陶器	蓋 (土瓶)	10.2	3.8	内面・外面受け口部露胎 外面：体部 白泥漿描き(?) 釉：5Y5/4	在地系 18世紀後半～19世紀
	373	施釉陶器	蓋 (行平鍋)	14.8	2.5	外面露胎 外面：体部 トビガンナ、白泥漿 描き(蔓草)、鉄泥漿加彩 釉：2.5Y4/6	在地系 18世紀後半～19世紀
27	374	施釉陶器	土瓶	5.0	8.7	注口(3穴)・耳・足部張り付け、 外面下半～底部・口縁部露胎 回転ヘラケズリ 釉：10Y5/2	在地系 18世紀末～19世紀
	375	施釉陶器	土瓶	6.3	—	注口(3穴)、耳部張り付け、内面 一部・外面下半・口縁部露胎 外面：体部上半 条線、体部下半 回転ヘラケズリ 釉：5GY7/1	在地系 18世紀末～19世紀
	376	施釉陶器	土瓶	9.7	14.6	注口(3穴)、耳部張り付け、内面 下半・外面下半～底部露胎 外面：体部上半 トビガンナ、体 部下半～高台部 回転ヘラケズリ 釉：5YR3/6	在地系 19世紀

SE2102

図面	番号	種別	器種	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴、文様	備考
27	377	施釉陶器	徳利	2.9	20.5	粘土紐巻上げ、口縁部施釉 内外面：回転ナデ 外面：体部 白泥漿描き「船町・木津屋」 釉：7.5YR3/3	丹波？
	378	施釉陶器	徳利	3.9	—	内面口縁部・外面施釉 釉：7.5YR3/4	丹波
	379	施釉陶器	徳利	—	—	粘土紐巻上げ 内外面：回転ナデ 外面：体部 鉄泥漿塗布	丹波
	380	施釉陶器	甕	29.6	34.6	粘土紐巻上げ、外面底部露胎、内面底部熔着物付着 内外面：回転ナデ 釉：2.5YR4/6	
28	381	施釉陶器	鍋	18.7	7.5	片口・耳・足部貼り付け、口縁端部・外面底部露胎 釉：5YG6/1	在地系 19世紀
	382	無釉陶器	播鉢	—	—	内外面赤泥塗布 内面：櫛描き条線（9本一単位） 高台内 刻印（「上」）	堺？ 19世紀前半
	383	土師質	皿	(10.0)	1.9	回転糸切り 内外面：回転ナデ	B7類
	384	土師質	皿	(8.1)	1.5	回転糸切り 内外面：回転ナデ？	B6類
	385	土師質	鍋 焙烙	(29.8)	—	外面：口縁部 ヨコナデ、口縁部下位 ヘラケズリ（面取り） 内面：口縁部 ヨコナデ、底部ナデ	B2類
	386	土師質	鍋 焙烙	(33.4)	—	外面：口縁端部 回転ナデ、口縁部下位 ヘラケズリ（面取り） 内面：口縁部 回転ナデ 外面体部スス付着	387と同一個体 B4類
	387	土師質	鍋 焙烙	(34.0)	—	外面：口縁端部 回転ナデ、口縁部下位 ヘラケズリ（面取） 内面：口縁部 回転ナデ 外面体部スス付着	386と同一個体 B4類

SG2101

図面	番号	種別	器種	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴、文様	備考
29	388	白磁	紅皿	4.5	1.5	押し型成形、外面体部下半～高台部露胎	肥前 18世紀
	389	白磁	紅皿	4.8	1.5	押し型成形、外面体部下半～高台部露胎	肥前 18世紀後半～幕末
	390	白磁	小杯	(5.1)	2.5	高台端部露胎(熔着物)	肥前 18世紀か
	391	白磁	小杯	(7.4)	3.3	高台端部露胎(熔着物)	肥前 18世紀
	392	染付	猪口	4.6	3.4	底部露胎 外面：体部 松茸・若杉、底部 墨書「？」	肥前系？
	393	色絵	碗	8.0	—	外面：体部 赤絵(窓内蝶)	肥前系 19世紀か
	394	染付	碗	7.6	4.2	高台端部露胎 外面：体部 草・鳥	肥前 18世紀か
	395	染付	碗 端反形	(9.3)	4.4	高台端部露胎 外面：体部 鉄線唐草 内面：底部 ?	瀬戸・美濃系 幕末
	396	染付	碗	—	—	高台端部露胎 外面：体部 草花	肥前 18世紀
	397	染付	碗	10.0	5.1	高台端部露胎(砂付着)、内面底部 蛇ノ目状釉ハギ(砂付着) 外面：体部 雪輪梅樹	肥前 18世紀後半～19世紀初頭
	398	染付	仏飯具	—	—	蛇ノ目高台様、高台内露胎(赤化)	肥前 18世紀
	399	色絵	段重	6.6	2.9	口縁端部露胎、外面体部下位砂付着 外面：体部 染付(窓)、赤上絵 (?)	肥前 18世紀後半～19世紀
	400	染付	蓋 (蓋物)	12.2	—	つまみ部貼り付け、受け口部露胎 外面：体部 山水と四方禪の市松	肥前 18世紀後半～19世紀前
	401	染付	蓋 (端反形 碗)	9.4	3.1	つまみ端部露胎 内外面：一重網目	肥前系 1820年代～幕末
	402	染付	蓋 (碗)	10.2	2.9	つまみ端部露胎 外面：体部 松・岩 内面：体部 花菱・松	肥前 18世紀末～幕末
403	染付	蓋 (蓋物)	6.6	2.8	受け口部露胎 外面：口縁部 横線、体部 牡丹 ・竹・岩	肥前 19世紀	

SG2101

図面	番号	種別	器種	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴、文様	備考
29	404	染付	皿	11.7	3.4	蛇ノ目凹形高台（露胎）、内面底部足付ハマ溶着跡 外面：体部 雲？ 内面：底部 紅葉？	肥前系 1820年～幕末
	405	染付	瓶	1.9	—	内面体部露胎 外面：体部 蛸唐草	肥前 19世紀～幕末
	406	染付	瓶	—	—	内面体部・高台端部露胎 外面：体部 草花	肥前 19世紀～幕末
	407	土師質 （施釉）	皿 灯明具	5.7	1.1	外面体部～底部露胎、回転糸切り 内外面：回転ナデ 釉：5YR4/4	D2類
	408	土師質 （施釉）	皿 灯明具	5.9	1.1	外面体部～底部露胎、回転糸切り 内外面：回転ナデ 釉：5YR4/4	D2類
	409	施釉陶器	皿	10.8	2.0	外面体部～底部露胎、粗い貫入、 内面底部ハリ目跡（3箇所） 外面：体部 回転ナデ→体部下 回転ヘラケズリ 釉：5Y8/2	在地系 A類
	410	施釉陶器	椀	7.8	4.5	外面体部下位～高台部露胎、粗い 貫入 外面：体部下位～高台部回転ヘラ ケズリ 釉：7.5GY8/1	
	411	施釉陶器	椀？	12.2	4.3	外面体部～高台部露胎 外面：体部下位 回転ヘラケズリ 内面：赤・黒・緑上絵（松） 釉：透明釉	京焼系 18世紀後半～19世紀
	412	施釉陶器	皿	9.8	2.1	型作り、貼り付け高台、外面体部 ～高台部露胎（布目） 内面：印花（兎） 釉：5Y7/1	
	413	施釉陶器	土瓶	5.1	6.4	注口部貼り付け 外面：体部上半～口縁部 回転ナ デ、体部下～底部 回転ヘラケ ズリ、体部 釉描き（？） 釉：5YR4/6	在地系 19世紀
414	施釉陶器	蓋 （土瓶）	8.0	—	内面・受け口部露胎 外面：体部 三彩釉流し掛け 釉：2.5YR3/1、5G6/1、N8/	在地系 19世紀	

SG2101

図面	番号	種別	器種	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴、文様	備考
29	415	施釉陶器	蓋	10.0	2.5	外面露胎、つまみ部貼り付け 外面：底部 回転ヘラケズリ 内面：三彩釉流し掛け 釉：2.5YR3/1、5G6/1、N8/ 外面底部墨書「ロませロロ [] 文」	在地系
	416	施釉陶器	蓋	8.0	2.9	内面・受け口部露胎 外面：体部 白地鉄絵（草花） 内面：回転ナデ 釉：10Y8/1（白地）、5Y8/1（鉄絵）	在地形
	417	施釉陶器	蓋 （鍋）	(15.0)	—	内面施釉 外面：体部 トビガンナ、鉄泥漿 加彩 釉：10Y6/2	在地系 18世紀後半～19世紀
30	418	施釉陶器	植木鉢	16.0	12.2	外面体部下位～高台部露胎 外面：体部下位 回転ヘラケズリ 釉：7.5YR3/1	
	419	無釉陶器	甕?	—	—	外面：体部 貼花、陰刻、白泥漿 ・鉄泥漿加飾 内面：鉄泥漿塗付 泥漿：7.5R2/2、7.5Y8/1	肥前 17世紀末～18世紀
	420	無釉陶器	播鉢	—	—	口縁端部に沈線 外面：ナデ 内面：一回一条描き条線	丹波系 A類
	421	無釉陶器	播鉢	(21.2)	7.0	内面底部周縁に熔着物 外面：口縁部 沈線（2条）、回転 ナデ、体部 回転ナデ 内面：口縁端部 沈線（1条）、櫛 描き条線（10本1単位）	G4類
	422	無釉陶器	播鉢	(25.4)	—	外面：口縁部 沈線（2条）、回転 ナデ、体部 回転ナデ 内面：体部 櫛描き条線（12本1 単位）	G4類
	423	無釉陶器	播鉢	(29.6)	—	外面：口縁部 沈線（2条）、回転 ナデ、体部 回転ナデ 内面：体部 櫛描き条線（8条1単 位）	G4類

SK2124

図面	番 号	種 別	器 種	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴、文様	備 考
31	424	青磁染付	碗筒形	—	—	高台端部露胎	肥前 18世紀後半
	425	染 付	小杯	(5.3)	3.2	高台端部露胎 外面：体部 草花	肥前 18世紀
	426	染 付	小杯	6.5	2.5	高台端部露胎 外面：体部 笹	肥前 18世紀
	427	染 付	小杯	6.5	2.2	高台端部露胎 外面：体部 笹	肥前 18世紀
	428	染 付	小杯	8.1	3.6	高台端部露胎（砂熔着） 外面：体部「大坂新町お笹紅」	肥前 18世紀
	429	陶胎染付	碗	(8.0)	6.6	高台端部露胎（砂熔着） 外面：口縁部 如意頭つなぎ 体部 花・蝶	肥前 18世紀前半
	430	染 付	碗	—	—	高台端部露胎 外面：体部 ?（印判）	肥前 18世紀前半～中葉
	431	染 付	仏飯具	5.4	5.0	蛇ノ目高台様、底部露胎（赤化） 外面：杯部 ?	肥前 18世紀か
	432	染 付	瓶	(4.7)	10.5	高台部・内面露胎 外面：高台部 回転ヘラケズリ 外面：松竹梅	肥前 18世紀
	433	施釉陶器	碗	(10.0)	5.4	高台部露胎 外面：体部下半～底部 回転ヘラケズリ、体部 鉄絵（草花） 釉：透明釉	京焼系 18世紀
	434	施釉陶器	甕	(14.4)	—	粘土紐巻き上げ、 外面：体部 釉流し掛け 内面：体部 回転ナデ 釉：外面 5YR4/3、5YR2/1（流し掛け）、内面 7.5Y7/3	丹波
	435	無釉陶器	擂鉢	—	—	外面：口縁部 沈線（2条）、回転ナデ、体部 回転ヘラケズリ 内面：口縁部 沈線（1条）、体部 櫛描き条線（12条1単位）	G2類
	436	無釉陶器	土管	(8.1)	—	罫部貼り付け 外面：回転ナデ、鉄泥漿塗布 内面：回転ナデ	丹波

SK2124

図面	番号	種別	器種	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴、文様	備考
31	437	施釉陶器	甕	(23.4)	25.5	粘土紐巻き上げ、高台端部露胎、高台両側面・内面底部周縁砂付着、焼成後底部穿孔 外面：体部 白化粧、鉄絵（岩・蕨?）、体部下半 回転ヘラケズリ 内面：体部 回転ナデ、透明釉 釉：外面：鉄絵2.5Y3/3・5Y2/2 内面 5Y2/2	肥前 18世紀
	438	土師質	皿	(7.0)	1.5	回転糸切り 内外面：回転ナデ	B4類
	439	土師質	皿	(9.0)	1.6	回転糸切り 内外面：回転ナデ	B6類
	440	土師質	皿 灯明具	(9.0)	1.9	回転糸切り 内外面：回転ナデ 口縁端部スス付着	B7類
	441	土師質	皿 灯明具	(9.7)	1.7	回転糸切り 内外面：回転ナデ 口縁端部スス付着	B6類
	442	土師質	皿 灯明具	(10.5)	1.8	回転糸切り 内外面：回転ナデ 口縁端部スス付着	B5類

SK2159

図面	番号	種別	器種	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴、文様	備考
32	443	白磁	小碗	(7.5)	3.8	高台端部露胎	肥前 18世紀か
	444	染付	碗	(9.6)	6.9	高台端部露胎（砂熔着） 外面：体部 葡萄	肥前 1650~1660年代
	445	染付	瓶	1.6	9.9	高台端部・内面露胎 外面：体部 若松・草花	肥前 18世紀末~19世紀前半
	446	施釉陶器	碗	9.6	4.8	高台部露胎 内外面：白釉・黒釉（流し掛け） 釉：2.5GY8/1、10YR3/3	萩
	447	施釉陶器	皿	(24.4)	6.3	高台部露胎、身込み部に目跡 外面：体部下位~高台部 回転ヘラケズリ 内面：白釉地鉄絵（渦巻）	瀬戸・美濃系
	448	土師質	蓋 (焼塩壺)	7.1	1.7	胎土中に金雲母を含む 外面：体部 板状圧痕 内面：布目	

SK2172

図面	番号	種別	器種	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴、文様	備考
32	449	土師質	焼塩壺	(6.4)	9.5	外面：口縁部 回転ナデ、底部ナデ 内面：体部 ユビナデ（縦位） 外面体部 刻印「泉州麻生」	

SK2179

図面	番号	種別	器種	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴、文様	備考
32	450	染付	皿	31.8	5.6	高台端部露胎、高台内ハリ目跡 (6箇所) 外面：体部 花唐草 内面：体部 牡丹唐草 底部 山水 漆継ぎ	肥前（有田） 1680~1720年代

中ノ町B地区
SD2201

図面	番号	種別	器種	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴、文様	備考
33	452	染付	椀	(6.1)	5.4	高台端部露胎 外面：体部 草花	肥前（有田） 18世紀
	453	染付	椀	10.4	4.0	蛇ノ目高台、高台端部露胎、口縁 端部鉄錆	明治
	454	染付	椀	(10.9)	6.3	高台端部露胎（砂熔着） 外面：体部 連子格子 内面：口縁 波、底部 草	肥前系 1820年~幕末
	455	染付	皿	9.4	2.3	内面底部蛇ノ目状釉ハギ 高台端部露胎 内面：底部？	肥前 19世紀初~幕末

SD2101

図面	番号	種別	器種	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴、文様	備考
33	456	染付	蓋 (椀)	9.4	2.7	つまみ端部露胎 外面：つまみ部内 二重粹渦「福」、 体部 牡丹 内面：口縁・花菱、底部 五弁花	肥前 18世紀前半~中葉
	457	染付	椀	10.3	5.9	高台端部露胎 外面：体部・牡丹、高台内 二重 粹渦「福」 内面：口縁 花菱、底部 五弁花	肥前 18世紀前半~中葉
	458	染付	椀	(9.8)	5.0	高台端部露胎 外面：体部 折松葉・菊花(印判)	肥前 18世紀中葉~末

SD3201

図面	番号	種別	器種	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴、文様	備考
33	459	染付	猪口	(7.4)	5.7	高台端部露胎 外面：体部 花	肥前 18世紀
	460	施釉陶器	桶	(30.0)	26.5	粘土紐巻き上げ、内面施釉・外面 体部鉄泥漿塗布、鉄釉流し掛け 外面：体部 陰刻（波状文）、回 転ナデ 内面：回転ナデ 釉：外面 2.5Y3/3（流し掛け釉） 内面7.5Y5/2	丹波

SD3202

図面	番号	種別	器種	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴、文様	備考
34	461	白磁	紅皿	4.8	1.3	型押し成形、外面体部～高台部露胎	肥前 18世紀後半～幕末
	462	青磁	香炉	(11.7)	—	内面体部下半露胎、外面体部貼花 (梅)、白化粧を施した後青磁釉を 施す 内面：回転ナデ	肥前 17世紀後半～18世紀 特殊な器形
	463	染付	小杯	(5.9)	3.9	外面体部下半～高台部露胎 外面：高台部回転ヘラケズリ痕顕 著 体部：「寿」、鎬（ヘラ彫）	肥前 1630年～40年代
	464	染付	小杯	(6.3)	2.3	高台端部露胎 外面：体部 篋	肥前 18世紀
	465	染付	瓶	—	—	高台端部・内面露胎 外面：体部下半 回転ヘラケズリ 体部 草 内面：回転ナデ	肥前系 18世紀中葉～19世紀初
	466	青磁染付	碗 湯呑用	—	—	高台端部露胎 内面：底部 五弁花（印判） 外面：青磁釉	肥前 18世紀後半
	467	染付	碗 湯呑用	(7.6)	5.8	高台端部露胎（赤化） 外面：体部 花・蝶 内面：底部 五弁花（印判）	肥前 18世紀後半
	468	染付	碗	(8.0)	4.6	高台端部露胎 外面：体部 菊花（印判）	肥前 18世紀前半～中葉
	469	染付	碗	9.8	5.2	高台端部露胎 外面：体部 二重網目、高台内 二重柶渦「福」 内面：体部 一重網目、底部 菊花	肥前 18世紀前半～中葉
	470	染付	碗	(9.0)	5.1	高台端部露胎 外面：体部 井桁・桐（印判） 内面：底部 五弁花？	肥前 18世紀中葉～後半
	471	白磁？	皿	—	—	高台端部目跡（3箇所）	

SD3202

図面	番号	種別	器種	口径cm	器高cm	成形・調整技法の特徴、文様	備考
34	472	染付	蓋 (碗)	10.2	2.9	つまみ端部露胎 外面：つまみ部脇 蓮弁、体部 卍・角「福」 内面：口縁・花菱、中央部 角「福」	肥前（嬉野町吉田窯か） 18世紀後半～19世紀初頭
	473	染付	碗	(11.1)	5.8	高台端部露胎 外面：高台部脇 蓮弁、体部 卍 ・角「福」 内面：口縁・花菱、底部 角「福」	肥前（嬉野町吉田窯か） 18世紀後半～19世紀初頭
	474	染付	碗蓋	9.6	2.8	つまみ端部露胎 外面：つまみ部内 二重枠「福」 体部 牡丹 内面：口縁 花菱、底部 五弁花	肥前 18世紀前半～中葉
35	475	染付	蓋 (蓋物)	8.0	2.7	つまみ部 ロクロ削り出し、受け 口部露胎 外面：体部 丸文、舟 遊、柳に人物、騎馬	肥前系 18世紀末～19世紀前半
	476	色絵磁器	蓋	(7.2)	2.0	つまみ端部露胎 外面：つまみ部内・体部 色絵 (鳥・亀甲) 内面：中央部 色絵(?)	肥前でない可能性 19世紀前半～幕末
	477	染付	皿	12.0	2.6	高台端部露胎(砂熔着) 内面：底部 紅葉(印判)、菊花?	肥前 1690年～18世紀前半
	478	染付	皿	(13.2)	2.8	高台端部露胎(砂熔着) 外面：体部 ? 内面：体部 雪輪、底部 四弁花	肥前 1690年～18世紀前半
	479	施釉陶器	碗	—	—	高台部ヘラケズリ痕顕著、高台部 露胎 釉：7.5GY7/1	肥前 1600年～1630年
	480	施釉陶器	碗	(10.8)	6.3	高台端部露胎 内外面：体部 刷毛目 釉：2.5Y5/3	肥前 17世紀末～18世紀前半
	481	施釉陶器	碗	(11.7)	5.4	高台部露胎 外面：体部 刷毛目 内面：体部 打刷毛目 釉：5Y8/3 高台内墨書「□□仙」	肥前 17世紀末～18世紀前半
	482	施釉陶器	碗	9.3	5.4	高台部露胎 外面：体部下半～高台部 回転ヘ ラケズリ 内外面：体部 藁灰釉・黒釉流し 掛け 釉：2.5GY8/1、5Y4/2	萩
	483	施釉陶器	碗	(12.3)	6.8	高台部貼り付け、外面体部下位～ 高台部露胎 内外面：白釉・黒釉流し掛け 釉：7.5Y8/2、N1.5/	瀬戸・美濃